
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S ~N o . Z e r o ~

Theater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS～No・Zero～

【Zコード】

N4333W

【作者名】

Theater

【あらすじ】

機動六課に異動してきた1人の魔導師。強くて優しくて面倒見の良い青年。だが、どこか人と距離を置こうとする。そんな、青年と彼女たちの物語。

プロローグ（前書き）

これから、始まる物語に彼は、何を想つ。

プロローグ

「刻印NO.9 護送体制に入りました。」

「ふん。」

薄暗い部屋の中、1人の男が空間モニターで、機動六課の活躍を別のモニターに映っている女性と話しながら見ていた。

「追撃戦力を送りますか？」

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ。それにしても、この案件はやはり、すばらしい。君のそう思つだろ？」

「そうですね。」

男の後ろには、1人の青年がいた。青年は、男の問いに無表情で答えた。

「私の研究にとって、興味深い素材がそろつていろいろえに・・・フツ！」

モニターに、フェイトとエリオの2人が、映ると男は不敵に笑つ

た。

「この子たち、生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れ
るチャンスがあるのでから。」

「……では、ドクター。私は、そろそろ任務に就きます。」

「そうだな、では、よろしく頼むぞゼロ。フフフッ はははははは
はー。」

プロローグ（後書き）

どうも、初めましての方も、『存じの方もTheaterです。

何か、思いついたので勢いだけで始まりました。

これらの作品もお願いします。

第1話 疑惑の魔導師（前書き）

異動してきた魔導師にはやては、疑惑を抱く。

果たして、彼は敵か味方か。

第1話 疑惑の魔導師

「うへん・・・

「どうしたんですか？はやてちゃん？」

機動六課部隊長八神はやて。彼女は、今ものすゞく悩んでいた。そして、その姿を見てはやてのコニゾンデバイス“リインフォース？”が不思議そうに聞いてきた。

「うん・・・ちょっとこれがな・・・

はやは、リインに悩みの種である物を見せた。それは、どうやら何かの資料のようだった。

「これは・・・新しく異動していく人の資料ですか？」

「そうなんよ。ちょっとこのじのじの見てくれるか？」

「えつと・・・えええええーこれってー

はやての指をひとじりを見たリインは、声を上げて驚いた。

「はやてちゃん！」これは？「

「うん。」Jの人、レジアス中将の推薦なんよ。」

「これが、はやての悩み事だつた。機動六課、主にはやてを嫌つて
いるレジアスの推薦。そこから異動してくる人物となれば、いろいろ
考へてしまつ。

「スパイ……なんかな？」

その疑念は、どうしても捨てきれなかつた。無論、あなたはスパイ
ですか？なんて聞けるわけがない。しかも、もし違つていたら相
手に失礼だ。なので、はやては頭を悩ませた。

「ゼロ・レスティア一等陸尉か……

「那人、いつ来るんですか？」

「今日や。」

「今日ですか！？」

はやてが、頭を悩ませている頃、機動六課の隊舎外に1人の青年が立っていた。

「…」が、機動六課・・・

くマスター、時間に多少遅れてしまいます。急いだ方が、よろしいかと・・・

どこからか、女性の声が聞こえてきた。その正体は、彼が胸元に下げているひし形でクリスタルタイプのインテリジェントデバイス“ステラ”だった。

「そうだな。急ぐか・・・」

青年は、隊舎内に入った。しかし、すぐに問題が起こった。

「部隊長室つてどこにあるんだ?」

青年は、迷子になっていた。隊舎の中に入り、歩いていたら部隊長室の場所を知らない事に気づき、誰かに聞こうかと思ったが、運悪く誰もそばにいなかつた。

「困った・・・早くいかなあやならなこのい・・・」

「あの～どうしました？」

「ん？」

突然、声を掛けられた青年は、声のした方を見た。すると、そこには髪をサイドボニーにした女性がいた。

「えっと・・・部隊長室に行きたいんですけど、迷ってしまいました・・・」

「せうなんですか？えっと・・・用件は？」

「本日付けで、機動六課に異動になりましたゼロ・レスティア一等陸尉であります。」

ゼロは、敬礼をし女性に名乗った。

「高町なのは一等空尉です。では、部隊長室に案内しますね。いらっしゃいます。」

ゼロは、なほに案内され、部隊長室に向かった。

「遅い・・・着任時間もつ2時間も過ぎてる・・・」

「はやて・・・とつあえず落ち着いて。」

着任時間になつても現れないゼロにはやはては、イライラしていた。そして、はやてに呼ばれ部隊長室にいたフェイトが、それを宥めていた。

「2時間やで！2時間！遅刻にもほどがあるやん！」

「ほら、何かあつたのかもしねないし・・・」

「それにしたつて連絡くらうするのが、普通やん！」

はやての怒りが爆発しそうになる直前、部隊長室のドアが開いた。

「はやてちゃん。今日付けで異動してきた人を連れてきたよ。」

それを聞いたフェイトは、やつとこの状態から解放されたと安堵した。

「本日付けで、機動六課に異動してきましたゼロ・レスティア一等陸尉であります。」

ゼロは、はやての前に立ち敬礼をしながら名前と階級を言った。

「そんで、何でこんなに遅れたんや?」

「めかみをピクピクさせながら、はやてはゼロに聞いた。それを見たゼロは、内心焦りながら答える。

「すみません。ここに来るまでに迷ってしまった・・・」

「ほう・・・そつか。それは、大変やつたな。」

「はー・・・それはもう・・・」

「「ははははは」」

はやてとゼロは、お互いに笑った。しかし、はやての皿はまつたく笑つていなかつた。

「ふやけんなやーー何が、迷つてしまひたやーそんな言い訳が通じると思つとんのか!?」

「せやてひやん、落ち着いて。」

「はやて、ダメだよ。」

ゼロに掴みかかるつとあるのをなのはとフロイトが止めた。それから、しばらくしてせやてが落ち着きを取り戻した。

「はあはあはあ・・・まあええわ。それより、君に聞きたい事がある。」

「スペイなのか?・と聞つ事ですか?」

「なつ!・なんで!・?」

はやては、言いたいことを先に言われ驚いた。そして、どうしてそれをと黒つ顔をしていた。

「私が、レジアス中将の推薦で来たと分かれば、まあ一番に疑うところですからね。」

「それで、どうなんや?」

「違いますよ。当然のことながら。」

「嘘やないな?」

「はい。私は、レジアス中将のスパイではありません。」

「わかつたわ。信用する。」

ゼロの言い切った顔を見てはやては、ゼロを信用することにした。

「それじゃあ、ゼロ君。これから、よろしく頼むな。」

「おまえがおまかせしておる事多し。」

はやてビゼーは、和解の意味を込めて握手をした。

第1話 疑惑の魔導師（後書き）

はい！第1話でした。

何かいきなり、思いついて書いてしました。プロローグを見ればわかるように

今回は、スカさんサイドの主人公です。

敵側と云つことで、まだどうなるかわかりませんが、とにかくがんばります。

では次回、第2話で会いましょう。

第2話 実力（前書き）

実力を示すため模擬戦をすることに

果たして相手は・・・

第2話 実力

はやてからの疑いがなくなり、ゼロは一安心していた。それから、はやてに機動六課での担当の説明を受けていた。

「それじゃあ、ゼロ君はフロイトかやんと同ジライトーンング分隊に入つてもいいで。」

「わかりました。それでは、よひじくお願ひします、ハラオウン隊長。」

「そんな堅苦しこ呼び方じゃなくて、フロイトで良じよ。」

フロイトは、ゼロにハラオウンではなく、フロイトと碎けた感じでいいと囁つてきた。

「どうが・・・」

「やつだよ。私もなのはでこよ。」

「私も、はやてでえんで。それに、ゼロ君の方が年上やし、敬語もなしでな。」

なのはとはやても呼び捨てで良いし、敬語もなしと囁つてきた。ゼロは、やう言われ困つた。何とかそれだけはと断つたが、

押し切られてしまい結局3人の言ひとおりに敬語なしの呼び捨てにすることになった。

「わかった。それじゃあ、ようしひなのは、フロイト、はやで。」

「「「うん。」「」」

それから、はやでとは一端別れ今度は、フォワードの4人にところになのははとフロイトに連れられゼロは向かっていた。

「ヴィータちゃん！」

「おっなのは、終わったのか？」

「うん。それでねこっちが、新しく来たゼロ君だよ。」

「初めまして、ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

「おーーー、ヴィータ二等空尉だ。」

ゼロは、HTARNALロリータ」と、ヴィータにあこがれつつある。

「おい！今なんか失礼なことを考えなかつたか？」

「いいえ、別に・・・」

ゼロは、目をそらしながら否定をする。だが、ヴィータの疑いの眼差しは続いていた。それから、訓練が一時休止にして、ゼロの紹介のためにフォワードの4人を集めた。

「本日付けで機動六課に異動してきました、ゼロ・レスティア一等陸尉です。よろしくお願ひします。」

「「「「よろしくお願ひします。」「「」

「えつと…ゼロには、ライティング分隊の隊長補佐をやつてもらいます。なので、ゼロのはリオとキャロの訓練を見てもらつ」とになります。」

「よろしくね。リオ、キャロ。」

「「はい。」

ライティング分隊隊長補佐。それが、ゼロがはやてに言われた担当だつた。フェイトが、執務官の仕事で機動六課を空けることがあり、しかも残つた副隊長は教えることが、苦手と云つことでゼロが隊長補佐といつことになつた。

「それじゃあ、ゼロ君の実力を見せてもらいたいんだけど……」

「それは、私に任せてもらつ。」

「シグナム。」

そこに来たのは、ライトニング分隊副隊長シグナムだった。

「あなたが、シグナム副隊長ですか。いいですよ、お相手いたします。」

「それじゃあ、ゼロ君の相手はシグナムさんということでお二人とも準備をお願い。」

そして、ゼロとシグナムは訓練場の真ん中に来た。すでに、シグナムはセットアップを終えていたので後はゼロだけだった。

「ステラ。セットアップ！」

← スタンバイ・レディ →

ゼロがセットアップをしたのを確認してなのはが、開始の合図をする。

「レディ・ゴー！」

「はあああああああ！」

開始と同時にシグナムが、ゼロに向かって突撃してきた。だが、ゼロは一步も動く様子がない。それに対してもシグナムは、構つことなくレヴァンティンを振り下ろした。

「ええええええええ！ ちょっと一大丈夫なあの人！」

「なんで避けないの！」

フォワードを始めとする見物していた全員が目を見開いて驚いた。そして、シグナムの攻撃によって舞っていた土煙が晴ってきた。

「えっ！ あれって……」

土煙が完全に晴れてシグナムたちの姿が見えた。すると、そこには映っていた光景は……

「結構重い一撃ですね。シグナム副隊長。」

「おまえこそ。なかなかだな。」

そこには、レヴァンティンがゼロに当たる直前で停止させているシグナムの姿だった。

「一体・・どうなつてゐる。体が・・動かない・・・」

「無駄ですよ。いぐら足掻いたところで動きませんよ。なので・・・」

「

ゼロは、シグナムの首筋にデバイスを突き付けた。

「降参してください。」

「くつ・・・私がこんなに簡単に負けるなんて・・・」

「アリまでー勝者ゼロ君ー」

なのはの「ホールでゼロの実力を試すための模擬戦は終了した。腑に落ちないと言つたシグナムを残して。

「・・・あのシグナム副隊長が1分も経たずに負けた・・・」

「すうじー・ゼロさんすう」

「すうじー過ぎでしょ・・・」

「わあー」

上からスバル、エリオ、ティアナ、キャロの順番だ。フォワードの4人は圧倒的な強さのゼロにただ驚くことしかできなかつた。しかし、それは隊長陣も同じだつた。

「マジかよ・・あのシグナムが・・・」

「信じられない・・・」

シグナムが、あんな簡単に負けたことは、やっぱり信じられない事だつた。

「どうでしたか?」

「あつうん・・・」

「ん?」

ゼロは、模擬戦の結果がどうだつたか聞いたが、みんな何とも言えない顔をしていた。

「レストラン!」

「はい?」

「説明してもいいですか？」

「えっと……」

シグナムに攻め寄られ、ゼロは後ずさつた。シグナムが言った説明しろとは、たぶん急に体が動かなくなつた事に対してだろうとゼロは思った。

「言わなきゃダメですか？」

「ダメだ！」

「ゼロ君、私たちも知りたいな。」

「「うん、うん。」」

「……わかりました。お話しします。」

第2話 実力（後書き）

どうも、Theaterです。

模擬戦でシグナムを瞬殺したゼロですが、ここで軽く設定を公開します。

ゼロ・レスティア

所属：機動六課ライトニング分隊隊長補佐（異動前、地上本部レジ
アス中将直轄部隊）

階級：一等陸尉（一等空尉の階級も持っているため空戦も可能）

魔法術式：ミッドチルダ式・陸戦AA（空戦AAA+）

デバイス：インテリジェントデバイス“ステラ”

モード1：杖型

モード2：戟型（魔力刃ではなく実体刃）

モード3：？

レジアス中将の推薦で機動六課に異動。しかし、その正体はジェイ・スカリエットが送り込んだスパイ。

今所こんな感じでしそうか。それと、補足をしますとステラのモード2の戦型

ですが、恋姫無双の恋の戦をモード2にしています。それに伴つてバリアジャケツトも恋の服を男用にした感じでお願いします。

それでは次回、第3話で会いましょう。

第3話 レアスキル（前書き）

ゼロの能力の秘密が明らかに

第3話 レアスキル

「それでは、話しますね。」

シグナムとの模擬戦の後、シグナムを瞬殺できた理由をみんなに聞かれ、話すことになつたゼロ。そして今その説明に入るところだつた。

「簡単に言つておきたいことがあります。」 キイイイン

「な、なんだ？ 体が、急に・・わあああ！」

「なつ？ シグナム！ こっち来んな！」

シグナムが、急にヴィータの方に走り出しrevアンティンを振り下ろした。だが、間一髪でヴィータはそれは避ける事が出来た。

「シグナム！ てめえ、あたしを殺す氣か！」

「ち、違つて一体が勝手に・・・」

「ゼロ君。ふざけるのはその辺でやめてくれないかな？」

「やりますね。」

明らかに怒っているのはこ^ニにわざふざけるのをやめた。

「見て頂いたとおり、これが私のレアスキル“人形使い”です。」

「ドールマスター……」

「はい。能力は有機物、無機物を問わず、自由に操れるのです。さつきの模擬戦の時もシグナム副隊長をドールマスターで操り、動きを止めたということです。」

「なるほどな。せやつたら何で資料にそのことが書いてへんかったん?」

「八神部隊長……」

「……」に、はやてがやつてきて、ゼロに聞いてきた。

「レアスキル」と、私は知らんかったよ。」

「書いてませんでしたか?おかしいですね……」

「まあええ。それで、ほかに隠してる」とはないんか?」

「別に隠してたわけじゃ……あります。」

「ならええわ。」

はやては、納得をしたようだった。

「それじゃあ、訓練再開しようか。」

「「「「はいー」「」「」「」

「ゼロ君はどうする?」

「まだ、部屋の片づけとかあるから私はこれで。」

「うん、わかった。」

「えっと…これをここに置いてと…・・・」

↙ マスター、これがまだここを願いします ↘

訓練場から戻り、浴室の片づけをしているゼロ。ステラに協力してもいい、そんなに時間が係ることなく片づけは終わった。

「わひど、これで止づかぬ終わりと……あとま・・あいつも
会つておほか。えつと・・・」ペッ

『はーい、何やゼロ君。』

「これから、地上本部へ行きたいのですが、よひじですか?」

『ん?別にええけど。びつしたん?』

「少し、用事ができまして。」

『うふ。わかつたわ。』

「はい。それでま。」

せやとの通信を切つて、ゼロ君は地上本部へと向かった。

「失礼します。」

地上本部に着いたゼロはある人物の下を訪れていた。ゼロが部屋に入るとそこにいたのは

「初めまして、レジアス中将。ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

「貴様が、ゼロか。話は聞いている、まあ座れ。」

「はい。失礼ます。」

部屋の中にいたのは、地上本部総司令レジアス・ガイズ中将だった。

「それで、どうだつた。機動六課にはもう顔は出したのだろう。」

「はい。正直に言いますと部隊長を始めとする全員が甘いですね。」

ゼロは、機動六課で感じたことを話し始めた。

「ほとんどが身内や知り合いで構成された部隊だけあって、まるで遊んでいるかのようですね。」

「ふはははー言つじやないか。そのとおりだ、あの小娘が犯罪者の分際で・・・」

「今といひ、目立つた動きはありませんが、引き続き監視を続けます。」

「ああ、精々がんばつて働いてもらおつか。」

「はい。それでは、失礼いたします。」

ゼロは、一礼を部屋を出た。

「ふつ、八神はやてを犯罪者扱いをしておいて、そいつは自分は何をやつているのや。」

不敵な笑みを浮かベゼロは、その場を後にし機動六課の隊舎に帰ろうとした。

「兄さん!」

「ん?」

帰ろうと地上本部をから出よつとした瞬間、誰かに声を掛けられた。ゼロが振り向くとそこには、1人の女性局員がいた。

「ヅウーH・・・」

「久しぶり兄さん?」

「ああ、久しぶりだなヅウーH。」

「Hには何が用事?」

「まあな。でも、もう終わつたよ。」

ゼロがそう言つて、ヅウーHは一ヶ口と笑つてゼロの腕を取つてきた。

「それじゃあ、今から時間ある? あるなら、ちよつと私に付き合つて?」

「はあ、わかつたよ。かわいい妹ためだ。付き合つてあげるよ。」

やれやれと言つた感じでゼロはヅウーHに付合つて行つた。

「それで、機動六課に潜入してどうだった？」

「うん。最初は、疑われたけどね。でも、今は何とか信用されてるよ。」

「わい。」

地上本部を出て、ゼロとデューHは街へと来ていた。そして、適当な店に入り任務の話をしていた。

「デューH、おまえのまつばづつなんだ？」

「わいね。まあまあかしら・・・」

「そう言えば聞いたぞ。おまえ、男性局員から絶大の人気らしいな。告白もよくされるとか。」

「なつーなんでそんなこと知つてるのー。」

ゼロの意外な発言にデューHは驚いた。

「違うからね！勘違いしないでね。告白は全部断つてるからー。誰とも付き合つてなんかいないからー。」

「え・・いや・・・・・」

「本當だから！信じて！」

「うん、わかつた。信じるよ。」

もののすゞい剣幕のドゥーハにゼロは、頷くしかなかつた。

「はあ、よかつた・・・」

「ドウ一工? 何もそんな必死に否定しなくても・・・」

たで！・・・兄さんに勘違しきれなくないし・・・」

ん? 何たって?

「何でもない！」

それと、アカーハはいつぽを向いてしまった。

「ドウーハ、ほら機嫌直せつて。」 なでなで

「ん／／／／／／／／／／／／」

ゼロに頭を撫でられドゥーワは照れたように俯いた。

「セヒト、それじやあそひそろ行くべよ。」

「え? もう?」

「あまり、機動六課を離れてるわけには行かないからな。」

「うん、わかった。じゃあ、またね。」

「うん、またね。」

そして、その夜。ゼロは血圧で定時報告をしていた。

『どうだねゼロ。状況は?』

「はい。今のところ、順調ですドクター。」

『やうか。なら、このまま頼むゼロ。』

「了解しましたドクター。」

「バシ

通信を切つて、ゼロは物思いに耽つた。ゼロの機動六課での一日はこうして終わった。

第3話 レアスキル（後書き）

はい、どうも。Theaterです。

ドゥーエが可愛いですね。本来はこんなキャラではないんですが、ゼロとの関係上、こいつした方がおもしろいとthoughtして。

それと、ゼロのことですけど少し解説をします。まあ、ドゥーエを妹と言つてゐるあたりで、わかると思いますけどゼロは戦闘機人です。ただし、魔法を使つてますから人造魔導師を素体としています。

それと、ドールマスターですけど少し解説をします。

【人形使い】
ドールマスター

指先から魔力を元にした特殊な糸を出し、有機物、無機物を問わず

支配下における」

とができる。人を操るさいには、精神も支配することもできる。操られる範囲に制限はなく次元間を超えても効果は続く。

まずは、こんなところです。まあ、糸と言つても本当に糸つてわけないです。あくまで比喩表現です。それと、ドールマスターには他にも能力があります、それはまたの機会に。

では次回、第4話で会いましょう。

第4話 もう一つの能力（前書き）

ゼロが来て初めての任務が始まる。

第4話 もう一つの能力

ミットチルダ 首都南東地区

その上空を一機のヘリが飛んでいた。

「ほんなら、改めてここまでの流れと今回の任務のおさらいや。」

ヘリの中にいたのは、機動六課のフォワードと隊長陣だった。そして、これから任務に向かう途中のようだった。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者及びレリックの収集者は現状ではこの男。」

はやては、空閑モニターを出した。すると、そこには一人の男が映っていた。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者ジェイル・スカリエツティの線を中心に捜査を進める。」

「「」うちの捜査は、主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね。」

フェイトが、フォワードの4人を見て言った。

「「「「は」」」

「そして、今日これから向かう先がここホテル・アグスタ。」

リインがふわふわとモニターの前に飛んでモニターを切り替えた。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護それが今日のお仕事ね。」

「取引許可の出でいるロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高いことと、私たちが警備に呼ばれたです。」

「この手の大型オークションは、密輸取引の隠れ蓑になつたりするし、いろいろ油断は禁物だよ。」

「現場には、昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長他数名の隊員が張つてくれてる。」

「私たちは、建物の中の警備に回るから、前線は副隊長の指示に従つてね。」

「「「「は」」」

「あの、シャマル先生。」

するとキャロがシャマルに手をあげて質問をした。

「さっきから気になつてなつてたんですけど、その箱って?..」

キャロは、シャマルの足元にある4つの箱を指とした。

「ん?ああ、これ。ふふつ隊長だけのお仕事着。」

「はあ~、落ち着かない。」

ホテル・アグスタについていた機動六課のメンバー。そして、ついたと同時にゼロはシャマルに着替えを強要され現在、ゼロはタキシード姿をしていた。

「おまたせやゼロ君。」

溜息をついていたが、後ろから声を掛けられた。そして、振り返るとアリエードレス姿のなのはたちがいた。

「…………」

「あの、『あんね待たせちゃって。』

ゼロが無言なので怒っているのかと思ったフロイトが申し訳なさをうに謝った。

「あ、いや。それほど待つてないよ。大丈夫。」

「本当に?」

「なんや、黙つとつたけど……」

「ああ、それは……」

ゼロは、何か言つてしゃうとしていた。

「どうしたの?」

「えっと……その……綺麗だなと思つて……」

「えつ？」

「なのほもフロイトもほやても、とても綺麗だよ。」

ゼロに綺麗だと言われ、3人は顔を真っ赤にした。

「あ、ありがとうございます。」

べ
別に

ゼロも負けないほど顔を真っ赤にしていた。

「さて、それではございかな。」

それから、ゼロはなのはたちと別れ、一人で会場内を周つていた。

人気のない場所に来るとゼロは、本来の任務を始めたことにした。

「ドールマスターのもう一つの能力《ファミリアードール》。」
キイイイイイイ

ゼロが、そう口にすると目の前に1つの魔法陣が浮かび上がった。そして、その魔法陣からだんだんと人型が形成されてきた。人型が、完成するとそこにはもう1人ゼロがいた。

「よし、それじゃあ後は頼んだ。」

「わかった。」

そして、ゼロはその場から姿を消した。

その頃、ホテル・アグスターの近辺の森の中に1人の男と少女がいた。

「あそこか。おまえの探し物はここにはないのだな。」

男が少女に向かつて言ひ、「少女は男をじつと見ていた。

「何か気になるのか？」

「うん。」

少女がやつて言つた瞬間、ビニからか一匹の虫が飛んできた。少女が人差し指を立てると虫はビニに止まつた。

「ドクターのおもひやが近づいてきてるつて。」

「相変わらずだなルー。」

「ん？」

少女と男が見るとビニはゼロがいた。

少女は、ゼロとわかると駆と繋いでいた手を離しゼロに抱きついてきた。

「ゼロ。」

「ゼロか。来ていたのか。」

「ああ、ゼスト。」

「確か今は潜入をしているのではなかつたか？」

「大丈夫だ。向こうには人形を置いて来たから。」

ゼロは、抱きついてきた少女ルーテシアの頭を撫でながら言った。

「さて、そろそろ行こうか。」

「一いちじゅう、ライトニング〇五。シャマルさん聞こえますか？」

『はい、聞こえます。なに、ゼロ君？』

「私もシグナム副隊長同様に前線に出たいのですが、ようじいでしょつか？」

現在、ホテル・アグスタに向かってきているガジェットを殲滅するためシグナム、ヴィータ、ザフィーラが迎撃に出でた。そして、フォワードの4人がホテル前で防衛ラインを張つていた。

『でも、ゼロ君には中の警備の仕事が・・・』

「ハ神部隊長たちがいれば、中は大丈夫だと思います。ですから・・・」

『わかりました。では、フォワードの4人についててもうれますか?』

「了解。ステラ、セットアップ!」

← セットアップ → キィイイイイイ

ゼロは、セットアップをして外に出た。

第4話 もう一つの能力（後書き）

はい、第4話でした。どうも、Theaterです。

さつそく、ドルマスターのもう一つの能力がでてきました。まあ、見てわかるよ
うに人形を創り出す力です。やっぱり、人形使いということで操るだけではなく、
人形を創るのも必要かなと思いました。

今回は、自分にそっくりな人形を創りました。たぶんこれが、一番
必要な人形にな
ると思います。解説をすると、この人形は自分の魔力を媒体にして
創っています。
それによつて本人と寸分違わない物にすることができるので見分け
る事がほぼ不可
能です。まあ、要は攻撃されても消えない影分身と思つてくれれば
いいです。

他にも魔力以外でも創ることはできますが、それはまたの機会に

では次回、第5話で会いましょう。

第5話 ランスターの弾丸（前書き）

やれるつもつだつた。でさるせすだつた。

しかし、その結末は・・・

第5話 ランスターの弾丸

「さすが、ヴォルケンリッターと言つたところか。」

ゼストとルーテシアに合流したゼロは、ホテル・アグスタの見える高台に場所を移していた。そして、ホテルの方でガジェットが次々に破壊されているのが見えた。

『「ハセゲンよう、騎士ゼスト、ルーテシア。』

すると、空間モニターが開きスカリエッティーが現れた。

「「ハセゲンよう。」

『ゼロも無事に合流できたみたいだね。』

「はい。ドクター。」

「なんのようだ！？」

ゼストは、少々不機嫌な声で言つた。

『冷たいね。近くで状況を見ているんだよ。あのホテルにレリック

は無さそうなんだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。
少し協力してくれないかね?』

スカリエッティーは、別のロストロギアの確保に協力してくれと言つてきた。

『君たちなら実に造作もないことだと思つんだが。』

『断ると言いたいところだが、その為にゼロがここにいるのだろう?』

『話が早くて助かる。ルーテシアのデバイス“アスクレピオス”に私のほしい物のデータを送つたよ。』

『うん。じゃあ、『きげんよう』ドクター。』

『ああ、『きげんよう』。吉報を待つてゐるよ。』

そう言い、通信が切れた。そして、ルーテシアは羽織つていたフードを脱いだ。

『それじゃあ、始めようかルー。』

『うん。』

ゼロの言葉に領を、ルーテシアは魔法陣を展開させた。

「あつー！」

「どうしたのキャロッ？」

「近くで誰かが召喚を使つてゐる。」

ルーテシアの召喚を同じ召喚を使うキャロが感知した。

『クラールヴィントのセンサーにも反応……だけどこの魔力反応つて！』

「あ、大きい！」

モニターしていたシャーリーと指揮をしていたシャマルは魔力反応の大きさに驚いていた。

「小さき者、羽ばたく者。言葉に答え、我が命を果たせ。ifikain
ゼクト」

ルーテシアの魔法陣からいくつかの触手が伸びていた。そして、ルーテシアの詠唱が終わると触手が弾け、そこから大量の虫が出てきた。

「ミッショーン、オブジョクトコントロール。いつてらっしゃい、気
を付けてね。」

虫たちは一斉に飛び立ち、ガジョットのいる方に向かった。そして、虫たちはガジョットいる場所までくるとガジョットの中に入つていった。

「さて、それじゃあ俺は行くよ。」

「ああ。」

「気を付けてね。」

「くつー！何だ急に動きがよくなつた？」

「自動機械の動きじやないな。」

急にガジェットの動きがよくなり、攻撃が当たらなくなつてきたことにヴィータとシグナムは、不審に思った。

「ヴィータ、ラインまで下がれ、向こうに召喚士がいるなら新人たちの所まで、回り込まれるかもしれん。」

シグナム！フォワードの4人の所にはゼロ君がいるの。だから、一応大丈夫だと思つんだけど。

「それでもだ。何があるかわからない。」

「わかつた。」

ヴィータは、フォワードの4人の下へ急いで飛んで行つた。

ザフイーラ、シグナムと合流して。

心得た。

「遠隔召喚…来ます！」

シグナムの予想通り、新人たちのところまでガジェットが遠隔召喚されてきた。

「召喚つてこんなことまでできるの?」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです。」

キャロがスバルの疑問に答えた。

「何でもいいわ。迎撃行くわよー！」

「「「おー」」」

1人見晴らしの良い木の上にいたティアナは迎撃の用意を始めた。

（これまでと同じだ、証明すれば良い。自分の能力と勇気を証明して、私はいつだってそうしてきた。）

そして、ルーテシアとゼクトと別れたゼロは、スカリエッティーの探し物を捕獲するためホテルの地下駐車場に来ていた。

「あれか。ルー聞こえる？」

うん、聞こえる。

ドクターの探し物が見つかった。ガリューをこっちは寄こしてほしい。

わかった。

ルーテシアは、左手のグローブを見た。

「ガリュー、ゼロに協力してくれる?」

ルーテシアがそう言うとキラーンとグローブのクリスタル部分が光つた。

「うん。 気を付けていってらっしゃい。」

すると、左手のグローブのクリスタル部分から何かが出て行つた。

「さて、本体は任務に行つたし、こつちはどうするか・・・」

ガジェットの迎撃をしているフォワードの4人とゼロの人形。そこで、ゼロの人形は管理局にバレないようにガジェット破壊していた。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえててね。ヴィータ副隊長がすぐに戻つてくるから。』

「でも、少しひばっかりじゃ行き詰ります。ちゃんと全機墜とします。」

「ティアナ、無茶するなー。」

ゼロが、ティアナを止めようとした。

「大丈夫です。毎日、朝晩練習してきてるんですから。ヒリオ！センターに下がって、あたしとスバルのスタートップで行く。」

ティアナは、ヒリオに指示を出した。

「スバル！クロスシフトA行くわよー。」

「おうー。」

スバルは、ワイングロードを走り、ガジェットたちをひきつけた。

(証明するんだ。特別な才能やすごい魔力が無くたって、どんな危険な戦いだって・・・)

ティアナは、心中で思つ。

「ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃つ抜けるんだって」

ティアナの周りに大量のスフィアが現れた。

「クロスファイアー・・・シューート！」

一斉にスフィアがガジェットに向かつて行つた。そして、次々にガジェットを撃ちぬいて行つた。だが、その時一発の弾丸が逸れてスバルの方に向かつて行つた。

「あつ！」

スバルが気付いた時には、もう弾丸はすぐそばまで来ていた。徐々に迫つてくる弾丸にスバルは身動き出来ずに直撃かと思われたその瞬間

「えつ？」

スバルとスフィアの間に突然壁ができた。

「がつー！」

「ゼロ隊長補佐ー！」

ゼロが壁となりスフィアからスバルを守っていた。そして、背中にスフィアを受けたゼロはスバルの方に倒れた。

「ティアナー！」

「ヴィータ副隊長ー！」

よつやく、ヴィータが防衛ラインまで来た。

「このバカ！無茶やつたうえに味方撃つてどりすんだー！」

「あ・・ああ・・・」

ティアナは、その場に立ちつくし言葉を発する」とも言えでできないでいた。

「あの、ヴィータ副隊長。今のも「ンビネーション」のつちで・・・」

「ふざけんなー。その状態のゼロを見てそんなことが言えるのかー！」

「ああ・・・」

スバルは、抱えているゼロ見てそれ以上何も言えなくなってしまった。

「後はあたしがやる。スバルは早くゼロをシャマルのどこに連れて行け！」

「は、はい！」

スバルは言われた通り、ゼロをシャマル下へ連れて行つた。

第5話 ランスターの弾丸（後書き）

はい、どうもTheaterです。

ゼロがティアナの誤射にやられました。と言つても人形の方なので本体を何ともないんですが。

それにも、バレないよつとするために命張る奴つているんですかね？まあ、たぶんこれが、人形じゃなく本体の方がいたら助けたのかな？

何か、敵なのか味方なのかわからなくなるキャラで困ります。ちなみに次回は本体の方が活躍するかも？

では次回、第6話で会いましょう。

第6話 2人目の召喚士（前書き）

人形の安否を確かめに行くゼロ。だが、そこで・・・

第6話 2人目の召喚士

「えつと?」れじやない。これでもない。」

人形がティアナの誤射に撃たれる数分前、ゼロはスカリエッティーの探し物を探していた。

「う~ん? どれだ?」

「・・・・・・・・・・・・

ゼロが、悩みながら探していると、突然目の前に箱が差し出された。

「ガリュー? それか?」

「・・・・・・・・

「よし、よくやったガリュー。偉いぞ。」

探し物を見つけたガリューを褒めるとガリューは喜んでいるように見えた。

「それじゃあ、それをドクターに届けて……ん?」

「…………」

突然、ゼロが話を区切つたのでガリューはびつした?と言つ顔をしたように見える。

「あつ悪い。びつやら、人形の方に何かあつたみたいだ。」

「…………」

「心配するな。かなり密度の高い人形にしてあるから、簡単に消えたりしない。」

心配したガリューに大丈夫だとゼロは言つ。

「それより、それをドクターの所へ頼むぞ。」

「…………」

「うん。行け。」

ガリューは、ゼロの言つとおり探し物を持ってスカリエッティの所に向かつた。

「さて、大丈夫とは言つたが、何があつたかは気になる行くか。」

ゼロは、人形に何があつたのか確かめるために現場に向かつた。

「どうですかシャマル先生？」

「うん、大丈夫。ちょっと怪我はしちやつてるけど、そんなに大したことはないから。」

氣を失つているゼロを抱えスバルは急いでシャマルの下に向かい治療をお願いした。そして、幸いなことにゼロの容体は大したことはなかつた。

「それで、ティアナは？」

「はい、今は裏手の警備をしています。」

「そう。じゃあ、ここは私に任せてティアナにゼロ君は大丈夫だつ

て言つてきてくれる?」

「は、はい! わかりました!」

スバルは、急いでティアナの下へと走つて行つた。

「よし! 全機撃墜。」

その頃、ヴィータはガジェットを1人で全機破壊し終えた所だった。

「ヴィータ!」

「おお、シグナム。そっちも終わったか?」

「ああ、終わった。」

すると、ちょうどシグナムとザフイーラもガジェットを全機撃墜して戻ってきた。

「召喚士は取り逃がしてしまつたな。」

「だが、いふとわかつていれば対策も立てやすい。」

「だな。」

召喚士は、取り逃がしたがいるとわかつただけでも収穫だと思つことにした。

「それで、ティアナとスバルがいないのはなぜだ？」

シグナムが周りを見渡すが、エリオとキャロはいるがティアナとスバルの姿だけが見えなかつた。

「・・・ちょっとな。ティアナがやらかしてな。」

ヴィータは少し、言ひにくそうにシグナムを見た。

「せうか。まあ今はいい。それより、そこに隠れているのは誰だ？」

「つー。」

「出て来い。来ないなら容赦はしない。」

「わかった。」

出てきたのは、黒いフードを被った男だつた。正体は無論、ゼロだ。人形の様子を見に来たが、姿が見えなかつたので、ヴィータ達の様子を覗つっていたが、運悪くシグナムに見つかつた。

「それで、貴様が召喚士か？」

シグナムは、レヴァンティンを起動させ、ゼロに向けた。

「いや、違う。」

ゼロは、声でバレないよう、声を変えて話した。

「貴様は、スカリエッティの仲間か？」

「そうだと言つたら？」

「どうして？」

「 Huffでも？」

お互に相手の出方を見ているが、2人とも高ランクの魔導師、互いに隙がない。だが、それはこの場に2人しかしない場合でここには、シグナムの他にヴィータ達もいる。状況は圧倒的にゼロが不利だ。

（さて、どうするか。逃げるにしても相手が多くすぎる。フォワードの2人はいいとして、ヴォルケンリッターが3人はきついか。）

ゼロは戦うことは避けて逃げる事に徹しようとするが、それが難しいとわかるとどうするか考えていた。

「抵抗しないで投降すると言つなら悪いようにはしない。どうする？」

「素直をするとでも。」

「しないだらうな。」

それを最後に沈黙が始まった。ゼロはその間に打開策を考えていた。

（人形のことは、後で直接本人に聞けばいいか。なら、そろそろこの場から脱出するか。）

ゼロは、ゆっくりと両手を合わせた。そして、それを見たシグナム

は警戒を強めた。

「何の真似だ？」

「あらあらお暇しようかなと思いまして。」

すると、ゼロの周りに複数の魔法陣が現れた。

「わざるかー！」

「遅いですよ・・・」

シグナムが、ゼロに向かって突撃したが、ゼロの方が速かった。
法陣からは、植物の蔓が無数に出てきた。

「な、なんだこれは？」

「召喚魔法です。」

キヤロが、ゼロの使った魔法を召喚魔法だと言つた。

「あ、貴様。やはりわたくしの召喚士かー！」

「いいえ。召喚は使えますが、さっきのは違います。あれは、別の人物です。」

ゼロは、淡々と答えた。

「それでは、みなさんまた会いましょう。」

「ま、待て！」

ゼロとシグナム達の間に蔓が広がって行き、ゼロの姿を隠していった。シグナム達は蔓を必死に斬つて行つたが、増殖する速さが尋常じやないため結果ゼロを逃がしてしまった。

「逃がしたか。」

「くそー。」

取り逃がした事に、ヴィータはイラついていた。

「しかし、奴に言う事が本当だとするなら、スカリエッティには優秀な召喚士が2人もいるということか。」

「ふ〜、何とか逃げられたな。」

シグナム達から、逃げ切ったゼロは一先ず落ち着いて息を整えていた。

「さて、これからどうするか。」

人形の状況が、わからない今、六課に帰るのは危険だと判断したゼロは、どうするか考える。

「何かわざわざから考えてばかりだな。」

そんな事を思つていると急に疲れがどつと押し寄せてきた。

「少し休むか。人形には夜にでも連絡をとればいいし。」

ゼロは、一休みのため夜まで歸つておられた。

第6話 2人目の召喚士（後書き）

はい、第6話でした。どうも、Theaterです。

久々の更新です。別にサボっていたわけではないですよ。パソコンを修理にだしていただけです。

え～、今回の話ですが、これと言つたことはあまりないですね。あるとすればゼロが、召喚魔法を使ったことくらいですかね。

では次回、第7話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会いー（前書き）

1万PV達成記念です。

まずは、長女のウーノから、どうぞ。

『ゼロ、ちょっと来てくれないか?』

「何ですか? ドクター?」

ゼロが、スカリエッティと出会いから数年が経とうとしていた。ゼロとの出会いにより人体と機械の融合と言う技術を劇的に発展させようとしていたスカリエッティ。ここ最近、何かの研究に没頭していたはずが急に呼ばれた。ゼロは不審に思いながらも研究室に向かつた。

「入りますよ、ドクター。」

「ああ、入りました。」

ゼロが、研究室のドアを開けた。そして、中にはいつも通りにスカリエッティがいた。だが、今日は1人ではなかつた。なぜか中には1人の女性がいた。

「ドクター、彼女は誰ですか?」

「君の妹だ!」

「・・・はつ?」

いきなり妹だと言われゼロは間の抜けた声を出してしまった。それを見たスカリエッティは、目に涙を溜めて必死に笑いを堪えていた。それにムカついたゼロは、ステラをモード2にしてスカリエッティ目掛けて振り下ろそうとした。

「ま、待て！私が悪かつたから！」

「次は真面目にやりますか？」

「ああ、約束しよう。」

スカリエッティが、反省したようなのでゼロは、ステラを引っ込んだ。そして、スカリエッティはゼロに彼女の事を説明した。スカリエッティによると、彼女の名前はウーノというらしいかった。彼女は、スカリエッティが、ゼロとタイプゼロと呼ばれる戦闘機人を基礎としてクローン培養して創った戦闘機人だそうだ。

「なるほど、そう言つ事でしたか。」

ゼロが、スカリエッティの説明を聞いて納得したところでウーノがゼロの前まで来た。そして、両手でゼロの右手を包み込むと優しく微笑んだ。

「初めまして、ウーノと言います。これからよろしくお願ひします
ね兄さん。」

「あ・・うん。よろしくウーノ。」

ウーノの笑った顔に思わずドキッとしたゼロ。その顔はほんのりと赤くなつていて明らかに照れていた。その様子を見ていたスカリエッティは、さつきと同じ反応をしていた。その後、ゼロの雷が落ちると分かっていながら。

「『めんね。恥ずかしいと』を見せて。」

「ふふつ、別に大丈夫ですよ。」

スカリエッティにお灸を据えた後、2人は隠れ家の中を歩いていた。スカリエッティからウーノの面倒を見てくれと頼まれたゼロ。自分の妹と言われば断る訳にはいかない。それで、手始めに隠れ家の中を案内することにした。

「『』が、訓練場。と言つても相手がいないんだけどね。」

「『めんなさい。私が、相手できればよかつたんですけど・・・』

ウーノは、しょんぼりとしました。スカリエッティによればウーノは戦闘機人で身体能力は強化されてるが、あまり戦闘向きでは

ないと呟つ。どつりかと言えば、情報収集などがむいているそうだ。

「気にしなくてもいいよ。ウーノが悪い訳じゃないんだから。」

ゼロは、ウーノの頭を撫でた。すると、ウーノは顔は赤くなつてしまつた。

「じゃあ、次に行こう。」

2人は次の場所に向かつた。ゼロが向かつたところは、キッチンだつた。

「キッチンがここね。まあ、利用するのは当然俺1人だけ。」

「ドクターは、利用しないの？」

「あの人は、研究が忙しいとかでいつも携帯食しか食べないから。」

ゼロは、出会つた当初の事を思い出す。折角、ご飯を作つても研究が忙しいからと絶対に食べようとしない。一度、それにキレて無理やり食べさせたこともあつたが、まったく効果が無かつた。なので今はもう諦めているのだった。

「でも、ウーノが来てくれたからもう寂しくないな。」

「えっ？」

「いつも、一人で作つて一人で食べてたから正直寂しかったんだ。だから、妹ができてとてもうれしいよ。」

ゼロが、微笑むとウーノは顔を真っ赤にした。そして、手を自分の胸に当てた。すると、心臓の鼓動がとても速くなっていた。

（な、何・・・この気持ち？胸がドキドキして、兄さんの顔をまともに見れない。）

「ウーノ？どうした。」

「えっ？」「ううん！なんでもない・・・」

突然、黙り込んだと思つたら、今度は慌てたのでゼロは首を傾げた。

「大丈夫か？顔が赤いようだけど・・・」

「へっ！？」

ゼロは、ウーノの前髪を上げ自分の額を合わせた。そして、熱が無いかを確かめた。10秒ほど計つてみたが、どうやら熱は無いよう

なのでゼロは安心して額を離した。

「つてウーノ！」

額を離し改めてウーノの顔を見るとさつきよりも更に顔を真っ赤にしたウーノが口をパクパクさせていた。

「お、おい！ウーノ。どうしたんだ！」

「あ・・・あああ・・・兄せ・・・ん・・・」

そうして、ウーノは氣を失つてしまつた。そして、ウーノを背負い急いでスカリエッティを呼ぶゼロの叫びが隠れ家中に響いた。

そして、後日。ゼロに甘えまくりのウーノの姿があつた。あの後、急いでスカリエッティにウーノを診せた。スカリエッティによるとただ、氣を失つただけとわかりゼロはほつとした。そして、次の日からウーノはなぜかゼロにすごく甘えてきたのだ。ゼロは、妹だから兄に甘えたいだけと思っているが、果たして事実はどうなのやら。そして、そんな2人を見てニヤニヤしているスカリエッティが居たとか。

番外編 妹たちとの出会い（後書き）

はい、どうもTheaterです。

1万PV達成と書つことで、番外編をやりました。前から、ナンバーズとの出会いをやひりと思つていていたので一度よかつたです。

流れ的には、スカリエッティがナンバーズを創る前にゼロに会つていたと言つ事です。それから妹と言つ形で出会いでいきます。

ちなみに、ウーノの性格が違う所は勘弁してください。ナンバーズの性格つてあまりよくわからなかつたのでこうなりました。

言い訳を言えは、スカリエッティじゃなくゼロに育てられたのでこうなつたと言つことにしていくください。

なので大半のナンバーズの性格が変わると思つますのでご容赦ください。次はドウーノをやるので楽しみにお待ちください。

では次回の番外編で会いましょう。

第七話 一時帰還（前書き）

六課をじざりく離れるや口。

第7話 一時帰還

ゼロが、シグナム達から逃げ通した頃、ドールのゼロが目を覚ました。

「う、う~ん? ここは・・・」

「あつー! 目が覚めた。」

「シャマル先生?」

ドールは、ゆっくりと体を起こすと周りを見た。ビーチやリビングは医務室のようだった。

「気分はどう?」

「体中が痛いです。」

スバルを守るために自らスフィアの前に立つたのだから当然のことだった。

「・・・スバルは大丈夫でしたか?」

「ええ、ゼロ君が守ってくれたから怪我はしてないわ。ただ・・・」

スバルは、大丈夫と言ったシャマルだが、大丈夫じゃない人が一人だけいた。

「ティアナですか？」

「うん。かなり落ち込んでいるわ。」

「そうですか・・・」

ドールは、それを聞いて立ち上がった。

「ゼロ君？まだ、休んでなきゃ・・・」

「もう、大丈夫です。それより、無事な姿を見せて安心させてやらないと・・・」

「・・・無理はしないようにね。」

「はい。」

ドールは、シャマルの許可が降りるとティアナの下へと向かつた。

そして、その頃ティアナ達フォワードは、合流したのはとフェイ
トにこの後の事についての指示を受けていた。

「現場検証は現場班がやってくれるけど、みんなも協力してあげて
ね。しばらく、待機して何もないようなら撤退だから。」

「「「はい！」」

スバル、エリオ、キャロが返事をするが、ティアナだけしなかつた。
その様子から見るにかなり落ち込んでいるようだ。

「で、ティアナは・・・私とお散歩そようか。」

ティアナの様子を見てなのはが散歩に誘った。ティアナは、少し驚
いた様子だが、力のない声で了承した。そして、なのはとティアナ
は、ホテル近くの雑木林を歩いていた。

「失敗しちゃったみたいだね。」

「すみません。一発それちゃって。」

「私は、現場にいなかつたし、ヴィータ副隊長に叱られてもひがやんと反省してると思つ。だから、改めて叱つたりしなけど、ティアナはときどき少し一生懸命すぎるんだよね。」

なのはは、少し困ったよつた顔をして言つた。

「それでちよつとやんちやしけやうんだ。」

セツ言つてなのははティアナの肩に手を置いた。

「でもね。ティアナは1人で戦つているんじやないよ。集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右全部が味方なんだから。その意味と今回のミスの理由ちやんと考えて同じ事を二度と繰り返さないつて約束できる?」

「・・はい。」

「なら、私からはそれだけ。約束したからね。」

「はい・・・」

それから、ティアナはなのはと別れた。そして、現場検証の手伝い

をしているスバルの所に戻ってきた。すると、ティアナの姿を見つけたスバルが走ってきた。

「ティア！」

「スバル？」

「はあはあはあ・・・」

ティアナの前まで来るとスバルは上がった息を整えた。

「いろいろ」めんね。」

「ううん、全然！・・・なのはさんに怒られた？」

「少しね。」

「そう・・・」

2人は少し、ぎこちなく話す。すると、ふいに2人に声を掛ける人物がいた。

「思ったより大丈夫そうだなティアナ。」

「ゼロさん！」

2人の前にはドールが立っていた。

「ゼロさん！大丈夫なんですか？」

スバルが、大丈夫なのかと聞いた。すると、ドールは笑つて答えた。

「ああ、もう大丈夫だ心配かけたな。」

「あ、あの・・・ゼロさん・・・」

ティアナが、気まずそうにドールに話しかける。そして、勇気を振り絞つて言つ。

「！」みんなさー、ゼロさん！」

そう言い、頭を下げるティアナ。それを見たドールは、少し驚きをしてティアナに言つ。

「頭を上げろティアナ。俺は、大丈夫だ。」

「で、でも・・・」

「俺も一応は隊長だからな。新人の失敗をフォローするのも仕事の内だ。」

そう言い、ドールはティアナの頭をぐりぐりと撫でた。

「ゼ、ゼロさん？」

「それよりも、検証の手伝いをしないと。早く行く。」

ドールは、ティアナの背中を押した。

「は、はい！スバル行くわよ。」

「う、うん。」

ティアナは、スバルを連れて現場検証の手伝いを行った。何となくだが、ティアナが元気になつたような気がした。

「さてと、そろそろ本体と連絡を取らないと。」

ドールは、本体のゼロに念話で連絡を取つとした。

その頃、ゼロはホテル・アグスターから遠く離れた森の中で眠っていた。

本体、聞こえるか？ こちらドール1。応答願う。

「ん？ ・・・」

突然、頭の中に聞こえた声にゼロは目を覚ました。

本体、応答願う。

ドールか？ やつと連絡がついたか。それで、何があつた？

（ああ、それが・・・）

ドールは、何があつたのかゼロに説明した。ティアナが、無理をしてスバルに攻撃を当てそうになつたこと、そして自分がそれからスバルを守り、今まで気を失つていたと

なるほど、そんなことが・・・

すまない。勝手なことをした。

ドールは、予定に無い行動をとった事に対して本体であるゼロに謝罪をした。

いや、むしろ一度いい。このことで完全に六課に信用されただろ。

ドールのやったことで機動六課に完全に溶け込めた思つたゼロ。そして、ゼロはあることを思つてた。

ドール、しばらく六課にはおまえがいてくれ。

なぜだ?

突然の事にドールは驚いた。

おまえ、体に傷があるよな?

ああ、すぐに治せるがそれでは、疑われるからな。

ドールは、魔力人形であるため傷の修復は簡単だった。しかし、すぐ治しては、何かと不審に思われる可能性があったので傷はまだ治してはいなかつた。

だから、傷が癒える頃まで入れ替わつていよつ。

わかつた。それで、それまでそつちはじめうる？

家に帰つてゐよ。それじゃあ、よろしくな。

それを最後に念話を切つた。そして、次にゼロはスカリエッティに連絡をした。

『どうしたゼロ？』

「少し、予定外の事が起きまして。」

ゼロは、スカリエッティにわきぼづドールから聞いた事をそのまま伝えた。

『ふむ、わかつた。それでは、ゼロ。一時こちうらに戻つてきてくれ。』

「わかりました、ドクター。」

『

スカリエットとの通信を切り、ゼロは空を見上げた。そして、しばらくしてから、ゆっくりと立ち上がり我が家へと歩き出した。し

第7話 一時帰還（後書き）

はい、第7話でした。どうもTheaterです。

しばらく六課は、ドールに任せ、ゼロは家に帰ります。それに伴いナンバーズが出てきます。まあ大変だ。どうしよう!

性格が変わるのは覚悟しているが、ちゃんとやりたいな

では次回、第8話で会いましょう。

第8話 久しぶりの我が家（前書き）

久しぶりに戻った我が家。

そこで、妹たちと騒がしい日々が戻る。

第8話 久しぶりの我が家

「着いたか。」

機動六課をドールに任せ一時帰還をすることにしたゼロ。現在、我が家の前に着いたところだった。

「元気にしてるかなあいつ等。」

妹たちの事を考えながらゼロは家中に入った。そして、真っ先に向かったのがスカリエットがいるであろう研究室だった。

「ドクター、ただいま戻りました。」

「あつ兄さん！」

「ゼロ兄様！」

すると、そこにはスカリエットだけではなくウーノとクワットロがいた。

「ウーノ、クワットロ。元気についていたか？」

「は～い。それもつ元氣でしたよ。」

クワットロが、ゼロに近づいて来てゼロの腕を取った。

「クワットロ……こきなり兄さんに抱きつかないの……」

それを見たウーノがとてもないオーラを出しながら、クワットロをゼロから引き離した。

「ウーノ姉様！何をしますのー。」

「こきなり、あなたが抱きつくから悪いのよ。」

一気に険悪な雰囲気になつた研究室。ゼロは、やれやれと頭を抱える。そして、ゼロは2人をほつといてスカリエッティの所まで行つた。

「ゼロ、あれを何とかしないのかね？」

「止めてもまたやりますし、ほつときましょい。」

六課に行くまで何度もこいつの事はあったのでもう諦めているのだった。

「ああ、それどゼロ。後で話しがある。」

「わかりました。」

ゼロは、スカリゴッティが話があると聞いただけで内容がなんとかわかつていた。

「それでは、また後できます。」

ゼロは、そう言い残すと研究室を出て行った。

「わい、みんなはあそこかな?」

残りの妹たちがいるであろう場所にゼロは向かった。そして、目的の場所に近づくと声が聞こえてきた。

「はあああー。」

「おひと・・まだまだー。」

「おひと、残りの妹たちは訓練場にいるらしかった。ゼロが訓練場

を覗くと思つた通りみんないた。

「みんな元気そうだな。」

ゼロが、静かにその様子を見ていると、突然、訓練場に叫び声が響いた。

「ああああああああ！」

そして、叫び声を上げた娘がゼロに向かって走ってきた。次の瞬間
その娘はゼロにおもいつきり抱きついてきた。

「ゼロ兄ーお帰りっす！」

ゼロに抱きついてきたのは、ナンバーズー・ウエンディだった。

「ウエンディ。こきなり抱きつくなつていつも言つてるだろ。」

「ふふつ」めんつす。」

まったく反省していない様子のウエンディ。そして、ウエンディが
騒いだことで後の妹たちもゼロに気付いた。

「兄よ、帰つたか。」

「ゼロ兄ーお帰り。」

ナンバーズ5チング、ナンバーズ9ノーグエが来た。

「チング、ノーグエただいま。それと、トーレ、セイン、ティエチ
もただいま。」

「ゼロやつと帰つたか。」

「お帰りゼロ兄ー。」

「お帰り。」

それぞれ、ゼロが帰つた事がうれしいようでもんな笑つていた。

「ゼロ、せつそくだが、訓練に付き合つてもうつる。」

「トーレ姉ーすついぞ。あたしもゼロ兄とやりたいんだ。」

せつそのウーノとクワットロみたいに喧嘩するトーレとノーグエ。
ゼロは、溜息を吐きながら2人を離した。

「順番に付けてやるから喧嘩するな。じゃあ、最初はトーレか
15。」

そして、トーレとゼロの模擬戦が始まった。

「手加減なんてするなよ。」

「わかつてゐよ。ステラ、モード2でセットアップ。」

＜ イエス、マスター ＞

ゼロは、セットアップレステラを構えた。

「一瞬で終わらせる。ヒュライドインパルス！」

トーレは、自らの先天固有技能ライドインパルスで一気にゼロの側面に周った。そして、自身の腕に生えたインパルスブレードでゼロを切り裂いた。

「がはつ・・・」

切り裂かれたゼロは口から血を吐き力なくその場に倒れた。そして、それを見ていた妹たちが叫び声を上げた。

「ト、トーレ姉！ 何やつてんすか！」

「やつ過ぎだートーレ姉ー！」

ウエンディとノーヴェがトーレを責める。しかし、それをチングが止めた。

「ノーヴェ、ウエンディ大丈夫だ。兄はやられていない。」

「えつ？」

「さすが、チング。おまえは、見切つたか。」

どこからかゼロの声が聞こえる。明らかに倒れているゼロが発して、声じやなかつた。

「・・・やいか！」

「おひヒー！」

トーレが、何もないところでブレードを振るとそこからゼロが現れ

た。突然、ゼロが現れたのでノーグエとウエンディが驚いていた。

「え？ なんで……」

「おまえたち、兄のレアスキルを忘れたのか？」

「「あつー！」」

チングにそう言われ2人はようやくわかつたみたいだ。トーレに切り裂かれたの人形、ファミリアドールだったのだ。ゼロがした仕掛けは至つて単純だった。ステラをセットアップする際に密度の低いドールを創り、それと入れ替わったのだ。トーレもライドインパルスで近づくまで気が付かなかつたようで、ゼロがドールとわかつたので躊躇いなく切り裂いたのだ。

「しかし、トーレはともかくチングもわかるようになつていたとは。

」

「苦労した。」

チングは、誇らしげに言つた。

「ゼロ、余所見とは余裕だな。」

「なつー！」

ゼロがチンクと話している隙にトーレは高速でゼロに迫ってきた。ゼロは、ステラの柄でそれを防いだ。しかし、ライドインパルスを使えるトーレは次々に攻撃を仕掛けてくる。

(二)のままじや埒があかないな。)

トーレのワッショになかなか反撃の糸口が掴めないゼロ。ビラしたらいいか考えてるとある事を思いついた。

「トーレー。」

「何だ！ 加減してくれなどビラつ氣か？」

「愛してる。」

「なつー。」

そう言つた瞬間、トーレの動きが止まつた。みると、模擬戦を見ていた妹たちも固まつていた。ゼロに愛していると言われたトーレは顔を真つ赤にして口をパクパクさせる。しかし、トーレのそんな様子をお構いなしにゼロはステラをトーレの首筋に当てる。

「はー、俺の勝ちー！」

「えつ？・・なつーひ、卑怯だー。」

やつと我に返つたトーレ。ゼロは今のは無じだと抗議するが、ゼロは受付なかつた。

「へへうう・・・

トーレが頃垂れていふとゼロがトーレの頭を撫でた。

「『めんつひ。トーレが強くなつていたから、こんな方法を使ったんだ。』

「本当か？なら、許す。」

これにて、トーレビザロの模擬戦が終了したのであつた。

第8話 久しぶりの我が家（後書き）

はい、第8話でした。どうもTheaterです。

連続更新です。今日は後1話更新しようかと思つています。

ここでは、ファミリアドールのことで補足をします。前に人形はゼロが操つてい
ると言いましたが、自分の魔力を使つた場合、ドールにはある程度
の自由意思を持たせることができます。ただし、記憶、経験などは共有するこ
とはできな
ません。

そして、密度の高いドールを創るのは、3体までが限界です。それ
にドールを
出している間は、少なからず魔力を消費し続けています。つまり、
ドールが六
課にいる間ずっと魔力を少し消費しています。

消費する魔力は微量なので魔力切れは起こしません。

では次回、第9話で会いましょう。

第9話 意外な真実（前書き）

ティアナが、がんばる理由。それは兄のためだった。

そして、それに意外な形でゼロが関わる。

第9話 意外な真実

トーレとの模擬戦が終わり、次にノーヴェとやりついノーヴェの方の向くと何やら不穏な雰囲気が漂っていた。

「・・・」

「ノーヴェ・・・」

なぜかゼロをおもいつきり睨んでいるノーヴェ。明らかに怒っている様子にゼロは冷や汗をかき始めた。

「ゼロ兄・・・」

「な、なんだ。」

「倒す・・・」

そう言い、ノーヴェは構えた。そして、ゼロとノーヴェの模擬戦が始まつた。

結果から言えば、模擬戦はゼロの勝ちだった。トレーニングもかくノーゲームではまだ、ゼロに勝つのは難しそうだ。

「さてと、それじゃ俺は行くよ。おまえたちはさやんと訓練しておけよ。」

「はい。」「

妹たちにそう言い残すと訓練場を出たゼロ。そして、そのままスライエッティの下へと向かった。

そして、一方ドールの方は、本体のゼロに報告を入れた後、なのはたちを探し始めた。そして、ガジェットとの交戦の跡地を周つていると目的のなのはを見つけた。そばには、他にフェイトと見知らぬ男性がいた。

「なのは、フェイト。」

「あつー・ゼロ君。」

「ゼロー。」

ゼロは、なのはたちに声を掛けながら近づいて行つた。

「体は、大丈夫なの?」

「うん、もう大丈夫。心配かけた。」

「よかつた。」

「えつと・・・なのは。」こちらの方は?」

なのはたちと一緒にいた男性がなのはにゼロのことを聞いた。

「あ、うん。」こちらは新しく六課に配属なつたゼロ・レスティアさんだよ。」

「初めてまして、ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

「いらっしゃい、ユーノ・スクライアです。」

ゼロとユーノは握手をした。

「ユーノ君はね、私とフェイトちゃんの幼馴染なの。」

「なるほど、だから親しげだつたんですね。」

「ユーノはね、無限書庫で司書長をやつてるんだ。」

フェイトが言った。

「せつ言えば、かなり優秀な若い司書長がいると聞いたことがあるな。すごいですね。」

「い、いや。そんな僕なんて・・・」

ゼロに褒められたユーノは照れていた。

「それで、ユーノ先生はなのはとフェイト。どつちが好きなんですか?」

「えつー。」

ゼロはユーノの耳元でそんなことを聞いた。

「ど、どひひて・・・その・・あの・・・」

ユーノは、慌てていて呂律が回つていなかつたが、その視線はなのはに向いていた。

「ふふつなのはですか。」

「ぎくひ」

「がんばつてください。ユーノ先生。」

ゼロは、ユーノの肩をポンポンと叩いて応援した。

「ねえ、2人で何を話しているの?」

「何でもありません。何でも。」

「ふうん。」

特に興味がないのか深く追求しては来なかつた。

「あつなのは。ユーノの護衛交代してもらつてもいいかな?」

「うん、了解。」

「エリオ、キヤロ。現場検証手伝つてもうつていいかな？」

フェイトは、近くでガジュットの残骸を見ていたエリオとキヤロを呼んだ。

「は、はい！」

「今いきます。」

呼ばれた2人は急いでフェイトの下へと来た。

「ゼロもいいかな？」

「もちろんです。」

「なのは、それじゃあまた後で。」

「ユーノ先生、グットラック！」

ゼロは、親指を立てて行つてしまつた。

「どういつ意味ユーノ君？」

「えつ…いや、わからないな。」

そして、それからみんなで捜査が行われ終わったころには空があかね色に染まりかけていた。機動六課一同は隊舎に戻ってきて今は、休憩を得ている所だった。しかし、隊長陣とシャーリーはヴィータに話があると言われ集まっていた。

「訓練中からとときどき氣になつてたんだよ。ティアナのこと。」

ヴィータの話とはティアナの事だった。

「強くなりたいなんてのは若い魔導師ならみんなそうだし、無茶も多少するもんだけど、ときどきちょっと度をこえていく。あいつ、ここに来る前に何かあつたのか？」

ヴィータは、なのはに聞いた。すると、なのはは難しい顔をした。そして、なのははモニターを操作して1人の男性のデータを出した。

「誰だこいつは？」

「ティーダ・ランスター。ティアナのお兄さんだよ。」

それを聞いたヴィータはそれとなんの関係があると言いたげな顔を

した。

「亡くなつたんだよ、ティアナが10歳の時にね。」

それを聞いてヴィータたちは黙つた。

「当時の階級で一等空尉、所属は首都航空隊、享年21歳。」

「結構なエリートだな。」

「そう、ヒートだつたからなんだよね・・・」

フェイドが、語り始めた。

「ティーダー等空尉が亡くなつた時の任務。逃走中の違法魔導師に手傷は負わせて後少しど捕まえられるつてところで違法魔導師の仲間らしき人物が来て・・・」

「それで、地上の陸士部隊に協力を仰いで追つていた違法魔導師はその日のうちに取り押さえたんだけど、仲間らしき人には逃げられて。」

「その件について心無い上司がちょっと酷いコメントをして、一時問題になつたの。」

そして、そのコメントの内容を聞いて、ヴィータ達は何とも言えない気持ちになった。そして、今まで黙つて聞いたいたドールがその場を後にした。

「・・・」

ドールは、今の話を聞いて本体のゼロの記憶からティーダに関する記憶があつたので頭の中で再生した。

その日、スカリエッティが、違法魔導師からある物を受け取る取引があつた。そして、その物の取引にゼロが行くことになつていて。だが、取引の日、違法魔導師が管理局に追われていると言う情報が入つた。仕方なしにゼロはスカリエッティの命令で物の回収に行くことになつた。

「まったく、苦労をかける。」

ゼロは急いで違法魔導師の下へ向かつた。

「あそこかー」

ゼロが見ると、違法魔導師が管理局に追われているのが見えた。違法魔導師はすでに逃げる力がほとんど無い状態でいつ捕まつてもおかしくなかつた。

「しょうがない・・・」

ゼロは、溜息を吐いて違法魔導師を助ける事にした。

「観念しろー、もう、逃げられないぞ。」

「はあはあ、誰が捕まつてたまるか！」

違法魔導師は必死に逃げる。だが、ついに追いつめられて絶対絶命だつた。

「これで終わりだな。」

ティーダが、違法魔導師を捕まえようとした瞬間

「悪いが、そうはいかない。」

「なつ！」

突然、空からスフィアが降り注いできた。それをティーダは軽く避けた。

「誰だ！」

「お前に言つ必要はない。おいー！」

「は、はい！」

「物を寄こせ。」

ゼロは、違法魔導師から物を取り上げた。

「あ、あんた！取引相手か？」

「ああ、これが報酬ださつさと行け。」

「助かった。恩に着る。」

そう言って、違法魔導師は行ってしまった。

「くつーま、待て！」

ティーダが追いかけようとするが、ゼロがそれを防いだ。

「邪魔をするな。」

「追わせはしない。」

そして、ゼロとティーダが戦闘を開始した。しかし、それはすぐに終わった。ティーダは至るところに傷を負い倒れていた。

「かはつ・・・」

「強いと思つたが、氣のせいだったか。」

ゼロは、ステラをティーダに向けた。

「はあはあ・・・頼む・・助けてくれ・・・俺には・・守らなきゃ
いけない妹が・・・いるんだ・・・」

「俺にそんなことは関係ない。じゃあな。」

ゼロはステラを振り下ろした。

「まさか、あいつの言っていた妹ってのがティアナだったとはな・
・」

本体のゼロの記憶から出てきた意外な事実。

「これも運命といひやつなのか。」

第9話 意外な真実（後書き）

はい、第9話でした。どうもTheaterです。

今日、3話目です。昼から書いて疲れました。

そして、ゼロがティアナの過去に関わっていると言つ意外な真実。
一体ゼロは
何者なんだ？

それと、前の話のあとがきで記憶は共有しないと言いましたが、それはあくまでドールが経験した事や記憶を本体に伝わらなこと言つて本体が経験した事や記憶は人形を創る時には引き継がれます。

では次回、第10話で会いましょう。

第10話 嵐の前の予感（前書き）

ミスショットを氣にして無茶な練習をするティアナ。

それを聞いたゼロは・・・

第10話 風の前の予感

「と言つわけだ。」

『なるほど、あの時の・・・』

自室に戻つたドールは、ゼロにティアナの事とティーダの事を話した。

「どうする?」

『ふん・・しづめくティアナを見張つておけ。』

「・・・?。なぜだ?」

ティアナを見張れと言つぜロの命令でドールは、首を傾げた。

『恐らく、ティアナは、兄の・・ティーダ・ランスターの意志を繼ぐと焦つてゐんだわ。たぶん、無茶をして近い内に何か起るな。』

「何か?」

『ああ、だから無茶をしないよ。見張つておけ。』

ゼロが、そう言うとドールは可笑しくなつて笑い出した。

「・・・」

『何を笑ってるんだ?』

「俺たちは、あいつらの敵だぞ。なのに、敵の心配か。それとも、罪滅ぼしのつもりか?」

ドールの言つ事はもつともだつた。敵でありながら、その身を心配するゼロ。普通ならあり得ない事だ。

『まさか、仮初めとは言え今は、機動六課の隊長補佐だ。少しは手伝つてやるぞ。』

「わかったよ。任せろ。」

『ああ、どうぞ』

通信を切るとドールはすぐに行動に出た。部屋を出て、ティアナがいるであろう場所に向かった。案の定、ティアナはドールの思った場所にいた。

「はあ！はあ！はあ！」

なのはに午後の訓練は無しと言われたはずなのに、1人で黙々と自主練をしていた。少し離れた所からその様子を見ていたドール。すると、ふいに肩を叩かれた。

「田那、何してるんですか？」

「ヴァイスか。」

ドールが振り向くとそこには、機動六課ヘリパイロットのヴァイス・グランセニックが立っていた。

「お前と回りだよ。で、どのくらいやつてるんだ？」

「そうですね。休みなしで、4時間つとこりですかね。」

ヴァイスが、そう答えるとドールは、溜息を吐きそうになつた。本体の言つどおり、無茶をしていたようだつたからだ。

「無論、俺も止めたんですけどね。聞く耳持たんつて感じで・・・」

ヴァイスが、やれやれと言つ感じで言つた。それを聞き、ドールはティアナの方に歩き出した。

「はあ、はあ、はあ・・・・」

休みなしで4時間ずっと訓練していたティアナ。さすがに、疲労の色が見える。だが、ティアナは訓練を止めようとしていなかつた。

「ティアナ。」

「えつ？」

ティアナが、声のした方を見ると、そこにモードールが立つていた。

「ゼロさん？」

「午後の訓練はなかつただろ？。なのに一人で自主練か。」

「はい・・・」

ティアナは、少し俯き加減で返事をした。

「ミスショットの事なら、気にするなど言つたはずだが・・・」

ドールは、ティアナを諭すよつて言つた。

「そんなふうに無理やり詰め込んだって、何にもなんねえぞ。」

「それでもー。」

ティアナは、ドールの言葉を遮つて言つ。

「それでも、詰め込んで練習しないとつまくなんないんですよ。凡人なもんで。」

そう言つて、ティアナは練習を再開した。

「凡人か・・・あまり、無茶はするなよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ドールは、ティアナを止めるのを諦めその場を後にした。

「いいんですかい？」

「おまえの言つとおり言つても無駄だった。とりあえず、ティアナがこれ以上、無茶をしないように見張るくらいしかない。」

ドールは、ヴァイスはいついつて部屋に戻つて行った。

（本体の言ひ通つ、あれじや近い内に何か起きるな。）

ドールは、本体の確信めいた言葉が現実に起きるまつな気がしていった。

第10話 嵐の前の予感（後書き）

はい、第10話でした。どうも、Theaterです。

次くらいで、ゼロは六課に戻したいなと思つてこの頃です。

いい加減、人形で進めるのも限界に近づいてるので、できたら次回、ゼロを六課に戻します。

では次回、第11話で会いましょう。

それは、懐かしい夢。

そして、裏の真実。

第1-1話 記憶と裏

ドールから、ティーダ・ランスターの事に関する通信が来る数時間前。

「ドクター、入りますよ。」

ゼロは、研究室のドアの前から、スカリエッティに話しかけた。

「ああ、入ります。」

スカリエッティから入る許可を得たゼロは研究室の中に入った。中には、先ほどと同じようにウーノとクワットロもいた。

「それでは、ゼロ。さつそく始めようか。」

「はい。」

ゼロは、額き奥の方の部屋に移動した。そして、そこには調整用のポットがいくつも並んでいた。ゼロはそのポットの一つの中に入った。

「では、これからゼロの定期調整を始める。」

ゼロは、調整が始まり目を閉じた。そして、しばし深い眠りに就いた

「レスティア一佐。総員、戦闘準備完了いたしました。」

「わかったわ。」苦勞様。

「はっ！」

長く伸びたブロンドの髪をなびかせながら、一人の女性管理局員、ルナ・レスティアが眼前の敵を眺めていた。目の前には、数百はあると思われる機械兵たち。

「平和の道は長いわね。」

ルナは、目を閉じ大きく息を吸つて吐いた。そして、キッと目を開いて叫ぶ。

「総員！突撃！」

ルナの掛け声に管理局員たちが、一斉に突撃して行った。数百の機械兵に対して管理局は30人しかしない。客観的に見れば勝つのはまず不可能に思われる。

しかし、局員に恐れはなかつた。なぜなら、ここにはルナ・レスティアがいたからだ。

「私も行つてくる。」

「お気をつけて。」

本来、指揮官であるはずのルナが前線に出るのは、よほどの事が無い限りありえない。それなのに、ルナが前線に出るのは訳がある。それは、彼女のレアスキルにあつた。

「ファミリアードール！」

ルナは両手を横に広げてそう叫ぶと一瞬のうちに影の使い魔の大群が姿を現した。その数はおよそ機械兵と同等だった。

「行くぞ！」

ルナと使い魔の大群は、機械兵に向かつて突撃をする。使い魔のレベルは、Aクラスとほぼ同じ。ただの機械兵を相手にするには十分なほどだ。

「はああああ！」

次々に機械兵を倒していくルナ。その姿は、さながら戦場に舞う戦乙女と言つた感じだつた。そして、1時間ほど経過した頃、戦場に機械兵は一体も立つてはいなかつた。

「今回も快勝でしたね。レストティア一佐。」

「・・・そうね。」

戦いに勝利したはずだが、ルナの顔を晴れてはいなかつた。ただ、黙つて戦いが終わつたその光景を眺めていた。

(ルナ……)

調整ポットの中でゼロは、深い眠りから目覚めた。ポットに入つてから大体、2時間ほど経っていた。

「起きたかねゼロ。調整は終わったよ。」

「はい、ドクター。」

ゼロは、調整用ポットから出てきた。

「どうだね？ 調子は？」

「特に問題はありません。」

手や足を動かしたりしてみたが、特に異常は見られなかつた。

「それは、よかつた。では、さつそくだが頼みたいことがある。」

「はい。」

スカリエッティは、空間モニターを出した。そして、管理局員の

男が映っていた。

「「」の男は？」

「「」の男は、レオン・ロックハート二等陸佐。陸士103隊の部隊長です。」

一緒にいたウーノが説明に入った。

「「」の男は、クライアントと対立している人物らしいのですが、最近になってクライアントの周りを探っている様子があるようです。」

「つまり、弱みを握りつとしている感じです。」

そばで聞いていたクワットロがおもしろそうに言った。

「そこ」で、クライアントから「」の男を始末してくれないかと依頼がきていました。」

「頼めるかなゼロ。」

「わかりました。」

ゼロは、迷わず了承した。

「田標は、現在隊舎から地上本部へと移動してこようとしています。」

「了解。では、行つてきます。」

ゼロは、転移魔法を発動させ行つてしまつた。

「ふん、何とかレジアスの裏が掴めないか・・・」

部下の運転する車に乗り、地上本部へと向かつてゐる陸士103隊の部隊長レオン・ロックハート。

「おい、例の調査はまだわからんか?」

「すみません。未だ掘めていません。」

「急げ!何としてもレジアスの裏を掴むのだ!」

運転している陸士103隊の諜報員のマーク・レイリーにレジアスの調査を急がせた。レオンは、なかなかレジアスの尻尾が掴めない歯痒さに苛立っていた。そして、後少しで地上本部と連絡が取れずで車がいきなり急ブレーキをかけた。

「な、なんだ！ いきなり！」

「す、すみません。しかし、あれを・・・」

「ん？」

車の中からマークが指差した先には、黒いフードを被つた男が立っていた。

「なんだあいつは？ おい。」

「は、はー。」

マークは、車から出てフードの駅のトモで行った。

「ちゅうとーさんのおなた。車道に立つなんて危ないですよ。早く退いてー。」

マークが、そう言つて注意するがフードの男はぱくっとも動かなかつた。

「ちよつと、聞いてるんですか？」

「あの車に乗つてるのは、レオン・ロックハート一等陸佐で間違いないか？」

フードの男は、マークの言葉を遮り、言つた。

「えつ？ああ、そうですが……」

マークがそう言つて、フードの男はその横を通り抜けようとした。

「ま、待ちなさい！」

マークは、フードの男の腕を掴んだ。しかし、その手をすぐに離した。

「えつ？」

いや、離されたと言つた方が適切かもしれない。フードの男の腕を掴んでいたマークの右腕は、マークから離れていたのだから。

血飛沫が上がる右腕を押さえてマークは、悲痛の叫びを上げた。

「腕が・・・僕の腕が・・・」

右腕を押されて膝をついたマーク。必死に痛みに耐えていると腕を切断したフードの男がマークの目の前に来た。

「あ・・あああ・・・」

恐怖で身動き一つできないマーク。次の瞬間、マークの一生が幕を閉じた。

「な、なんだ。あいつは・・・」

車の中で今の一
部始終を見ていたレオン。急いで車から外に出た。

「貴様！何者だ！」

「お前に答える義務はない。」

「くっー。」

レオンは、デバイスを起動させようとする。しかし、それは叶わなかつた。

「何だ？ 体が言ひ事を聞かない・・・」

レオンの体はまるで何かに縛られているかのように自由がきかなかつた。

「貴様・・・何をした・・・」

「それも、答える義務はない。」

フードの男は、自らのデバイスを振り上げた。

「く、くそーーーーー！」

フードの男のデバイスは、レオンの命をいとも簡単に奪つた。そし

て、仕事を終えたフードの男、いやゼロ・レスティアはフードを脱いだ。

「任務完了。」

ゼロは、無表情で機械的に言うとその場から姿を消した。

第1-1話 記憶と裏（後書き）

はい、第1-1話でした。どうも、Theaterです。

今回ば、ちょっとだけゼロの過去をやつました。

正確にはゼロではなく元となつた人物の過去ですけどね。一体、彼女は誰なんだ。どうしてゼロは生まれたんだ。

この辺は、まだ明らかにはしません。ぶっちゃけ考えてないだけだつたりして

そして、ゼロの裏の顔。全然キャラが違いますよね。表とはえらい違いだ。本当はもつと格好よくしたいんですけど、そこまでの腕がない・・・

では次回、第1-2話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会い2（前書き）

今回は、ナンバーズの次女、ドゥーエです。

番外編 妹たちとの出会い2

『兄さん、少しそうしいですか？』

「どうした？ウーノ。」

訓練場で1人練習をしていたゼロにウーノから通信が来た。

『ドクターが、お呼びです。』

「またか・・・何か嫌な予感がする。」

ゼロは、気が進まないまま研究室に向かう事にした。

「ドクター、来ましたよ。」

ゼロは、研究室のドアを開けて中に入った。

「ん？」

中に入ると、そこには見知らぬ女の子がいた。少し、高い背に若干靈んだ金髪。ゼロの事を見るとニヤリと笑いそばに寄ってきた。

「あなたが、ゼロ?」

「あ、ああそうだよ。」

「ふうん。」

女の子は、ゼロの周りを回りながら、いろいろ観察している様子だった。

「えつと・・・何かな?」

「ん~。」

女の子は、一周し終えると、ゼロの正面に立ち、ニコニコと笑つて一
言。

「不合格!」

「えつ?」

女の子は、そう言つと研究室を出て行つてしまつた。研究室に取り残されたゼロは訳が分からず?を浮かべた。

「はははは、いや実に面白い物を見せてもらつたよ、ゼロ。」

奥の方から、スカリエッティが出てきた。

「ドクター、あの娘は誰ですか？」

「うん、彼女はナンバーズ2、ドゥーニだ。君とウーノの妹だよ。」

スカリエッティの言葉にゼロは、溜息を吐く。

「あなたは一体、何人妹を造る氣ですか・・・」

「私の計画のために必要だからね。」

「はあ、それにしても、不合格ってなんですか？」

ゼロは、ドゥーニの言った不合格の事が気になつていた。

「『めんなさい。兄さん。』

「ウーノ。」

なぜか、スカリーニティの後ろにいたウーノが謝ってきた。

「ドゥーハは、兄さんを試しているんです。」

「試す？」

「はい。本当に私たちの兄に相応しいかどうかを。」

ウーノの説明を聞き、ゼロは笑った。

「ふふつ、なるほど。わかった、じゃあ、ドゥーハに早く認めてもらわないと。」

ゼロは、そのまま研究室を出て行った。

「ドゥーハに行つた？」

「あら、何かしらゼロ?」

ドゥーハを探していたゼロ。家中を探していると思ふのほか早く見つかった。

「ウーノから聞いたよ。俺を試してるんだって?」

「へえ～、聞いたんだ。それで、どうするの？」

ドゥーハは、怪しい笑みを浮かべて聞いてきた。

「何としても認めてもらひたい。」

「ふ～ん。それなら一ついい考えがあるわ。15分したら研究室に来て。」

「わかった。」

ドゥーハは、そう言って研究室の方に行ってしまった。

「さて、どんな事をやるんだか・・・」

ゼロは、ドゥーハの言ひ通り、15分の時が過ぎるのを待つた。

「そりそろだな。」

ドゥーハが、去つてから15分が経ち、ゼロは再び研究室に向かつた。

「入りますよ。」

ゼロが、研究室のドアを開けた。すると、そこにあり得ない光景が広がっていてゼロは驚愕してしまった。

「「お待ちしてました、兄さん。」」

「ウーノが2人？」

そこには、ウーノが2人いたのだ。

「な、なんで・・・」

「ドゥーハのI.S.だよ。」

スカリエッティが、ゼロのそばに来た。

【I.S.】

正式名称、インヒューレントスキル。戦闘機人が有する、魔力以外の力を原動力とした特殊技能の総称。

「…………」

「ドゥーハの使い、エラは、ライアーズ・マスク。自身の体を変化させる変身偽装能力だよ。」

スカリエッティは、自慢げに言つてきた。

（変身能力か……だとすれば……）

ゼロは2人のドゥーハを見て言つ。

「つまり、どちらがドゥーハかを当てればいいんだな？」

「「やうよ。」」

2人のウーノは、声をコニゾンさせて言つ。

（一見しただけじゃ、まったく同じだな。でも、どうするか……）

ゼロは、どうすれば見分ける事ができるか考えた。

「う～ん・・・」

「分からない」

「かしら」

「「兄さん。」」

挑発するよつに言つてくる2人のウーノ。

(「へー・じつすれば・・・あー・そうだ。」)

ゼロは、何かを思いついたようだつた。しかし、ゼロはまだ知らないかつた。この作戦を実行した事を激しく後悔することになることを。

「ウーノ!」

「「何かしら?」」

「最近、老けたな。」

その時、研究室の時が止まつた。そして、2人のウーノの片方が明らかに怒つているのをゼロは見逃さなかつた。

「そつちが、ドウーハだ。」

ゼロは、畠然とした顔をしているウーノの方を指した。

「正解よ。」

ウーノの姿から、元の姿に戻ったドウーハ。

「俺の勝ちだな。」

「やうね。」

ドウーハは、少し悔しそうな顔をした。

「それじゃあ、俺の事を認めてくれるな。」

「それより、あつはいいの?」

「えつ?」

ドウーハは、ゼロの後ろを指した。ゼロは後ろを振り向くとそこは、修羅がいた。

「兄さん・・・私の事そんなふつに見ていたんですね・・・」

「い、いや。違うぞウーノ。あれは、見分けるために言つただけで。
・・」

「でも、普段からそういう黙つてないと、そんなことは思いつかないで
すよね・・・」

ウーノからとてつもないオーラが漂つていた。

「お仕置きです。」

「いや――――――――。」

ゼロは、ウーノに連れていかれた。

「ふふう。」

その光景を見てドゥーハは、笑っていた。

「どうだね、ゼロは?」

「認めてあげてもいいわ。」

ドウーハは、クスクスと笑いながら言った。

「これからよろしくね、兄さん？」

番外編 妹たちとの出会い（後書き）

はい、番外編でした。どうも、Theaterです。

今回ば、ドゥーハとの出会いをやりました。

ウーノの時と違つてドゥーハは最初から認めていたわけじゃなかつた
ようです。

やつぱり恒例の通りキャラが、違いますね。

まあ、ドゥーハは本編にすでに登場しますし、こんなもんですね。

最後のあたり、ドゥーハよりのウーノの方が目立つていたのはどう
いう事なん
でしょうかね。実際に修羅化したウーノって怖いと思います。

では、次回の番外編で会いましょう。

第1-2話 予定変更（前書き）

事件の捜査をするフォイトの代わりにライティングの訓練をすることになつたダーレ。

第1-2話 予定変更

一夜が明け、今朝早く作戦室に隊長陣、なのは、フロイト、ヴィータ、シグナム、ドール、そして部隊長のはやてが集まっていた。

「はやて、こんな朝早くからなんだ？」

朝早い呼び出しにみんな不思議な顔をしていた。その中でヴィータは、眠そうに目を擦りながら、まだ半分寝てるかのようだった。

「うん・・それがな。昨夜、管理局員が殺害される事件が起つたんよ。」

「なつー。」

はやての言葉にみんなが動搖する。そのおかげか、さしつままで眠りこじていたヴィータも完全に目が覚めたようだった。

「じつこじつだよ、はやてー。」

「それに関しては、フロイトさんからや。フロイトさんお願ひや。」

「うん。」

フェイトは、前に立ちモニターを操作して1人の男性局員のデータを出した。それを見た一同は誰だ?と言ひ顔をしていた。

「このは?」

「レオン・ロックハート一等陸佐、今回の事件の被害者だよ。」

モニターを操作しながらレオンについての説明に入るフェイト。

「ロックハート一佐は、昨夜、陸士103隊の隊舎から地上本部に向かう予定になっていた。」

はやてを始めとする隊長陣はフェイトの説明を真剣な表情で聞いていた。ただ、1人を除いて。

「それで、同じ103隊のマーク・レイン陸曹の運転する車で地上本部に向かった。そして、その途中で襲われたと考えられるみたい。」

「フェイトちやんその、一緒にいたレイン陸曹はどうなったの?」

なのはは、フェイトに聞く。それによつて全員がフェイトに注目す

る。すると、フェイトは黙つて首を横に振つた。それで、どうなつたのかは言つまでもない。

「犯人に関する手掛かりは見つかったのか？」

シグナムが、続いて聞く。

「現場には、何一つ無かつたみたい。」

犯人は、よほど手慣れた者なのか、手掛かりになるような物は何もなかつた。

「そんでな、今朝、全管理局員に警戒するよつ通達があつたんよ。」

「警戒？」

「やうやくや。」

はやでが、言つには今回の事件は、ロックハート二佐個人に対する恨みの犯行か、それとも管理局全体に対する恨みの犯行が分かつてない。

それによつて、全管理局員に警戒態勢を取るよつに通達があつたといつ」とうしこ。

「せやから、みんなも注意してや。」

「おひ、わかつたぜ。」

「了解しました、主。」

「うん、はやてちゃん。」

ドール以外のみんなが返事をした。

「それと、ゼロ。」

「はー?」

黙っていたドールにフェイトが、話かけてきた。

「私も、この事件の捜査をする事になつたから、ライティングの事
お願ひしてもいいかな?」

「はい、もちろんです。」

フェイトは、ゼロにライティングの事をお願いしてきた。それも、
当然のこと事件の捜査に出ればエリオとキャロの訓練を見る時間が、
かなり減ってしまう。

その為、ゼロにだけ押し付けるのは心苦しいが、仕方なしにお願いすることにした。

「それじゃあ、話もこれで終わりや。みんな解散！」

はやての一聲でひとまず、解散になつた。そして、なのは、ヴィータ、ゼロの3人は、朝の訓練のため訓練場に来た。すると、訓練の時間にはまだ早いにも関わらずフォワードの4人は揃つていた。

「みんな、早いね。」

なのはが、フォワードの4人に声を掛けた。すると、軽くアップトレーニングをしていた4人は、なのはたちの所まで走つてきた。

「「「おはよー」」」

「おはよー、みんな。」

挨拶を済ませ、さっそく訓練に入る。そして、今日はスターズとライトニングに別れそれぞれ訓練をすることになつていて。ドールは、エリオとキャロを連れて、訓練に入る。

「じゃあ、2人ともアップはしたと思つけど、とりあえず隊舎の周

りを一周してきて。」

「「はーー。」」

ドールの指示でエリオとキャロは、2人仲良く走り出した。

「じゃあ、今のうちにだな。」

「ああ。」

ドールの後ろから声が聞こえたと思うと、そこにゼロがいた。今朝、はやてから召集がかかるより前にゼロからドールに通信が入っていた。

数日、六課の事はドールに任せて置く予定だったのだが、急に予定を変更して、ゼロが六課に戻ることになったのだ。その時、妹たちが少し、ぐずつたのは言つまでもない。

「それで、俺のいない間の事は?」

ゼロは、ドールから自分がいな間の事を聞く。主にそれと言つた事はなかつたが、フェイトからライトニングの事を任された事くらいだとドールが言つ。

「なるほど、わかった。それじゃあな。」

ゼロが、指をパチンッと鳴らすとドールは光の粒となつて消えた。そして、その直後にエリオとキャロがランニングを終え戻ってきた。

「ゼロさん、終わりました。」

「ました。はあはあ・・・」

戻ってきた2人をゼロは見た。すると、エリオは余裕な感じだったが、キャロが息を切れさせていた。

「キャロは、もう少し体力をつけないとダメかな。」

「は、はい・・はあはあ・・・」

それから、10分ほど小休止をして、訓練を開始する。しかし、ゼロは悩んでいた。これまで人に教えると言う事をあまりしたことがないゼロ。

ここに来る前、妹たちには、少し教えたこともあるが、それでも管理局員に教えるようなものではない。なので、ゼロができることがたつた1つしかなかつた。

「訓練だけど、俺が教える時は、模擬戦をしてもらひ。」

「模擬戦ですか？」

ゼロが、訓練内容としたのは模擬戦だった。その全容は、まずエリオとキャロの2人でゼロと戦うと言うもの。前衛がエリオ、後衛がキャロと言った感じで、2人のコンビネーションを上げる事を目的とした内容だ。

「今日は、最初だし軽く行くぞ。」

「「はい！」」

そして、ゼロ対エリオ＆キャロの最初の模擬戦が始まった。

第1-2話 予定変更（後書き）

はい、第1-2話でした。どうも、Theaterです。

無理矢理に、ゼロを六課に戻しました。話の前後が変になつてるので謝罪します。

これからのは話ですが、魔王が出でるまで、じょりくだりだりくわつたいと思ひます。

では次回、第1-3話で会いましょう。

第1-3話 ゼロの訓練1（前書き）

ゼロとヒツオ&キャロの訓練が始まる。

第1-3話 ゼロの訓練1

朝の訓練、そこでゼロとエリオ＆キャロの初めての模擬戦が始まっていた。

「さあ、ゼロから来てこいぞ。」

ゼロが、挑発するよ^{うに}エリオとキャロに向かって言つ。それに対しエリオとキャロはと^{うつ}と、まったく動けずにいた。今日、初めてゼロと対峙したエリオとキャロ。そこで、初めてゼロのす^うぐさがわかつた。

（す^うぐ、まったく隙がない。）

エリオは、ゼロを観察しながら^{うつ}思つ。そして、どう攻めるかも同時に考えていた。

キャロ、どうする？

ただ、突つ込むだけじゃダメだと思つ。

念話でエリオとキャロは、どう動くかを相談する。しかし、いつもでも動かないエリオとキャロに業を煮やしたゼロが言つ。

「来ないならこいつから行くぞ。」

ゼロは、中腰に構え、足に魔力を集中させる。そして、ゼロは視線をキャロに合わせ、魔力を一気に解放させた。

それは、まさに一瞬の出来事だった。エリオが、ゼロから皿を離さず見ていたはずだった。しかし、ゼロは一瞬のうちにキャロの後ろに移動し、キャロの頭をポンポンと叩いていた。

「ほり、どうした？ 本番なら、キャロは大怪我してるんだ。」

ゼロの言つたことエリオは悔しそうな顔をする。まだ、六課に来て間もないエリオにとっていくら、なのはの教導を受けているとは言え、ゼロの動きが見えるようになるのはまだ早い。

それは、エリオ自身もわかっている事だ。だが、それでも悔しいのものは悔しいのだ。

「ゼロさんー、もう一回お願ひします。」

エリオは、ゼロにもう一回とお願いしてきた。その、真っ直ぐな目を見て、ゼロは思わず、微笑む。

「ああ、良いぞ。」

そして、再び模擬戦が始まった。

「はい！今朝の訓練はここまで。」

訓練が始まつてから、2時間が過ぎた頃、なのはが訓練の終了を告げる。そして、ゼロと模擬戦をしていたエリオとキャラはと言つた。

「はう……」

「はう……」

かなり落ち込んでいた。結果を言えば、あれから何回もエリオとキャラはゼロに挑戦したのだが、1回も勝つどころか、一発も当てることがすらできなかつた。

ゼロが、見るに2人のコンビネーションは、悪くないと言つていいものだつた。しかし、何がダメかと言えばまだ、経験が少ない事だろ？ゼロは思つていた。

「そう、落ち込むなつてヒリオ、キャロ。」

2人が、あまりにも落ち込んでいるので、ゼロは慰めた。

「でも、一発も当てる事ができませんでした・・・」

なぜ、ヒリオとキャロがこんなに落ち込んでいるのかと言つと。普通で言えば、2人がゼロに勝つ事はまず、できないと言つていい。なので、ゼロは条件をつけて模擬戦をしていたのだ。

その条件とは、レアスキルの使用を禁止、そしてデバイスを使わないと言うものだつた。これだけの条件の下でも一発も当てる事ができなかつたのでこれほど落ち込んでいるという訳だ。

「ほら、ヒリオ。いつまでの落ち込んでないで、シャワー行くぞ。」

「は、はい！」

ゼロは、ヒリオの背中をバシッと叩くと汗を流すためにシャワーに向かつた。

「ゼロさん。」

「何だ？」

「ゼロさん、どうしてそんなに強くなつたんですか？」

ゼロとエリオは、2人でシャワーに入る。

そしてゼロが、髪を洗つてると、エリオがそんな事を聞いてきた。
ゼロは、エリオの質問に対してもう一度答えた。

「もうだな・・・あえて言つなら、守りたいものがあつたからかな。

」

「守りたいもの？」

ゼロは、エリオにそう答えた。そしてエリオは、そんなゼロの答えを守りたいものが気になつてゼロに聞くことにした。

「その、守りたいものって何ですか？」

「ん~、内緒。」

ゼロは人差し指を口元に持つて、内緒と書いて教えるよつとはしなかつた。

そして、シャワーを出たゼロとエリオは女性陣が出てくるのを待つていた。しかし、女性陣のシャワーは、長くなかなか出でこなかつた。

「遅いですね・・・」

「女の子ってのは、いつももんだよ。」

なかなか出でこない女性陣を待つているのをトリオは飽き始めていた。それをゼロが、女の子はこういうものだと黙つて待つていた。

「お待たせ。」

「お待たせしました。」

それから、10分ほどして、女性陣が出てきた。ちなみにここのいるのは、ティアナ、スバル、キャロの3人でなのは、ヴィータの隊長陣は、別のシャワー室に行つている。

「それじゃあ、行くか。」

全員揃つてといひで、みんなで朝ごはんを食べに食堂に向かい始めた。

そして、食堂に着くとそこには、六課の隊員やスタッフが結構いたが、そんなに混んではいなかつたので、席を取るのには苦労しなかつた。

「それでは、いただきます。」

ゼロとフォワードの4人は、席に着き朝食を摂り始めた。4人掛けの席にフォワードの4人が仲良く座り、その隣の席にゼロが1人で座っていた。

「それにしても相変わらず、すごい量だな。」

ゼロは、フォワードの4人の席を見て呆れていた。そこには、山盛りの料理が大量に並んでいた。

そして、それを消費しているは、スバルとエリオだった。山盛りの料理を次々に完食していく光景にゼロは圧倒される。

（戦闘機人やクローンってあんなに食べるものだっけ・・・）

自分自身も戦闘機人であるはずのゼロが疑問に思うほど、その光景は驚愕のものだった。

「よく、そんなに食べられるな？」

「ここのくらい全然ですよ。それより、ゼロさんはそれだけで足りるんですか？」

ゼロが、食べているのは、トースト一枚に牛乳と言つシンプルなものだった。確かに成人男性で朝ごはんがこれだけと言つのは、少々少ないと思われる。

「ん~、本当は、朝は食べない派なんだけどね。」

「ダメだよ、ちゃんと食べないと。」

そこに、トレイを持った、なのはたちがやつてきた。ゼロの座つていた席には、フェイトが座り、そこに隣の席にはやで、シグナム、ヴィータ、シャマルが座つた。

「男の子がそれしか、食べないなんて力がないよ。」

「うう~、体质なんです。」

なのはの言つ事に、ゼロが、そう返した。

「それに、あれを見るとそれだけで、お腹いっぱいです。」

「ああ・・そだね。」

ゼロの視線の先には、スバルとエリオがいた。それを見た、なのはは納得した様子だった。そして、それからみんなが朝食を食べ終え

て、各自仕事に向かひのつであつた。

第1-3話 ゼロの訓練1（後書き）

はい、第1-3話でした。どうも、Theaterです。

ゼロが、エリオとキャロを鍛えています。敵なのにいいのかこれで？
とりあえずは、こんな展開あと数話・・・いや、1話かな？で行きたいと思います。

では次回、第1-4話で会いましょう。

第1-4話 ゼロの訓練2（前書き）

ゼロとヒツオ&キャロの訓練の風景

第14話 ゼロの訓練2

初めての模擬戦訓練から数日。模擬戦を繰り返すに連れてエリオとキャロに少しづつ成長が見られてきた。一戦に一度はゼロに攻撃を当てる事ができるようになっていた。

「はああ！」

「遅いっ！」

突進してきたエリオの手首を掴みゼロは、そのままエリオを組み伏せた。ゼロは、組み伏せたまま頭を押さえてつけた。

「エリオ君！」

それを少し離れたところで見ていたキャロ。後方支援が担当のキャロは、直接戦闘には出ない。だが、キャロには、頼もしい相棒がいる。

「フリード！」

「キュクルー！」

キヤロの指示でフリードが、ゼロの下へと飛んでいく。

「何をやるつもりだ？」

フリードは、ゼロの皿の前に来るといその場で停止して、口をクロップと開いた。その動きを見たゼロは嫌な予感がした。

「おこ・・・まさか・・・」

「フリードー・プラス・トフレアー！」

「やつぱつー」

ゼロの予感の通り、キヤロは皿の前でプラス・トフレアを撃つ氣だつた。そばにはエリオもいるのだと考えていたゼロは、エリオの方を見ると

↖ S O C I C M o v e . ↘

「あつー。」

ゼロが、フリードに気を取られ腕の力が緩んだ隙をついてエリオは、ソニックムーブを使って脱出していた。ゼロは、しまったと思

つたが、すでに遅くもう一度、フリードの方を見ると、ブلاストフレアを撃つ寸前だった。

「ファイア！」

「くつーーー！」

ほぼ零距離と言つていゝ間合いでゼロにブلاストフレアが放たれた。もちろん、ゼロが大怪我しないようにキャロも加減をしていたが、それでもほぼ零距離で放たれたブلاストフレアを受ければさすがのゼロでもと思つキャロ。

「やつたかな？」

「うそ。さすがのゼロさんでも・・・」

ソニックムーブで脱出したエリオがキャロの下へと戻ってきた。そして、2人でブلاストフレアで燃え盛つてゐる場所を見ていた。

「はああーーー！」

「「えつーーー！」

突如にして、炎が一瞬にして消えた。そして、その中心にいたの

はバリアージャケットが所々焦げていたゼロだった。

「キャロ、ひょっとやり過ぎだ。」

「ゾ、ごめんなさい。」

さすがのゼロも今の戦法は、危険だとキャロに注意をした。そして、それからまた何度も模擬戦をした後、今度は全体訓練の時間になつたのでゼロの訓練はここで終わった。

「さてと、ここ最近、ヒリオとキャロの事を見ながら、ティアナを見ていたが……」

ゼロは、ヒリオとキャロの訓練をしながら、ティアナの事をしつかりと見ていた。ここ最近、見ている分には、特にこれと書いて何か起きてはいなかった。

だが、ゼロは思っていた。眞面目に訓練は受けているが、何かあるんじゃないかと……

「まあ、適度には見ておけばいいか……」

そう思い、ゼロは隊舎の中に入つて行つた。

そして、書類仕事でもしようかと思いテスクに向かっている途中にフェイドがいた。

「フロイト隊長。」

「あ、ゼロ。隊長はやめて、言ひたでしょ。」

「仕事中なんで許してください。」

ゼロは、仕事とプライベートで呼び方を変えていた。仕事中は、呼び捨てはしないで隊長と呼んでいた。しかし、それ以外でも隊長と呼んでいることが多いが・・・

「エリオとキャロの事、任せきりでごめんね。」

「いえいえ。2人ともかなり素質いいですし、教えがいがあつていですよ。」

正直にゼロはそう思っていた。模擬戦を重ねていくに成長していくエリオとキャロ。まだ、数日しか経っていないのに、ハンデあつとはいえ、自分に一発当てる事ができるようになってきたのだから。

「せつこええば、捜査の方はいかがですか？」

「うん。相変わらず進展なし。」

例の管理局員への襲撃事件の捜査をしているフロイト。進展は相変わらずないこと。しかもフェイトが捜査をしているのはこの事件だけではない。

スカリエッティの事も同時に捜査しているので、敵ながら変に关心してしまうゼロであった。

「体壊さないでくださいよ。」

「ふふつ、心配してくれるんだ。大丈夫だよ、ありがとう。」

フロイトは、そう言って行ってしまった。フェイトを見送ったゼロは当初の目的地、デスクに向かった。

「さてと、始めますか。ステラ、補佐お願い。」

「ア解しました」

ステラに手伝つてもらいゼロは、仕事を始めた。

「マスター、そこ違います」

「ん? ああ、ごめん。」

ゼロよりデバイスの方が、結構優秀だった。それから、何度もステラに指摘を受けて何とか片付いた。そして、ゼロは訓練の事が気になつて訓練場に向かつた。

「お、ゼロ。」

「どうですか、ヴィータ副隊長、訓練の状況は？」

訓練場に着くと、ヴィータが、訓練の様子を見ていた。

「今は、なのはを相手にやつているところだ。」

なのは対フォワードは、ときどきやつている訓練だ。リミッター付きのなのはといえば、フォワード陣に対してもまだきつい部類に入る。

「お、戻ってきた。」

「終わったみたいだな。」

ゼロが、来て間もなくなのはとの戦闘が終わつたようだ。見るに4人ともかなり疲れている様子だ。

「お疲れ様。大丈夫か？」

「あ、ゼロさん。」

「大丈夫です・・・」

口では、そう言つがかなり疲れていてみんなフラフラしている。

「頑張った。頑張った。」

ゼロは、4人の頭を順番に撫でて行つた。

111

微笑ましいこの光景。だが、まだゼロは知らなかつた。この先、あんな事が起きるなんて

第14話 ゼロの訓練2（後書き）

はい、第14話でした。どうも、Theaterです。

今回ば、Hリオ&キャロの訓練の2回目でした。

ちょっとHリオとキャロを強くし過ぎたかな・・・ハンデがあるからって2

人だけでゼロに一発当てるなんて

まあ、それは何とかなるとして、次回がすじこじになります。なのは対スバル&ティアナの戦い。俗に魔王降臨ですけど、これはゼロにかなり頑張つてもうおつと思ひます。少し、ネタばれをするならかなりキレます。

では、少しネタばれをしたところで次回、第15話で会いましょう。

第15話 伝わらない想い（前書き）

やつすきるなのはにゼロが鉄槌を下す。

第15話 伝わらない想い

「さて、午前中のまとめ20%で模擬戦をやるよ。まずは、スタートーズからやるつか。バリアージャケット準備して。」

「「はいー。」」

今日の午前の訓練の最後にスタートーズとライトニングに別れなのは模擬戦をやることになった。

「「ヒリオとキャロのは、あたしとゼロと一緒に見学だ。」

「「はいー。」」

ゼロ、ヴィータ、エリオ、キャロの4人は離れたところから、模擬戦を見る事なる。この時、ゼロは少しだけ胸騒ぎがしていた。そして、スタートーズの2人を見てみると、バリアージャケットを着て準備万端だつた。

「やるわよ、スバル！」

「うんー。」

やる気に満ちているティアナとスバル。本来なら、喜ばしいとこ

なんだがゼロの不安は増すばかりだった。

そんなところに、ゼロたちが見ている廃ビルの屋上のドアが開いた。

「ああ、模擬戦もう、始まっちゃってる?」

「フハイドさん!」

事件の捜査で忙しそうのフハイドが来た。

「私の手伝おうと思つたんだけど・・・」

「今は、スターズの番。」

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思つたんだけどね。」

「ああ、なのはもっこ最近、訓練密度濃いからな。少し、休ませねえと・・・」

「なのは、部屋に戻つてからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作つたり、みんなの陣形考えたり。」

それを聞いたゼロは、呆れていた。弟子も弟子なら師も師だなど。ティアナの無茶ぶりはどうやらなのはに似ているようだ。

(そんな2人が、ぶつかつたら一体どうなるんだ？)

模擬戦を見ながら、ゼロはそんな事を思っていた。

「お、クロスシフトだな。」

ビルの下を見ると、ティアナがなのはに向けてクロスファイアを放つた。

「なんか、切れがないな。」

「コントロールは良いみたいだけど。」

なのはは、追尾してくるクロスファイアを難なく躱していく。すると、前にウイングロードが伸びてきた。

その上を全速で走つてくるスバルを見たなのはは、スバルに向けてアクセルシューターを放つ。しかし、スバルはプロテクションで止める。そして、反撃になのはに向けて拳を放つた。だが、それはなのはのプロテクションによつて防がれる。

スバルの攻撃を防いだなのははおもいつきリスバルを吹つ飛ばした。

「こら、スバル。ダメだよ、そんな危ない軌道！」

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますからー。」

「ん、ティアナは？」

スバルに気を取られているとティアナの姿がなかつた。周りをよく見回す。すると、遠くのビルの屋上がピカッと光つたと思うと、なのはに頬にレーザーポイントが当たる。

「砲撃？ティアナが。」

見学組もティアナの予想外の攻撃に驚いていた。

（スバルの無茶と思える突撃・・・そして、ティアナの砲撃・・・）

ゼロは、模擬戦の様子を冷静に観察する。そして、この先の展開を考えていた。

その間に模擬戦はすでに次の展開に進んでいた。また、スバルがなのはに同じように突つ込んで行つたのだ。だが、さつきと同じようになのはは、当然それを防ぐ。

「あつー！」

「ティアー！」

なのはが、スバルの攻撃を防ぎながらティアナの砲撃を注意して見るとティアナの姿が光となつて消えるのが見えた。

「シリエットか……じゃあ、本物は……」

見学しているゼロは、本物のティアナを探した。周りのビルや道路、その他いろいろ探したが、その姿はなかった。

「ビリだ……もしかして……いた！」

いくら探しても姿がないティアナ。そこでもしやと思いゼロは、スバルの出しているウイングロードを探した。すると、ティアナがウイングロードを走っているのを見つけた。

「バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける。」

ティアナは、スバルがなのはを抑えている間にウイングロードを駆け抜け、なのはの真上に到達した。そして、魔力刃でなのはのバリアを切り裂く作戦だったようだ。

「一撃必殺！ てええええ！」

なのはの真上から一直線に落下していくティアナ。勝利を確信していたが、しかし……

「レイジングハート……モードリリース。」

◀ A11 ▶ right ▶

何を思ったかなのには、レイジングハートを待機状態に戻した。そして、そのままティアナが突っ込んだ。

その際に起きた爆発で3人の姿が見えなくなつた。そして、だんだんに煙が晴れてきて姿が確認できるようになった。

「おかしいな。2人ともどうじゅやつたのかな？」

「えつ？」

煙が完全に晴れるとそこには、スバルに拳を左手で止め、ティアナの魔力刃を右手で掴んでいるなのはの姿があつた。

その光景を見て、ティアナとスバルは驚愕していた。

「頑張っているのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ。練習の時だけ言う事聞いていいふりで、本番でこんな危険な無茶するんなら、練習の意味ないじゃない。」

魔力刃を握んでいる右手から血が滴り落ちる。

「ちゃんとさ、練習通りやるひつよ。ね？」

「あ・・あの・・・」

光が無い瞳でそう問い合わせるのは、それを見たスバルは、ある意味で恐怖していた。

「私の言つてること、私の訓練・・・そんなに間違つてる？」

「くつ！」

<Blade erase. >

魔力刃を解除して、ティアナはなのはから離れた。

「私は、もう誰も傷つけたくないから！無くしたくないから！」

「ティア・・・」

「だから、強くなりたいんです！」

ティアナは、必死に訴えた。だが・・・

「少し、頭冷やそつか・・・」

「あつ・・・」

「クロスファイア。」

「ファンタムブレイヴ」

「・・・ショート。」

無情にも、なのははティアナにクロスファイアを打ち込んだ。

「ティア！あつ？バインド！」

「じつとして。よく見てなさい。」

クロスファイアを受けて無防備な状態のティアナになのはは、追撃を撃とつとしていた。

「な、なのはさん・・・」

スバルの叫びも空しく、なのはは撃つた。

「ティアアアアア！」

なのはの追撃でティアナは完全に墮ちたと誰もが思つた。なのはのそばにいたスバルは、涙を流し膝をついた。見学組も黙つてその様子を見ていた。だが、その場には5人いるはずなのになぜか4人しかいなかつた。

「まったく、馬鹿ばっかりだ。」

ティアナがいた場所の煙が晴れた。すると、そこにはティアナを庇うように立つているゼロの姿があつた。

「なのは隊長。ちょっとやりすぎですよ。」

「ゼロ君・・・邪魔しないでもらえるかな。」

「できません。明らかに過剰攻撃ですよ。今のは。」

ティアナに追撃が当たる前にティアナの前に立ちクロスファイアを防いだゼロ。そして、なのはにやり過ぎだと指摘する。

しかし、なのはは聞く耳持たんと言つた態度で返してきた。

「邪魔するなら、ゼロ君も頭冷やしてもいいよ。」

なのはは、ゼロに向かつてクロスファイアを撃つてきた。だが、ゼロはそれを軽く防いだ。

「なのは隊長。ちょっと動かないでください。」

「えつ・・なつ！」

ゼロは、なのはをドームスターで動きを封じた。そして、気絶寸前のティアナを抱え、スバルの下へと飛んだ。

「よつと。大丈夫かスバル。すぐ外してやるから。」

スバルのところまで来ると、スバルに拘束していたバインドを外した。

「じゃあ、行くよ。」

ティアナと一緒にスバルも抱え、ゼロは見学組の所まで連れて行つた。

「フュイト隊長、ヴィータ副隊長、2人をお願いしますね。」

「おまえは、どうするんだ?」

「ちょっと、お仕置きにね。」

未だ、ウイングロードの上で身動きができないままじっとしているのはを睨めつけながらゼロが言った。そして、ゆっくりとゼロはなのはの下へと飛んで行つた。

「お待たせしました、なのは隊長。」

「ゼロ君。許さないよ・・・」

「許してくれなくていいです。実を言つと俺もかなり怒つてるんですよ。」

なのはを鋭い目で睨み付けて言つた。

「ドームスター解除。これで動けますよ。」

「ん・・・」

ドームスターが解除され、なのはは動けるようになった。動け

「やがてなるとはほ、ゼロから闘合を取つた。

「覚悟してもいいよ。」

「俺が、負けるとでも。」

「私はロミッターがあるけど、それはゼロ君も負けじよ。アランクじや私には勝てないよ。」

「魔力だけが、実力じゃないですよ。」

「すぐに終わらせる。」

互いにデバイスを起動させ、相手の動きを見る。中距離～遠距離が主体のなのはにとつてゼロはやり辛い相手と言える。ゼロは、ミッドチルダ式だが、近距離を主体にしている攻撃が多い。しかも、フェイントほどではないが、スピードがある。

（懐に入られないよ、すこすこ。）

なのはが、そんな事を思つてゐるが、ゼロにとつてそんなことは関係なかつた。

「行くよ。」

ゼロに向かつてアクセルショーターを撃つのは。十数のスファイアがゼロに向かつていく。しかし、ゼロはプロテクションを張る様子も避ける様子の無くその場で止まっていた。だが、徐に右手を前に出し、余裕の笑みを浮かべた。

「ドールマスター・・・」

突如にしてアクセルショーターが、その動きをピタッと止めた。その予想外の出来事になのはは驚きを隠せないでいた。

「どうして・・・」

「前にも言いましたよね。ドールマスターは、無機物にも有効だって。だから、当然、魔力だつて操れるんです。」

「あつー。」

「だから、どんな魔力攻撃でも俺には、意味がありません。はい、返します。」

ゼロは、アクセルショーターをなのはに向けて逆に返した。

「くつー」

自分で放ったアクセルシユーターを自分で受けた事になってしまったなのは。プロテクションで防いだのでそれほどのダメージにはならなかつた。

「なのは隊長。一つ聞きます。」

「何かな?」

「ティアナが、何あんな無茶な事をしたか、わかっていますか?」

「わかるよ。だけど、だからあんな無茶をしていいってわけじゃない。」

それを聞いて、ゼロの怒りがMAXになつた。

「そうですか・・・それがわかつていて、何もしなかつたんですか・

・・ステラ、モード2。」

＜了解しました ＞

ステラをモード2にしたのはに向ける。

「 もういいです。次で終わります。」

なのはへの怒りが頂点に達したゼロは、もう手加減など忘れていた。その姿は、まるで裏のあの姿のように冷たいオーラを放つていた。

第15話 伝わりない想い（後書き）

はい、第15話でした。どうも、Theaterです。

今回は、微妙でした。

いまいち、なのはへ怒りを向けるのが難しくて、無理矢理な感じになってしましました。

本当は、この話で終わらせるつもりだったんですけど、長くなってしまいそうなのでなのはを墮とす直前で終わらせました。

次回は、結構なのはを圧倒的に倒しますのでその辺でまた、無理矢理な感じになってしまふかもしだいので先に言つておきます。

では次回、第16話で会いましょう。

第16話 墮ちたエース（前書き）

ゼロとの戦いに決着がつく。

第16話 墮ちたエース

「もういいです。次で終わらせます。」

なのはにステラを向け、冷たい目でそつと直視するゼロ。それに対し、なのはと並ぶとその言葉が気に入らないじくクッと言つ顔をしていた。

「ゼロ君。さすがに笑えないよ。」

「行きます。」

なのはの言葉など無視をして、ゼロはなのはに向かって飛んだ。最初に牽制がてら、スフィアを4つ出し、なのはに向かって放った。

「そんなの効かない。」

なのはは、それを軽々と躱した。

「効くとは思つてません! はあー!」

なのはが、スフィアを躱している隙を狙つて、ゼロはなのはの後

ろを取つた。そして、ステラで横一閃に薙ぎ払つ。

「くつ！」

◀ Flash Move ▶

だが間一髪、高速移動魔法によつてなのば、危機を脱した。

「惜しい・・・」

口でせつ言つが、ゼロはまったく悔しいとは、思つていない。む
しろ、簡単に終わつてしまつては詰まらないと想つていた。

「はあはあはあ・・・」

ゼロから、距離を取つて息を整えているのは。

（今のは、危なかつた。少しで、気を抜けば負ける。）

今の攻撃によつてなのはの考えは変わつた。ゼロの言つ通り、下手をすれば今まで終わつていたかもしれない。

「す、ふう～」

深呼吸をして、自らを落ち着かせる。そして、眼前のゼロを見る。余裕を見せているのか、なのはが息を整えるまで、まったく攻めてこなかつた。だが、なのはにとつてそれは、勝機だつた。

（ゼロ君は、私に簡単に勝てると思って油断している。なら、その隙を突く。）

◀ Accel Shooter ▶

なのはは、アクセルショーターを最大同時操作できる32発を自分の周りに出した。それを見たゼロは、ステラを構えた。

（まず、最初に）

32発中の10発をゼロに向けて放つ。ゼロは、当然防御の態勢を取つた。しかし、10発のスマッシュはゼロには当たらなかつた。

「な、何だ？」

ゼロは、自分の周りを見て驚いた。10発のスマッシュが、まるで

球を描くよつに縦横無ゆにゼロの周囲を回っていた。

それは、まさにスフィアの艦と感じた感じで、ゼロを閉じ込めていた。そして、なのはは残りのスフィアで同じよつて2重3重に艦を作りゼロの動きを封じた。

「これでゼロ君は、身動きできないね。」

「こ」の程度で動きを封じたつもりですか？」

「問題ないよ。少しでもその場から動かないよつにするだけでいいんだから。」

そう、なのはの真の狙いは、別にあった。スフィアは、ただの囮。ゼロを数分でもその場から動かないよつにすればいいだけだった。

「これで終わり、私の勝ちだよ。」

なのはは、レイジングハートをゼロに向けて、勝利宣言をした。

「ディバイン！・・・バスター！」

なのはが、最も得意とする砲撃魔法、ディバインバスターがゼロに向かつて放たれた。

「くつー！」

スフィアの檻のおかげで回避するのは、不可能。残された手段は、プロテクションで防ぐのみ。ゼロは、すぐにプロテクションを展開した。

だが、ゼロ自身そんなものが効果が無いとすぐに思い知らされた。ゼロに取つて予想外の事が起こったからだ。ゼロがプロテクションを展開した直後、それまでゼロの周囲を回っていたスフィアが、一斉にゼロ目掛けて飛んできた。そして、その衝撃でゼロのプロテクションが破壊された。

「なつー！」

プロテクションが、破壊され、ディバインバスターから身を守る術がなくなつた。そして、次の瞬間にはゼロは、ディバインバスターに飲み込まれていた。

「終わったな。」

「うん・・・」

今の戦いを静かに見守つていたヴィータ、フェイトにエリオとキヤロ。残りの2人はと言つて、ティアナは、先ほどのなのはのクロスファイアによつて氣を失つていて、スバルはそんなティアナのそ

ばでつかまっていた。

「ゼロもよくやつた方だけじよ。なのはに、勝てなかつたな。」

「そり・・だね。」

フロイトは、元気がない声で頷く。

「終わったかな・・・」

ゼロに、デイバインバスターが、決まってこれで勝つたと思つたなのは。デイバインバスターによつて巻き起こつた煙が徐々に晴れて行く。

「えつー。」

「結構効きますね・・・」

そこには、多少ダメージを負つただけで、全然元気なゼロの姿があつた。

「嘘・・・」

なのはは、驚愕していた。手加減はしなかつた。それも防御なしでくらえれば間違いなく気絶する威力だったはずだ。

「それでは、今度はこっちから行きます。」

ゼロは、ステラを構えた。

「ひてん飛天しょうげき翔載！」

飛ぶ斬撃、それが適切な表現だろ？。だが、それはフェイトが使うハーケンセイバーとは、まったく違う。魔法で形成された魔力刃を撃ち出すハーケンセイバーと違い、飛天翔載は純粹な斬撃を飛ばす。故に非殺傷設定など無意味。

「あつ！」

< Protection . >

レイジングハートが、プロテクションを自動展開をした。だが、それは意味がないこと。

「きやあああああ！」

飛天翔戦は、なのはのプロテクションをまるで紙をはさみで切るかのように簡単に切り裂いた。そして、その衝撃でなのはは、地面へと落ちて行つた。

「なのはー！」

フロイトが、叫ぶ。そして、一皿散になのはの下へと飛び出せりとする。

「待てー！」

だが、ヴィータがそれを止めた。

「ヴィーター離して。なのはがー！」

「落ち着けーよく見やー！」

「えつー！」

ヴィータに言われ、フロイトはなのはの落ちた場所を見た。

「う、うひひ・・・」

なのはは、無事だつた。だが、大丈夫とは言える状態ではなかつた。

「それで、終わりですか?」

ゼロが、上空からなのはに向かつて言ひた。まるで、絶対的な強者が弱者を見下ろすようだ。

「くつ・・・・・」

なのはは、何とか立ち上がつた。そして、上にいるゼロを見上げる。さつきの一撃、プロテクションが切り裂かれたとは言え、バリアージャケットのおかげで何とか致命傷にはならなかつた。しかしながらはにとつては大きなダメージになつてゐる事には変わりはない。

「ふつ!」

気力を振り絞り、再び空へと上がる。

「さすが、エースオブエースと言つたといひですね。でも、終わり

です。」

「それは・・・まだ、わからないよー。」

「ん！」

突如にしてゼロの皿田は奪われた。

「バインド？ それにこれは・・・」

ゼロは、なのはのバインドによつて動きを封じられた。それもただのバインドではない。通常では考えられないほど、何重にも重ね掛けされていた。

「あの短時間でよくこれほどのバインドを・・・」

「結構無理したよ。でも、これで本当に終わりだよ。」

なのはの前に魔力が集まつていく。それは、先ほどまでゼロが使用した魔力も同様に集束されて行つた。今から、放つはなのは最強の集束型砲撃魔法。

「全力全開！ スターライトブレイカー！」

ピンク色の閃光が放たれる。ゼロは、その光景を静かに見ていた。まるで、ゆっくりと時間が流れるかのようにゼロは、永く感じられた。

そして、ピンク色の閃光はゼロを飲み込んで行った。

「はあはあはあ・・・・勝つた・・・」

最強の砲撃魔法を使い、これで完全に勝つたと確信するのは。だが、悪夢はここから始まつた。

「はあはあ・・・・えつ・」

なのはが、ふいに上を見る。

「並の魔導師なら、今まで終わっていたな。だが、本当の終わりはこれからだ。」

「どうやつてバインドを解き、どうやつてスターライトブレイカーを回避したのか。なのはの頭の中はそれでいっぱいだった。だが、ただ一つの真実は、ゼロがそこそこと云つことだ。」

「おわりだ。」

ゼロは、ステラを振り上げ急降下をしてきた。

「あつ！」

◀ Protecti・・・ ▶

「崩天牙戟。
ほうてんがげき。」

レイジングハートが、プロテクションを張るより速く、ゼロがなのはを斬った。ステラ自体に非殺傷設定がされているとは言え、上空から急降下の力を乗せた一撃は、いくらバリアージャケットがあつたとしても防げるものではなかつた。

「かはつ！」

「俺の勝ちだ。」

口から血を吐きなのはは、力なく落ちていく。それをゼロは、黙つて見ていた。こうして、エースオブエースは、地に墜ちた。

第1-6話 墓ちたエース（後書き）

はい、第1-6話でした。どうも、Theaterです。

何か、ちごいことになりました。ゼロがなのはを墮とす事になると
は・・・

それと、なのはをかなり強い設定にしそぎたかなと少し反省です。
これから、
ゼロはどうなるんでしょうね。

では次回、第1-7話で会いましょう。

第17話 大切なもの（前書き）

昼の騒動が落ち着いたのも束の間、波乱はまだ終わらない。

第17話 大切なもの

「う～ん・・・あれ？」

「あ、起きたティアナ。」

「シャマル先生・・・えっと・・・」

ティアナは、今の状況がわからないようでキヨロキヨロした。

「ここは、医務室よ。昼間の模擬戦のこと覚えてる?」

「・・・はい。」

ティアナは、俯き加減で頷いた。

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージは無いと思つんだけど。どこか痛いとこある?」

「いえ・・・大丈夫です。」

そう言つて、ティアナは時計に目をやつた。

「えつ！ 9時過ぎーーえー夜ー！」

「すゞしく熟睡していたわよ。死んでるんじゃないかつて思うくらい。最近、ほとんど寝てなかつたでしょ。溜まつていた疲れが一気にあたのよ。」

「わつですか・・・」

「何とも言えない気持ちになるティアナ。

「ティアナが、田を覚ましたし、後ばぜ口君がどうなるかね。」

「えつ？ ゼロさんどうかしたんですか？」

「ここで意外な人の名前が出てきたのでティアナは、首を傾げてシヤマルに聞いた。

「うん・・・ティアナ。模擬戦の時、なのほちやんの攻撃からゼロ君が守ってくれたのは覚えてる？」

「え？ ・・・あつー」

それまで覚えていなかつたが、シャマルに言われ思い出した。とどめの一撃を受ける直前に誰かが自分の前に立つて守ってくれたのか。

「たぶんティアナはそこで気絶してしまったから、その後、何がおつたのか知らないでしょ。」

「ええ。」

「実はね。」

シャマルは、ティアナが眠っている間に何があつたのかすべて話した。ゼロが、なのはと本気で戦闘を行つた事、そしてなのはがゼロによつて撃墜されたと。

「そんな・・・」

自分が、気絶している間にそんな事が起こつていたのかと驚いていた。

「それで、なのはさんは？」

「大丈夫よ。命に別状はないわ。ただ、ちょっとダメージが大きかつたけど、私が治療したしもう回復してると思うわ」

シャマルは、苦笑しながらそう言った。

(なのはせちやんは、大丈夫だけど・・・問題はゼロ君ね。)

「ゼロ君。 とりあえず、ゼロ君にはしばらくの間、謹慎してもらつわ。」

「わかりました。」

ティアナが、目を覚ます数時間前。ゼロは部隊長室にいた。理由は無論、昼の戦闘に関してた。その後、なのはを撃墜して下に降りると、ヴィータ、そして、騒ぎを聞きつけたシグナムによってゼロは拘束された。

そして、すぐにはやての下へと連れて行かれ、ティアナが目を覚ます頃まで取り調べを受けていたのだ。いくら、新人の事を心配したからと言って、仲間に大きな怪我をさせてしまったようなほどの攻撃を行つたゼロには重い処分が下されるはずだつた。

しかし、今回の事に関しては、なのはにも責任の一端があるとされ、ゼロの処分は自室での無期限の謹慎ということになつた。

「じゃあ、もう行ってええで。」

「失礼します。」

ゼロは、一礼すると部隊長室を出て行った。

「ふう～。」

重苦しい緊張状態から解放され、はやは一息吐いた。

「大丈夫ですか？はやてちゃん・・・」

「大丈夫や。ありがとうナリイン。」

「それで、これからどうしますか主。」

部隊長室には、はやてトリイン他にシグナム、ヴィータ、が一緒にいた。無論、ゼロが何か仕出かさないかの見張りの為にいたのだが、今は、ゼロも反省している様子だったので自室に戻るのには、見張りを付けることはしなかつた。

「さて、どうしたもんかな・・・」

「今回の事は、ゼロにかなりの非があると思いますが・・・」

「うーん、そうは言つてもな。」

はやは、かなり悩んでいた。確かにシグナムの言つ通り、ゼロはやり過ぎた。下手をすればなのはの魔導師生命を絶つてもおかしくないくらいだったから。

しかし、どうにもはやはゼロをそこまで責める気にはなれなかつた。理由ははやは自身にも分からぬ。ただ、何となくそう感じてしまつてはいるのだ。

(「何なん?」)の感じ・・・

「なのは大丈夫?」

「うん。大丈夫だよフェイントちゃん。」

なのはは、現在自室のベットで休んでいた。シャマルに治療をしてもらい、もうほとんど回復していた。

「さつき、ティアナが田を覚ましてね。スバルと一緒に謝りに来れたよ。」

「やう・・・でも、『めんね。監督不行き』で・・・フュイトちゃんやライトニングの2人まで巻き込んで・・・」

「ううん。私は全然。」

フュイトは、全然とフォローする。

「ティアナとスバル、どんな感じだった?」

「やつぱつまだ、『機嫌斜めだったかな。』

「そつか・・・あつ、それとゼロ君はどうなったの?」

「えつと・・・ゼロ君・・・」

フュイトは、言に難しうに言葉を詰まらせたが、素直に言ひ「」とにした。

「とつあえずは、無期限の謹慎とひき事になつたみたい。」

「うなんだ・・・」

「うん。」

「ゼロ君には、悪い事をしたな・・・」

「なのは、そんなに・・えつ?」

突如、隊舎中に警報が鳴り響いた。理由は海上にガジェットが出
現したことだつた。すぐに、隊長陣が作戦会議の為、集まつた。だ
が、敵の狙いがいまいち掴めなかつた。

ガジェットが、現れた海上にはレリックの反応はあるか、海上施
設も何もない場所だつた。そこをガジェットは、旋回飛行を続けて
いたのだ。これらの事から、はやは敵がこちら側の戦力を探るの
が目的と判断した。

そして、すぐに隊長陣とフォワードをヘリポートへ集合させた。

「今日は、空戦だから出撃をするのは、私とフェイト隊長、ヴィー
タ副隊長の3人だよ。」

「みんなは、ロビーで待機ね。」

「そつちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ。」

「「「はいーーー」」

「・・・はい。」

ティアナは、まだ昼の模擬戦を引きずっている様子で元気のない返事だった。

「あ、それからティアナ。ティアナは、出動待機から外れていようか。」

なのはの言葉にティアナの心臓がドクンとする。それを聞いたスバル、エリオ、キャロも同様に驚きを見せた。

「その方がいいな。そうしどけ。」

「今夜は、体調も魔力もベストじゃないだろ? し・・・」

「言つ事を聞かない奴は使えないってことですか・・・」

俯いてティアナが言つ。

「自分で言つてて分からない。当たり前のことだよ、それ。」

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だってちゃんとサボらずにやつてます。」

「ん。」

たまらず、ヴィータが前に出ようとする。しかし、なのはがそれを制止する。

「それ以外の場所での努力まできちんと教えられた通りじゃないとダメなんですか！私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もキヤロみたいなレアスキルも無い。少しくらい無茶したつて、死ぬ氣でやらなきゃ強くなんてなれないじゃないですか！」

「くつ！」

ティアナが、言い終わると同時にそばにいたシグナムがティアナの襟を掴んだ。ティアナは一瞬なにが起こっているのかわからなかつた。だが、次の瞬間シグナムが拳を振り上げるのが目に映つた。ティアナは殴られると思い目を瞑つた。

しかし、いつまで経つても痛みが来ない。不思議に思いティアナはそつと目を開いた。

「えつ？」

「まったく、嫌な予感がして来てみれば……」

そこには、シグナムの拳を受け止めているゼロの姿があった。

第17話 大切なもの（後書き）

はい、第17話でした。どうも、Theaterです。

ゼロは謹慎処分ということになりました。現実だつたらむつと重いのが来るとはおもいますが。

それと、なのはの怪我ですが、当初はもっと重体にしようかなと思つて書いていたのですが、書いている最中になのはが、出動できないとあの話を語る時に本人いるじゃんと気付いてしまい。急遽、なのはには出動してもらうためにダメージが大きいがもう回復したと言つ無理矢理な展開にしました。

次回ですが、無論あの話を語る場面になりますが、ちょっとだけすごい展開にしようと思っています。今までの展開から察しがつく人がいるともいます。
たぶん・・・居ればいいな。

では次回、第18話で会いましょう。

なのはの過去を知つたゼロは・・・

「ゼロ！貴様、なぜここにいる？」

「嫌な予感がしたもので・・・」

ティアナの襟を掴んでいるシグナムの手を解き、シグナムをティアナから遠ざける。

「ヴァイス！もう、出られるか？」

「乗り込んでいただけりやすぐ」でも――

「だそうです。隊長さん達、さつさと行つてください。」

ゼロは、冷たい瞳でなのは達に言った。それに対して、なのは達は黙つてヘリに乗り込んだ。そして、ヘリはなのは達を乗せ現場へと飛び立つて行つた。

「ゼロ、お前は命令違反をした。わかっているな。」

「ええ。」

「あ、あのシグナム副隊長！」

シグナムが、ゼロを連れて行こうとするが、スバルがそれを引き留めた。

「何だ？」

「命令違反は絶対ダメだし、さつきのティアの物言いとか、それを止められなかつた私は、確かにダメだつたと思います。だけど、自分なりに強くなるうとするのとか、きつい状況でも何とかしようとする頑張るのってそんなにいけないことなんでしょうか！？自分なりの努力だとかやつちやいけないんでしょ？」

スバルは肩を震わせながら、シグナムに問いかける。周りのみんなもそれを黙つて聞いていた。すると、突然に後ろから声が聞こえてきた。

「自主練習は良い事だし、強くなる為の努力は、とてもいい事だよ。

」

「シャーリーさん・・・」

声の主はシャーリーだった。

「持ち場は、どうした？」

「メインオペレーターは、リイン曹長がいてくれますから。何かもう、みんな不器用で見てていられなくて。みんなちょっとロビーに集まつて。あたしが、説明するから、なのはさんの事となのはさんの教導の意味を。」

それから、その場にいたみんなは、シャーリーの後に続いてロビーに集まつた。そこには、知らせを受けてシャマルもいた。そして、なぜかゼロも一緒にその場にいた。シグナムが、一端ゼロを部屋に連れて行こうとすると、シャーリーがゼロも一緒にと言つてきたので、ここにいると言つ事だ。

「昔ね、1人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかつたし、戦いなんてするような子じゃなかつた。」

シャーリーは、モニターを操作して、1つの映像を出した。そこには、1人の少女の姿が映つっていた。よく見るとその少女は、幼い頃のなのはだった。

「友達と一緒に学校へ行つて、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずの子だつた。・・・だけど、事件は起つた。魔法学校に通つていた訳でもなければ、特別なスキルがあつた訳でもない。偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかつたつてだけのたつた9歳の女の子。そして、魔法と出会つてからわずか数ヶ月で命掛けの実践を繰り返したの。」

映像には、幼いなのはが激しい戦いをする場面が、流れた。すると、どこかで見たことがある金髪の少女がなのはと戦っているシンがあった。

「これって・・・」

「フェイトさん・・・」

それから、なのはとフェイトが、出会い、戦う原因となつた事件。P・T・事件の話がされた。母親の命令で、ロストロギアを集めるように言われたフェイト。偶然に魔法に出会い、探し物の手伝いをする事になつたなのは。そんな、2人の出会いの物語を。

その中で、なのはが集束砲を撃つ姿を見た時、フォワードの4人は驚きを隠せなかつた。唯でさえ、集束砲は体に負担を掛ける魔法だ。それをたつた9歳の女の子が使つていたのだ当然であつた。それを見たティアナが、何か思うような表情をした。

そして、話しはもう1人の少女との出会いに移る。闇の書事件。

今でこそ仲が良いなのは達とヴォルケンリッター。だが、出会いは敵同士だつた。自らの主を守る為に戦う騎士。真実を知り、止める為に戦う少女たち。そんな圧倒的な力を持つ騎士に敗北をした少女。もつと強くなりたい。その強い願いで手に入れた新たな力、カーリッシュシステム。まだ、安全性が確かでなかつた頃。体に無理が掛かるのは承知で力を解放し、戦つた。

そんな、壮絶な戦いの話を黙つて聞いているフォワードの4人。

「だが、そんな事を繰り返して体に負担が生じないはずがなかつた。」

「

「事故が起きたのは、入局2年目の冬。」

シャマルが、悲しげな顔をして言つ。

「異世界での捜査任務の帰り。ヴィータちゃんや部隊の仲間と一緒に出掛けた場所で、ふいに現れた未確認体。いつものなのはちゃんなら、きっと何の問題も無く味方を守つて、墮せるはずだった相手。だけど、溜まっていた疲労。続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃつた。その結果がこれ。」

シャマルが、モニターを操作してある映像を出した。そこには、酷い怪我をしたなのはの姿だった。

「なのはちゃん、無茶して迷惑かけて」めんなさいって。私たちの前では笑つてたけど、もう飛べなくなるかもとか、立つて歩くこともできなくなるかもって聞かされて、どんな思いだったか・・・」

その映像を見て、また驚愕するフォワードの4人。

「無茶をしても、命を賭けても譲れない戦いといつのは確かにある。だが、お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を賭けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったか?」

「あつ・・・」

「訓練中のあの技は、一体誰の為の、何の為の技だ。」

ティアナは、俯いてしまつ。

「なのはさんは、みんなにも、自分と同じ思いをさせたくないんだよ。だから、無茶なんてしなくていいように、絶対絶対みんなが元気に帰つてこれるようこつこつ・・・本当に丁寧に一生懸命考えて教えてくれてるんだよ。」

シャーリーの言葉に4人は何も言えなくなつてしまつた。

「くくく・・・」

だが、唯一一人だけ、シグナム、シャマル、シャーリーの言葉が理解できていなかった。

「ゼロ?・どうした?」

「はつははははははははー。」

「ゼロやん。」

「ゼロ君・・・」

突然、ゼロが笑い出したのでその場にいたみんながゼロの方を見た。

「まつたく、どんな話かと思つたら、実にくだらない。」

「な、何！」

「自分と同じ思いをさせたくない？だから、丁寧に一生懸命に考えて教えてくる？実にくだらない。」

「貴様・・・何のつもりだ！」

シグナムが、ゼロの襟元を掴んで引き上げた。

「なのは隊長は、教導官として未熟ということですよ。」

ゼロは、平然として顔で囁つ。

「無茶をしないように、教え子が大怪我しない為に、一生懸命になるのは認めましょ。だけど、それが相手に伝わらないんじゃ意味がない。シグナム副隊長たちのように、付き合いが長い訳じやない

んです。ひやんと嘔葉にしないこと自分の気持ちが伝わらませますよ。

「へー。」

シグナムは、ゼロを離した。

「それじゃあ、俺はこの辺で。」

（まさか・・・あの時の魔導師が、高町なのはだつたとは・・・生きていたとは・・・）

そんな事を考へてゐる間に部屋に着いた。ゼロは、部屋に入るとそのままベットに横になり畳を覗いた。そして、昔の記憶を想い出す。

その日、ゼロはガジェット・型と・型を連れて、ある世界に来ていた。

「ドクターが、言つていたのはこのあたりか・・・」

ゼロは、スカリエットに命令され、ガジェット・型の稼働テストに来ていた。テストの内容は、任務で来ている管理局員の襲撃。

「さてと・・・魔力が強いのが、2人か。」

管理局員の魔力を探し、強さの度合いを調べた。その結果、強いのは2人と判明した。

「あの、白いのと赤いのだな。魔力だけやたらと高いが、実力はどうかな?」

ゼロは、管理局員たちを見て、不敵に笑う。そして、右手を挙げて、管理局員たちを差す。

「行け!」

ゼロの合図に「ガジエット？型と？型が一斉に管理局員たちに向かって行った。

「な、何だ！」

「ヴィータちゃん！」

突然の襲撃に管理局員たちは、驚いていた。いくら、強い魔導師がいても突然の襲撃を受ければ、容易く壊滅に追い込めるとゼロは思っていた。

しかし、その考えは甘かった。ゼロの考えとは逆に、ガジエットは次々に破壊されて行っていた。

「結構やるな。？型がもうほとんど壊された。だけど・・・」

管理局の魔導師によつて破壊されていくガジエット。ゼロは、予想外な展開に関心していた。だが、管理局員が倒しているのは、？型だけ。まだ、？型は姿を現していない。果たして、管理局員に？型が、倒せるのかなどゼロは思っていた。

そんな時、ゼロはある事に気づいた。白いバリアージャケットを着た魔導師の動きがどこかおかしいのを。

「あの動き・・・終わつたな。」

ゼロが、そう呟いた瞬間、白いバリアージャケットの魔導師が、光学迷彩で姿を消していた？型の刃に胸を貫かれている光景が、目に映った。力なく倒れて行く魔導師。そばで、それを見ていたであろう仲間の赤いバリアージャケットの魔導師が叫んでいるのが聞こえる。

その赤い魔導師は白い魔導師を守るように？型を破壊した。そして、急いで白い魔導師の下へと駆け寄つて行く姿が見られた。

「さて、どうなったかな。」

一通り、戦闘が終わつた頃を見計らない、ゼロは管理局の魔導師の下へと近づいて行つた。そばまで来ると赤い魔導師は白い魔導師を抱きかかえ何度も呼びかけていた。

「その子は、助からないよ。」

「誰だ！？」

突然、声を掛けられたことに赤い魔導師は、振り返つた。すると、そこには黒いフードで顔を隠した男が立つてた。

「そこにある残骸の持ち主だよ。」

ゼロはそう呟つて、壊れたガジェットを指さした。

「お、お前が・・・なのはを・・・」

「やつたのは、その機械人形だ。俺が、直接手を下した訳じゃない。」

「

「うるせえーお前がやつたんだーお前がー！」

赤い魔導師は、物凄い形相でゼロを睨み付けた。

（ダメだな。完全に冷静さを失っている。こんなのが相手にする暇はないな。）

ゼロは、踵を返した。

「ま、待て！」

「何か？」

「！」のまま、逃がすと思つてんのか！」

「目的は、果たしたので用はないです。それじゃあ、縁があればまたどこかで。」

「ま、待ちやがれ！」

ゼロは、そのまま吹雪の中に消えて行つた。

「縁があればか・・・」には、何かと縁がある奴が多いな。」

ティアナに続き、今度はなのはどヴィータ。機動六課のメンバーは、ゼロと何かしら繋がっているようだつた。これは、偶然？それとも必然？

「この分だと、まだ縁のある奴がいるかもしれないな。・・・そういえば、あいつ似てるな。あの時の魔導師に。」

第18話 過去と縁（後書き）

はい、第18話でした。どうも、Theaterです。

と言つ事で、なのはの過去にゼロが関わっていました。ここまでも
ると誰かが
死ぬ場面には必ずゼロが関わっているような感じになりますね。
なのはは、死んでませんけど。

さて、最後に何か意味深な事を言つていましたが、あと一人ゼロが
関わつてい
る事件があります。まあ、それは今は秘密と言つ事で。たぶん、ギ
ンガが出て
来る頃に・・・

では次回、第19話で会いましょう。

第19話 六課の休日（前書き）

1日休みになつたある日。新人たちは、街へ出かけた。

第19話 六課の休日

「はあ～、暇だな・・・」

あの事件から、早くも2週間が経過していた。そして、あの日の夜を境にティアナとなのはが、和解したと耳にした。何でも、なのはがティアナにちゃんと自分の考えを話したんだそうだ。ティアナは、それを理解し、今では前のように訓練に励んでいるらしい。

「う～～」

ティアナとなのはが、和解したのは良い事だ。だが、まだ解決していない事があった。そう、ゼロの謹慎は未だに解けていないのだ。あれから、ティアナやなのはが部屋に来て、仲直りしたと話に来た。ゼロも、なのはに一応ごめんと謝った。それから、今日まで一日に何人か入れ替わりで部屋に来て話相手になつてくれていた。

「はあ～」

だが、みんなも訓練や仕事で忙しい。だから、どうしても暇な時間ができてしまう。

「事務仕事くらい、させてくれてもいいのに・・・」

「ゼロゼーゼ。入るですよ。」

そんな時、部屋の外から声が聞こえてきた。声の主は、返事も聞かずドアを開けてフワフワと飛んでへつってきた。

「何かよひですか？ リイン曹長。」

「はいです。はやてが呼んでこると書ひ事で、部隊長室に向かう」となった。

「部隊長が？ わかりました。行きましょ。」

「それで、部隊長が呼んでこる理由は何ですか？」

「わからないです。リインは、呼んできつて言われただけですう。」

「もうですか・・・」

リインも理由を知らない。だつたら、一体何のよひなのだるうか。こんな朝早くに呼び出すほどの事つてなんだ？

「わあ、着いたですよ。まちひやんー、や口さん連れてきたですよ。

「

中でこむやせて、ゼロを連れてきたことを聞こながら中に入つて行った。

「失礼します。」

ゼロも続いて中に入る。すると、デスクに座つてこむやせてが険しい顔をしていた。

「部隊。呼びましょうか。」

「うふ。呼んだで。」

険しい表情を一切変えず、はやくしゃべる。その、様子にゼロはただ」とではないと悟つた。

(何だこのはやての異様な表情は? まさか、六課を辞めるとか言こ出すことじゃ……)

「ゼロ君。実はな……」

「さー……」

緊張の瞬間。ゼロは、喉を「ク」と鳴らす。せやは、真剣な表情で、ゼロを見つめる。そして、つっこみの時が来た。

「ゼロ君の謹慎を解くことになったんだ。」

「…………え？」

一瞬、せやはが何を言ったのか、ゼロは理解できなかつた。

「え？ と…………今何て？」

「だから、謹慎を解くことになつたんだ。」

じつやひ、聞き間違いではないいらしかった。せやは、謹慎を解くとほつからついた。

「その、うれしいですナビ。なぜですか？」

「それはな。なのはちやんとティアナが、頼みにきてた。ゼロ君の謹慎を解いてほしつつてな。」

はやての言つこみ、ここ最近、なのはとティアナが、俺の謹慎を解いてほしいとお願いに来ていたそうだ。しかも、2人と一緒にスバル、エリオ、キャロにフェイトまで、お願いして来たそうだ。さすがにそこまでされたら、はやても無下にはできず、いついて謹慎を解くことにしたそうだ。

「せやから、今日から仕事に復帰してもひつで。」

「わかりました。」

「うん。 それじゃあ、朝ごはん食べにいこか。 なのはちゃんたちも、そろそろ訓練終わる時間やし。」

「やつですね。 行きましょ。」

ゼロとはやては、朝ごはんを食べに食堂に向かう。

「リインを置いて行かないでくださいっすう~」

危うく、存在を忘れられ置いて行かれそうになつたリインは、2人の後を追いかける。

「みんな、おはようねえ。」

「あ、はやく起きな。」

「おはようござります。八神部隊長。」

食堂に着くと、そこにはすでに、訓練を終えたフォワードの4人となのははとフロイト、それにヴォルケンリッターがいた。

「あつー、ゼロさん。」

そして、はやての後ろにいたゼロにズバルが気付いた。その声に他のみんなもゼロの姿に気づく。

「ゼロ。」

「ゼロ。」

「迷惑掛けすみません。今日から、復帰することになりました。」

「

ゼロは、みんなに報告した。

「よかつたね、ゼロ君。」

「はい。」

それから、みんなで朝食を摂りはじめた。すると、テレビから政治関連のニュースが、流れるのが聞こえた。そして、画面には、地上本部総司令のレジアス・ゲイズが映っていた。

『魔法と技術の進化と進歩。すばらしいものではあるが、しかし、それがゆえに我々を襲う危機や災害も10年前とは比べられないものになつていて。兵器運用の強化は、進化する世界の平和のためにある。』

レジアスの演説に六課の面々がテレビに集中する。

『首都防衛の手は、未だにたりん。非常要請に対しても、我々の要請が通れば、地上の犯罪も発生率で20%、検挙率においては35%以上の増加を初年度から見込むことができる。』

「うーん、おっさんはまだ、こんなこと言つてんのな。」

「レジアス中将は、古くからの武闘派だからな。」

「あー、ミゼット提督。」

「ミゼット、何者やん？」

レジアスの後ろのほうに、3人の地位の高そうな人が座っていた。

「キール元帥とフィルス相談役も御一緒なんだ。」

「伝説の3提督。そろいぶみやね。」

その3人とは、はやての言つた通り、時空管理局の伝説の3提督と呼ばれる人たちだ。

本局統幕議長ミゼット・クローベル、武装隊榮誉元帥ラルゴ・キール、法務顧問相談役レオーネ・フィルス。3人は、時空管理局黎明期の功労者として伝説となっている。

「でも、こりして見ると、普通の老人会だ。」

「もう、ダメだよヴィータ。偉大な方達なんだよ。」

「管理局の黎明期から今の形まで、整えた功労者さんたちだもんね。」

「

なのはたちが、3提督を偉大な方達と尊敬しているような感じだが、1人だけその3人を睨み付けるように見ている者がいた。

（偉大な方達・・・功労者か・・・なら、なぜ助けてくれなかつた。）

「ん、ゼロ君。どうしたの？」

「え、あ、何でもありません。」

ゼロは、なのはに何でもないと言つと、朝食の続きを摑りはじめた。

それから、朝食を食べ終わり、みんなは仕事に向かつた。その時に、なのはから今日は、フォワードの4人は、お休みと聞かされた。何でも、これからティアナとスバル、エリオとキャロの2組に分かれて街へお出かけだそうだ。

そして、ゼロは今、なぜかライトニングの2人の見送りに来ていた。

「ハンカチ持ったね？IDカード忘れない？」

「えっと、大丈夫です。」

現在、エリオは、フェイトに着付けを直してもらしながら、キャロを待っている状態だ。

「あ、お小遣い足りてる？もし、足りなくなったら大変だから・・・」

（何、この親ばか？大方の事情を知ってるけど、これは行きすぎじゃ・・・）

フェイトの親ばかぶりにゼロは、呆れ気味だった。

「あ、あのフェイトさん。その、僕もちゃんとお給料を頂いていますから。」

「あ、そっか・・・」

「大丈夫です。ありがとうございます。」

「とりあえず、エリオは、男の子だしキャロより2ヶ月年上なんだから、ちゃんとエスコートしてあげるんだよ。」

「はい！」

「ヒリオくん。」

そんな時、ひょいとキャラ口が準備を終えてきたようだ。

「「あんなさい。お待たせしました。」

「あ、キャラ口。可愛いやつ。ねえ。ゼロ。」

「そうですね。可愛いやつ。キャラ口。」

「えへへ。ありがとひーりやーこます。」

「あと、仕事しますか。」

ヒリオとキャラ口を見送った後、ゼロは一人でスクに向かい仕事を始めた。だが、始めて早々に溜息を吐きたくなる状況になる。

「はあー、何でひつなるの？」

溜息を吐いている原因はまさかの出来事だった。何と謹慎している最中のゼロの仕事がそのままになっていたのである。

「誰か、やつておいてくれなかつたのか。」

ゼロが、受け持つているものは、特に急ぐようなものでは無いものばかりなので、誰も手を付けていなかつた。しかも、居なかつた時の分もそのまま、溜まつていたのでどんでもない量になつてゐる。

「これを1人でやるのか・・・鬱だ。」

愚痴を溢しながら、1人仕事を片付け始めるゼロだった。

第19話 六課の休日（後書き）

はい、第19話でした。どうも、Theaterです。

今回は、田舎？的な話になりました。

無事にゼロの謹慎も解けてよかつた。よかつた。そして、次回はいよいよナン

バーズも出てくるのかな？

出てきたら出てきたで、いろいろ大変そうですがね。主にゼロの立ち位置が

では次回、第20話で会いましょう。

第20話 休日の終わり（前書き）

短い休みが終わり。事件へと変わる。

第20話 休日の終わり

「ゼロゼロ。お願いします。」

「ゼロ。お願い。」

（何？この状況は……）

ゼロは、困惑していた。溜まりに溜まつた仕事を片付けていると、いきなりシャーリーとフロイトが来てお願いと頭を下げてきた。

「えっと、まず頭を上げて。事情を説明願います。」

「えつとですね。実は……」

シャーリーが、頭を上げて訳を話した。そして、お願いの理由は至つて簡単だった。それは、エリオとキャロのデートを見守つてしまこと言つ事だった。

「話しさわかりました。でも、なぜです？」

「や、だって、2人だけでお出かけなんて、やっぱ心配だし……何があるかわからないし……」

（親ばかキタ━━━━━）

「いや、2人がまだ、小さいからって過保護過ぎじゃない。それに、どう見たってシャーリーは、面白がっていなよつにしか見えない。

誰が見ても100%そつだと断言できるよつにゼロは、溜息を吐かずにはいられなかつた。

「ねえ、ゼロ。お願ひ。」

ゼロの手を両手で包んで、ひぬひるとした上田使いをしてきたフロイト。不覚にも、ドキッとしてしまつたゼロ。

「でも、仕事が大量にありますし……」

「それなら、私が代わりにやつておくから。ねつ」

「ううう……」

正直に言えば、そんな面倒なことは、やりたくないが、このフロイトをどうにかできる自信がゼロにはなかつた。

「わかりました。やります。」

「本当ー！あつがとうー！」

「それじゃあ、これ今日の予定表です。ステラに送りますね。」

シャーリは、そう言つて、ヒリオとキャラの今日の予定表のデータをステラに送つた。

「何? この予定・・・」

予定表を見たゼロは、呆れていった。それを、とても10歳の子供がするような事ではないものばかりだったからだ。

「10歳の子に何をそんな期待してんの?」

「良いじゃないですか。うまくいけばそれで。」

「はあ~、それでは、行つてきます。」

「ヒリオとキャラの事お願いね。」

気が進まないまま、ゼロは、ヒリオとキャラの後を急いで追いかけた。

その頃、エリオとキャロの2人は、レールウェイに乗っていた。

「そう言えば、キャロの竜つてフリード以外にもう、一騎いるんだよね？」

「うん。ヴォルテール、黒くてすごく大っきな竜。フリードは、私が卵から育てたんだけど、ヴォルテールは、アルザスの土地に着いている古い守護竜なの。だから、私の竜つて言つよりは、私がヴォルテールの横で力を貸してもらつてているというか・・・そんな感じ。」

「そつか。フリードみたいに紹介してもらえたうれしいけど、そんなに偉大な竜なら、わざわざ来てもらつて挨拶だけって訳にもいかないよね。」

「うん、大きさも大きさだし。ヴォルテールの力を借りるのは、本当に危険な時だけだから。でも、いつかきっと、紹介するよ。フリードもね、エリオ君のこと本当に友達だと思つてているみたいだから。」

「あは、うれしいな。」

「ヴォルテールとも、きっと仲良くできると感つ。」

エリオとキャロは、フロイトが心配するほど、子供ではなかつたみたいだ。2人仲良く休日を堪能していた。

そして、時間は再びゼロへと戻る。

フロイトのお願いにより、エリオとキャロを追いかけているゼロ。予定表を見ながら、2人を探していた。

「今の時間なら、たぶん公園にいるはずなんだけど・・・」

＜ マスター ＞

「ん? どうしたステラ?」

＜ ドクター ＞・スカリエッティから、通信です

「ドクターから、わかつたつないで。」

ステラが、通信をつなぐと空間モニターを映し出した。もちろん、人目につかない場所に移動して

『やせ、あ、ゼロ。謹ナシビツだい?』

「変わりないですよ。それよつ、ビツしました?」

『実はね、少しお願いがあつてね。』

（また、お願ひ・・・今度は何だ・・・）

立て続けのお願いにゼロは、多少嫌気が差していた。

『レリックに關して何だが。』

『レリック?』

『そ、そ、それが・・・』

『ん? ドクター、ちょっと待つて!』

『どうしたかね?』

『管理局からの通信です。これは、キャラから?』

『こちら、ライトニング4。緊急事態につき現場状況を報告します。サードアベニユーF23の路地裏にてレリックと思しき、ケースを発見。ケースを持っていたと思われる小さな女の子が1人。』

『女の子は、意識不明です。』

『指示をお願いします。』

キヤロは、六課にいるなのはたちに指示を仰いだ。

「スバル、ティアナ。ごめん、お休みは一旦中断。」

『はい！』

『大丈夫です。』

「救急の手配はこっちでする。2人はそのまま、その子とケースを保護。応急手当をしてあげて。」

『はい！』

「全員、待機態勢。席を外して子たちは配置に戻つてな。」

『はい。』

「安全確実に保護するよ。レリックもその女の子もや」

「はいです。」

はやての指示で、六課隊員が配置につく。

「それと、ゼロ。今ビビンぐる?」

『公園です。』

「なら、すぐにヒリオとキャラで合流して。」

『わかりました。』

フロイトに指示を受けてゼロは通信を切った。

「ドクター、女の子つて例の・・・」

『ああ、そういうことだ。すでに、ルーテシアとナンバーズにも動いてもらっている。君もうまくやつてくれたまえ。』

「了解。」

そう言って、スカリエッティとの通信を切った。

「さてと・・・行きますか。」

ゼロは、急いでエリオとキャロのトトと向かつた。

その頃、エリオとキャロは、女の子に応急手当をした後、応援が来るのを待っていた。

「ん・・・」

「・・・」

「エリオー・キャロー・

「スバルさん、ティアさん。」

すると、そこにスバルとティアナが、走ってきた。

「！」の子か。また、随分ボロボロに・・・

「地下水路を通つて、かなり長い距離を歩いて来たんだと思つんで
す。」

「まだ、こんなに少しちゃいのに。」

「はい・・・」

「ケースの封印処理は？」

ティアナは、エリオに聞く。

「キヤロがしてくれました。ガジェットが、見つける心配はないと
思います。それから、これ。」

エリオが、ケースを持ち上げて見せた。

「ケースがもう、1個あつた？」

ケースを見てみると、ここにあるケースの他にも少しあつたよ
うな跡があつた。

「今、ロングアーチに調べてもらつてます。」

「うーん。隊長たちとシャマル先生、リイン曹長がこっちに向かってくれてるそうだし。とりあえず、現状を確保しつつ、周辺警戒ね。」

「「はー。」

『そう、レリックが・・・』

「それが、小さな女の子が持つてた言ひのものも気になる。」

はやは、現在、聖王教会、教会騎士団長カリム・グラシアに通信をしていた。

「ガジエットや召喚士が、出でたら、市街地付近での戦闘になるべく迅速に確実に片づけなあかん。」

『近隣の部隊にはもう?』

そして、カリムのそばには、フェイドの義兄で、なのは、はやはと古い付き合いのクロノ・ハラオウンがいた。

「うん。市街地と海岸線の部隊には、連絡したよ。」

『ああ。』

「奥の手も、出さなあかんかもしれん。」

『そりながらない事を祈るがな。』

そして、一方、現場になのはたちが到着していた。すぐに、女の子をシャマルが診察する。

「うん。バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし。心配ないわ。」

『はい。』

『よかつた。』

「うん。みんな、お休みの最中だったのに・・・」

フロイトは、申し訳なく言つ。

「いえ。」

「平氣です。」

「ケースは、このままへりで運ぶから、みんなは、こつちで現場調査ね。」

「「「「はい。」」」

「それじゃあ、ゼロ君。この子をへりまで抱いてつてくれる。」

「わかりました。」

「あつ、ガジエット来ました！」

それから、少ししてガジエットの反応がきた。

「地下水路に10基ずつのグループで総数。 16・・20-」

「海上方面、12機体が5グループ。」

「多いな。」

「どうします?」

「そうやな・・・ん?」

はやてが、悩んでいると、通信がきた。

『スタート2からロングアーチへ。こちら、スタート2。』

通信してきたのは、ヴィータだった。

『海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かってる。それから、もう一人。』

『108部隊。ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですけど、そちらの事例とも関係がありそつなんです。参加しても、よろしいでしょうか?』

「うん。お願いや。ほんなら、ヴィータは、リインと合流。協力して海上の南北方向を制圧。」

『南西方向、了解です。』

「なのは隊長とフロイト隊長は、北西部から。」

『『了解。』』

「ベリの方は、ヴァイス君とシャマル、それにゼロ君に任せてくれ
か?」

『お任せあれ。』

『しつかり守ります。』

『了解です。』

はやは、みんなに指示を出す。

『ギンガは、地下でスバルたちと合流。別件の話も聞かせてな。』

『はい。』

ギンガは、急いで地下へと向かった。

「さて、みんな! 短い休みは堪能したわね。」

「お仕事モードに切り替えて、しつかり気合入れて行こう!」

「「はい！」」

じつして、束の間の休日が終わつた。

第20話 休日の終わり（後書き）

はい、第20話でした。どうも、Theaterです。

ナンバーズでませんでした。
まあ、予想通りと言つか何と言つか・・・。それより、ついにヴィ
ヴィオが出
て来たのに全く存在感がない。まあ、この先に活躍が控えているで、
今は我慢
だ！

それと、ゼロはへりに乗せる事にしました。地下に行かせるとルー
テシアと会
う事になってしまい、その辺がややこしくなりそうなので、こうな
りました。

たぶん、ゼロの見せ場はあまりなこと思つので、大人しくしてても
らいたいと
思います。

では次回、第21話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会い③（前書き）

ナンバーズ3の登場。

「で、何のようですか？」

ゼロは、スカリエッティに呼び出されていた。だが、すでにこのやり取りは、3回目。ゼロも、何となくわかっていた。

「ああ、妹を紹介しようと思つてね。」

「やつぱり、それで今回はどんな子ですか？」

「うん。入つてきました。」

スカリエッティに、呼ばれ1人の女の子が入つて來た。紫の髪をショートカットにしていて、2人の姉と比べると、戦闘向きと言つのが一目でわかるくらいの整つた体をしていた。

「彼女は、ナンバーズ3。トーレだ。」

「トーレだ。」

「ゼロだ。よろしく。」

ゼロが、差し出した手をトーレが握つた。すると、その瞬間トーレ

レが、一ヤツと笑みを浮かべた。

「どうした?」
「

「ゼロ。お前、かなり強いな。私と戦え。」
「

「えつー句で。」
「

「あんなじの勝負を申し込まれ、困惑づけ。だが、トーレはやる
気満々な様子だった。」

「や、やるやー。」
「

「えつと・・・ドクター?」
「

「うへん。トーレ、君のヒーローまだ、調整中だよ。それでも、やる
かね?」
「

「当然ー。」
「

トーレは、何が何でも、ゼロと戦いたいついで、自身のヒーローが未
調整でも、構わないらしい。

「わかった。相手になるよ。」
「

「やつでなくてはな。」

ソルジャーして、ゼロVSトーレの真剣勝負が始まった。

そして、一同は訓練場に移動した。

「兄さん。頑張れ！」

「ファイト。兄さん。」

観客にウーノとドゥーニが応援に来ていた。どちらも、新しい妹より、兄であるゼロの事を応援していた。

「さあ、始めようか。ゼロ。」

「ちょっと待て。ルールを確認する。まず、戦闘方法は、互いに素手だ。で、決着は、相手を戦闘不能にするか、ギブアップさせるか

だ。「

「いいだろ？」「

ゼロの提案したルールにトーレは、同意した。そして、ゼロとトーレは、互いに構えた。

「行くぞー！」

次の瞬間、トーレが、ゼロに向かって飛び出した。それをゼロは、動くことなく待ち構えていた。

「はあー！」

トーレは、右ストレートを繰り出した。

「ん！」

「なつ！」

ゼロは、避ける事もしないで、そのまま受けた。トーレは、ゼロが避けるなり、受け止めるなりするだろ？と思っていた。だが、トーレの攻撃は、ゼロの左頬をとらえていた。

「なぜ、避けない。」

「とりあえず、どのくらいの力か、試したかったんだ。」

「何だと・・・」

ゼロの言葉にトーレは、怒りを覚えた。

「まあ、それなりに強いが、俺には及ばないな。」

ゼロは、トーレの右手を掴んだ。そして、片手一本でトーレをあもこつきり投げ飛ばした。

「わあああー」

トーレは、訓練場の壁まで飛ばされ、激突した。

「かはっー。」

「おつと。ちよつとやりすぎたか?」

「何を・・・まだ、これからだー。」

トーレは、口元の血を拭い態勢を整えた。そして、ゼロを見て次の攻撃をどうするか考えた。

(もう、どう行く。ただ正面から行けば、もつきの一の舞。ならー。)

「 ん? 」

トーレは、もつきと同じように正面からゼロに向かって行った。そして、一気にゼロと距離を詰めて近接戦闘に持ち込んだ。そこからゼロとトーレの激しい拳と蹴りのラッシュが繰り広げられる。

トーレのその判断は、ある意味正しい。ゼロも、どちらかと言えば、近距離攻撃が主体のスタイルだが、素手での戦闘は、あまり得意な方でない。

(ぐつー…やり難いな。)

「 ほら、どうした? 防戦一方になつてゐるだー。 」

完全にくつつかれ、離れる事ができない。それどころか、トーレがノッてきて、ゼロを圧倒するほどになつてきていた。

「 これで、終わりだー。 」

トーレが、戦いを終わらせるため、必殺の一撃を放ってきた。その拳は、確実にゼロの鳩尾を狙っていた。いくら、ゼロでも零距離でそんな所を攻撃されれば、ただではすまないだろう。そして、無情にもトーレの拳は、ゼロを打ち抜いた。

「ふん。大したことなかつたな。」

ゼロを強いと聞いていたトーレだったが、こんな呆氣なく終わるようではどガツカリしていた。だが、戦いはまだ、終わっていなかつた。

「確かに、大したことないな。」

「なに！」

トーレは、信じられないと言った顔をしていた。それもそのはず、急所を打ち抜き、気絶したと思っていたゼロが、まるで何ともないと言つたののように平気な顔をしていた。

「どうしてだ・・・」

「自分で考える。」

トーレにやつづつと、ゼロは中腰に構え、右手に魔力を集中させた。

「おい！待て。素手の勝負と言つただろ！」

「素手だよ。けど、魔力を使つてはいけないって言つてないし。」

確かに、ゼロがルールを確認した時、魔力を使つてはいけないと
は言つてない。

「アクセルムーブ。」

ゼロは、素早くトーレの懷に潜り込み、強力な一撃を放つた。

「グフッ」

トーレは、自分よりもはるかに強力な一撃を受けて、倒れ込んだ。

卷之三

「起きたか?」

「わ、私は……ゼロ？」

「ああ、俺だよ。」

「何故、お前の顔がこんなに近い…………へつ！」

あれから、1時間ほどして、トーレが目を覚ました。そこで、トーレは不思議に思った。何で、ゼロの顔が自分の顔にこんなに近いのだろう。そして、周りをよく見てみた。すると、とんでもない事になっていた。

「何つて・・・ああ、膝枕の事か？」

そう、トーレはゼロに膝枕をされていたのだ。

「上」

「あ、待てって。まだ、寝てろ。」

「わっー。」

急いで、起きようとしたが、ゼロに抑えられてしまつた。

「ううううう。・・・

「はーはー。よじよし。」

トーレは、悔しさでいっぱいだった。負けただけではなく、こんな子供扱いされたこと。これが、ナンバーズ3、トーレとの出会いだった。

余談だが、トーレが膝枕をされている光景を見て、ヤキモチを妬
いている姉2人が居たとか居ないとか。

番外編 妹たちとの出会い③（後書き）

はい、番外編でした。どうも、Theaterです。

今回は、何と言うか・・・駄文だつたね
書いてて、ここまで酷いとは思わなかつた。これを教訓に次はちゃんとやります・・・たぶんね。

それと、次の番外編から、妹たちは何人か一気に出します。正直、1人1人出すのはメンドイ。

では、次回の番外編で会いましょう。

第21話 地下水路の戦い（前書き）

フォワードたちの戦いが今始まる。

第21話 地下水路の戦い

なのはたちと別れ、ヘリの護衛として、残ったゼロは、例の女の子を見ていた。

(この子が、ドクターの言つていた子か……)

「ん? どうしたのゼロ君?」

「い、いえ。何でもありません。」

「ぼーとしていたのをシャマル言われ、ゼロは慌てて何でもないと
言つて、誤魔化した。

「もう、ちゃんと聞いてなきゃダメよ。」

「はい。」

現在、ギンガが、ティアナ達と合流しようとして、しながら自分が追つていた事件の詳細を話していた。それをゼロは、ヘリの中で聞いていたのだ。

それで、ギンガによれば、事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポットがあり、その近くに何か重い物を引きずったような跡があつたそうだ。そして、それを辿っている最中に、この事件の連絡を受けたようだ。

『それと、この生体ポット少し前の事件でよく似た物を見た覚えがあるんです。』

『私もな・・・』

『人造魔導師計画の素体培養器。これは、あくまで推測ですが、あの子は、人造魔導師の素体として、造り出された子供ではないかと・・・』

「人造魔導師って？」

そして、その頃。フォワードの4人は、地下水路を移動しながら、今の話を聞いていた。

「優秀な遺伝子を使って、人口的に生み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる。それが、人造魔導師。」

「倫理的な問題はもううん、今の技術じゃどうしても、いろんな部分で無理が生じる。コストも合わない。だから、よっぽどうかしてる連中でもないかぎり、手を出したりしない技術のはずなんだけど。」

「あつー。」

< A movement reaction perception on, at the Gadget Drone. >

その時、キャロのケリュケイオンにガジェットの反応があつた。

「来ます！小型ガジェット6機！」

それを聞いて、4人は警戒態勢を取った。

「スタート1、ライトニング1、共に2グループを撃破。順調で

す。」

「うん。」

「スター・ズ2とリイン曹長も1グループ田を撃破。」

ここまでは、順調だつた。隊長陣が、海上のガジェットを次々に撃破して。だが、順調だつたのは、ここまでだつた。

「あれは・・・」

そこに来たのは、ガジェットの増援だつた。ヴィータとリイン、なのはとフェイト、それぞれの場所にさつきと同じくらいの数が、飛来してきた。

「！」の反応・・・

そして、その上空には、一つの人影があつた。

「ふふっ。クワットロのインヒューレントスキル、シルバー・カーテン。嘘と幻のイリュージョンで、まわつてもらいましょう。」

そこから、戦局が大きく変わった。ロングアーチが、ガジエットの航空反応が、以上に増大し、誤認ではないかと確認するが、すべて実機と出た。

「幻影と実機の混戦編隊。」

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね。」

「――」まで、派手な引き付けをするつてことは……

「地下かへりに主力が向かっている。」

なのはたちは、仮説を立てた。海上のガジエットは、ただの化
真の目的は、地下水道かへりの方ではないかと。

「なのは。私が、残つて、ここを抑えるから、ヴィータと一緒に。」

「ハヤシアゲやん?」

「コンビでも、普通に空戦してたんじゃ、時間が掛かり過ぎる。限
定解除すれば、広域殲滅でまとめて墮とせる。」

「それは、そうだけど・・・」

「何だか、嫌な予感がするんだ。」

「でも、フロイトちゃん・・・」

『割り込み失礼・・・』

なのはとフロイトが、そんな相談をしていると、突然割り込み通信が入った。

『ロングアーチからライトニングへ。その案も、限定解除申請も部隊長権限で却下します。』

「はやて！」

「はやてちゃん！何で、騎士甲冑？」

割り込みをしてきたのは、はやてだった。そして、はやては何故か騎士甲冑を着ていた。

『嫌な予感は、私も同じでな。クロノ君から、私の限定解除許可をもうつことにした。空の掃除は私がやるよ。ちゅうことで、なのはちゃん、フロイトちゃんは、地上に向かってゼロ君と一緒にヘリの護衛。ヴィータとリインは、フォワード陣と合流。ケースの確保を

手伝つてな。』

「「「解ー。」」

『君の限定解除許可が出せるのは、現状では僕と騎士カリムの一度ずつだけだ。承認許諾の取り直しは難しいぞ。使つてしまつていのつか?』

「こう変わって聖王教会。はやては、クロノに限定解除の許可を求めていた。

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するんはいややからな。」

『場所が、場所だけにＳＳランク魔導師の投入は、許可できない。限定解除は、3ランクのみだが、それでいいか?』

「Ｓ・・・それだけあれば十分やー。」

『はあー』

クロノは、溜息を一つ吐いた。

『八神はやて、能力限定解除3ランク承認。リリースタイム120分。』

「コモリトリース！」

はやての限定解除がされ、はやてに魔力が戻っていく。そして、はやての周囲が、白くまばゆい光で照らされていった。

「よし。久しぶりの広域遠距離魔法。行ってみようか。」

「ん？」

「どうしたの？ゼロ君。」

「何か・・・巨大な魔力反応が・・・」

ヘリで移動途中、海上の方で巨大な魔力反応を感じたゼロ。

「魔力反応。敵なの？」

「いえ。たぶん、」この魔力は、部隊長のだと思します。」

「はやてちゃんの？でも、ビリして……」

「確認しますね。ロングアーチへいかり、ライトニング5。」

ゼロが、ロングアーチへ通信を入れた。そして、ロングアーチからの返答はこうだった。

海上でガジェットが、幻術と実機の混戦編隊で増援してきた。そして、嫌な予感がすると、はやてが言つて、隊長陣を地下水路とへりに向かわせるために、自らが前線に出ることになった。その為に能力限定解除の許可を得て、3ランクリースしたそうだ。

「だそうです。」

「そういうことね。なら、」こののははやんとテスタロッサちゃんが来るのね。」

「そういふことですね。（ハ神はやてまで、出て来たか……これは、ヤバいかもしないな。）」

キャラは、内心落ち着かない気持ちでいた。

（うへん。念のため、ドールを放つておいてよかつたな。）

その頃、フォワードの4人は、無事にギンガと合流できていた。
そして、レリックが入ってるケースを探す。

「あっーありましたー！」

数分、探しingるとキャラが、ケースを発見した。

「ん？何この音？」

キャラが、ケースを発見すると同時に何が、ドンドンと音が聞こえてきた。そして、その音は真っ直ぐキャラへと向かった。

「あああああー！」

「ああああー！」

その音は、キャロに向かつて、数発の魔力弾を撃つた。だが、運よく直撃は避けられ、その後にエリオが音の正体を弾き飛ばした。

「何だ？」

最初は、姿を消していたのか、見えないでいた音の正体が、姿を現した。現したその姿は、人でない者だった。その者は、ルーテシアの召喚虫ガリューだ。

「あつー！」

そして、それに気を取られている隙にケースをルーテシアが拾つた。そして、キャロが取り返そつとルーテシアに近づいて行くと。

「邪魔……」

キャロに向かつてルーテシアは、魔力弾を放つた。

「あつ、 もやああああー。」

咄嗟にキヤロは、プロテクションで魔力弾を防ぐが、至近距離で放たれた為、プロテクションは砕け、吹き飛ばされてしまった。

「キヤロー！ ぐつ！ わあああー！」

吹き飛ばされたキヤ口を受け止めようとするエリオだつたが、勢いがあり過ぎた為、一緒に飛ばされ柱に激突した。

111

「うるわしいー。」

ガリューが、エリオとキヤロに追撃をしようとすると、だが、それをスバルが、防いだ。

「はあああ！」

そして、ギンガもガリューに一撃を浴びせて、2人から遠のかせた。

「……そこの女の子……それ、危険な物なんだよ。触っちゃダメ、」
「ううに渡して。」

「……」

ルーテシアは、そんな言葉は無視しようとしたが。

「！」めんね、乱暴で。でも、これ本当に危ない物なの。」

幻術で姿を消していたティアナが、ルーテシアの首元に魔力刃を突き付けていた。

「残念だけど。それは、できないよ。」

「えつ？きやあああ！」

それは、突然の事だつた。突然ティアナの横で声がしたと思つといきなり、ティアナは吹つ飛ばされた。

「だ、誰だ！」

「名乗るほどの者じやありません。」

ティアナを吹っ飛ばした奴は、全身を黒い服で、顔をフードで隠している男だった。そして、その男はルーテシアのそばまで行つた。

「大丈夫か？ ルー。」

「つたくもう・・・私たちに黙つて勝手に出かけちゃつたりするからだぞ。ルールもガリューも。」

「アギト・・・それに・・・」

ストップだよルー。今俺は、管理局側にいる。名前は言わないでね。それとここにいる俺は、ドールだから。

今ので分かるように、フードの男の正体は、ゼロのファミリアドールの分身だった。

うん。わかつた。

「さてと、やりますか。アギト。」

「おうよー！烈火の剣精アギト様が相手だ。お前ら、まとめてかかってこいやー！」

第21話 地下水路の戦い（後書き）

はい、第21話でした。どうも、Theaterです。

久しぶりにドールが、出てきました。次回こよによフオワードとのバトルが始まります。

でも、ドールマスターを使うわけには、いかないし。かと書いてデバイスも無い状態ですし、一体どうやって戦うんだドールよ。

それと、今まで分身人形を造る技名がありませんでしたが、適当に考えた結果

“リップロダクション”にしました。意味は、複写や増殖と言ったものがあるようなので良いかなと思ったので。

あと、動きを封じる時や操る時などに使った技は、“スレッド”にしました。意味は糸です。

では次回、第22話で会いましょう。

第22話 捕縛された人形（前書き）

地下水路から脱出し、いきなりピンチに。

第22話 捕縛された人形

「はっ！」

アギトが、スバルたちに向かって、炎を飛ばした。

「くつ！」

「わっ！」

だが、何とかスバルたちは、それを避けることができた。

「ん！」

「・・・」

アギトの炎が、巻き起こした土煙の中をガリューが突っ込んでき
た。

「はああー！」

そして、ギンガがそれを迎え撃つた。そして、威力はお互いに同

等だった為、どちらもダメージは無く互いに間合いを取った。

「なんのー。」

アギトは、せらりと炎の弾を撃つてきた。スバルたちは、それを避けながら柱の陰に隠れた。

「ティア、どうする?」

「任務は、あくまでケースの確保よ。撤退しながら、引き付ける。」

「ここに向かってる、ヴィータ副隊長とリイン曹長につまく合流できれば、あの子たちも止められるかも。だよね?」

「そう。」

よし。なかなかいいぞ。スバルにティアナ。

これから動きを確認していると、急に念話が聞こえてきた。

「ヴィータ副隊長!」

念話の相手は、現在こっちに向かっていたヴィータだった。

私も一緒に、2人とも、状況をよく読んだナイス判断ですよ。

ヴィータ副隊長、リイン曹長、今どちらに？

ヴィータと行動を共にしていたリインもその場にいた。リインは、ティアナとスバルのこの状況下での判断を褒めた。そして、エリオが2人が今どこにいるのか聞いた。

「ん？ ルール。何か近づいて来てる。魔力反応、でけえ！」

(この、魔力は・・・ヴィータとリインか・・・意外と早かつたな。

ドールとアギトが、ヴィータとリインが近づいて来ているのを感じ取った。

「アイゼン！」

^
G i g a n t f o r m .
>

「行くぞ、リイン！」

「はいです！」

「おつかれませー。」

ヴィータは、地下水路の壁を叩き壊した。それにより、その場にいたフォワードたちとルーテシアたちは、何事かと焦った。

「捕りえよ、凍てつく足枷。」

そして、リインが壁を壊した際にできた瓦礫の山から飛び出してきて、ルーテシアとアギトに狙いを定めた。

「フリーレンフホッセルン！」

リインは、氷の捕縛魔法を使った。それにより、ルーテシアとアギトと周りの水分が瞬時に凍結され氷の中に閉じ込められてしまった。

「ぶつとべーー！」

「・・・」

リインに続いて、ヴィータも飛び出してきて、ガリューを吹つ飛ばした。

「おお、待たせたな。」

「みんな、無事でよかったです。」

「それは、どうでしようね。」

一人、ドールだけはリインの捕縛魔法も、ヴィータの攻撃も、受けず、そのまま場で立っていた。

「お、お前はあの時のー。」

「久しぶりですね。」

ヴィータが、ドールを見て驚いていた。それは当然の事だ。そこにいたのは、ホテル・アグスターであつた召喚士だつたのだから。

「今度こそ逃がさねえぞー。」

「残念ですけど、それはできませんよ。」

「何！つておい！待てー。」

ドールは、そのまま「転移魔法」を使って、その場を離脱してしまつた。

「くっ！逃がすか！」

「ヴィータちゃんー待ってください。」

「何だよ、リイン。」

ドールを追うとすると、リインに呼び止められた。

「逃げられたです。」

リインは、そう言い捕縛魔法を解いた。すると、そこには捕らえられたはずのルーテシアとアギトは居ず、かわりに大きな穴があいていた。

「何！」

ヴィータは、すぐにガリューを吹っ飛ばした方を見た。すると、そこには同じように穴があいており、ガリューの姿はなかった。

「くそ！・・・って何だ！」

逃がした事を悔しがっていると、今度は突然地鳴り起きた。

「大型召喚の気配があります。たぶん、それが原因で・・・」

「ひとまず、脱出だ。スバル！」

「はい！ ウイングロード！」

スバルは、ヴィータに言われ、ウイングロードをヴィータが空けた穴に螺旋状に伸ばした。

「スバルとギンガが先に行け。あたしは、最後に飛んでいく。」

「「はい！」」

スバルとギンガは、言われた通りウイングロードを先行した。

「キャロ。レリックの封印処理お願いできる。」

「あ、はい。やれます。」

「ちょっと考えがあるんだ。手伝つて。」

「はい！」

脱出を前にティアナは、キャロにレリックの封印処理を頼んだ。何か考えがあるらしく、さっそく封印に取り掛かった。

「ダメだよ、ルール。これは、まずいって。埋まつた中からビリやつてケースを探す？あいつらだって局員とはいえ、潰れて死んじやうかもなんだぞ。」

「あのくらこのレベルなら、これくらいじゃ死なない。」

リインの捕縛魔法を抜けて、地上に出たルーテシアたち。ルーテシアは、そこで、地震を起こすことができる召喚虫、地雷王を召喚していた。

「ルーの言つ通りだ。この程度では死はない。」

そして、転移魔法で離脱したドールも、そこにいた。

「ケースは、後でクワットロとセインに頼んで探してもいい。」

「よくねえよ、ルール！あの変態医師とナンバーズ連中と関わっちやダメだって、ゼストの田那も言つてただろ？あいつら、口ばつかりうまいけど、実際とこり、あたしたちの事なんて、せいぜい実験動物くらいにしか……」

「そんな、つもりは無かつたんだけど……」

「あつー、ゼロは、違うー、ゼロは、あこつらと違つて信用していいよー！」

「そうか、それはありが……」

ドールが、言い終わる直前にビーンと大きな音がした。

「やつちまつた……」

「ひや、完全に地下水路が崩れてしまつたようだつた。

「ガリュー、戻つていいよ。アギトとゼロのドールが居てくれるから。」

「……」

ガリューは、ルーティアの言つ通り戻つた。

「地雷王も・・・ん？」

ルーテシアは、地雷王も戻つて良いと言ひとした瞬間、地雷王の体内にチーンバンドが掛けられた。

「な、何だ？」

「どうやら、来たみたいだな。ルー、こいつが。」

「えつ？」

「！」の「オラ！」

ドールは、ルーテシアの手を引っ張り自分の方へ引き寄せ飛んだ。すると、直後にルーテシアのいた場所に魔力弾が、通つた。

そして、すぐにアギトが反撃に炎弾を撃つた。それに続いて、ルーテシアとドールも飛びながら、魔力弾を撃ち反撃に出た。だが、それらは全て、避けられてしまった。

「よつと。」

ドールは、ルーテシアを抱えながら、地面に降りた。

「うと・・・」

だが、降りた直後、ドールとルーテシアにエリオが、ストラーダが向けた。一方、アギトはリインのフリジットダガーに囲まれていた。

「リリまでです。」

「くつー！」

リインは、ルーテシア、アギト、ドールの3人にリングバインドを掛けた。そして、アギトは、ゆっくりと地面に降りて行った。

「子供苛めてる見てえで、良い気分はしねえが、市街地での危険魔法しょうに公務執行妨害、その他諸々で、逮捕する。」

「ちなみに、子供と言つのは、私も含まれるのですか？」

「んなわけねえだろー！」

ドールの言った冗談に、結構本気でキレたヴィータだった。

第22話 捕縛された人形（後書き）

はい、第22話でした。どうも、Theaterです。

今回は、まあこれと書いて特に何も言う事はありませんね。
それと、ナンバーズがなかなか出て来なかつたんですけど、次回は今
度こそ出で
きます。

では次回、第23話で会いましょう。

へつは、一体どうなるのか？

第23話 奇跡の生還

ある廃ビルの屋上に2人の女の子がいた。1人はメガネを掛け、髪を2つに結んでいて、もう1人は、長い髪を1つに結んでいて、何か棒状の物を持っていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる?」

「うん。遮蔽物も無いし、空気も澄んでる。よく、見える。」

そこにいたのは、ナンバーズ4のクワットロとナンバース10のディエチだった。ディエチは、左目のスコープでヘリを見ていた。

「でも、良いのかクワットロ、撃ちやつて? ケースは、残せるだろうけど、マテリアルの方は、破壊しちゃう事になる。」

「ふふ。ドクターヒウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしないから、大丈夫だそうよ。」

「ふうん。」

ディエチは、額ぐと棒状の物を覆っていた布を取った。そして、現れたのは、ディエチの固有武装イノーメスカノンだった。

「ん？」

『クワットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさん、それと何故か、兄さんのドールが、捕まっているわ。』

「ああ、そう言えば、例のチビ騎士に捕まつてましたね。」

ナンバーズーのウーノから通信がきた。

『今は、セインが様子を覗つてゐるけど・・・』

「フォローします？」

『お願い。』

クワットロにフォローを頼むとウーノは通信を切った。

セインちゃん？

はいよ～、クワ姉。

「これから、指示を出すわ。お姉様の言つ通りに動いてね。

う～ん、了解。」

そして、一方、捕まつたルー・テシアたちは、ヴィータたちにいろいろ聞かれていた。

はあ～い、ルーお嬢様、お兄様。

クワットロ・・・

どうした？ 何か用か？

そこへ、突然クワットロから念話がきた。

何や～パンチのよ～いで、お邪魔でなければ、クワットロがお手伝いします。

お願ひ・・・

はあ～い！ では、お嬢様、クワットロの言葉をその赤い騎士に・・・

クワジトロは、とても怪しい顔でルーテシアに言った。

「ん！」

「ゼロ君、今度はさじうしたの？」

「高エネルギー反応・・・」

ゼロは、何処からか高エネルギー反応を感じ取った。そして、目を瞑り、ヘリの周囲の気配を探つた。

（何だ？このエネルギー反応は・・・どうかで覚えがあるようなな・・・
・あつー）

ゼロは、高エネルギー反応が、どこかで覚えがあるような感じがあつた。そして、記憶を辿つて行くうちに、ある事に思い当たる。（まさか・・・ヘヴィバ렐か！冗談じゃない、いくら俺でもあれを受けたらただじやすまない。）こうなつたら・・・

ゼロは、ヘヴィバーレルを何とかしようとある事を始めた。

「インヒューレントスキル・ヘヴィバーレル発動。」

「逮捕はいいけど。」

ディエチは、自らのエリを発動させ、ヘリに狙いを定めた。そして、そのままクワットロが、ルーテシアに言葉を伝えていた。

「逮捕はいいけど・・・」

ルーテシアは、クワットロの言つた通りの言葉を復唱した。

「大事なへりは、放つておいていいの?」

「な!」

「あー。」

その言葉にヴィータたちは、驚きの声を上げた。

「後1-2秒。11、10。」

「ああ、お嬢様。もう、一言追加いいですか？」

クワットロは、ルーテシアに言葉の追加を頼んだ。

「あなたは、また守れないかもね。」

「くつーー！」

その一言にヴィータが絶句する。そして、あの雪の日の記憶が蘇つてきた。

「発射。」

そして、ヘリに向かってヘヴィバ렐が発射された。それを見ていたロングアーチのオペレーターたちやヘリの護衛に向かっていたのはとフェイト、そして、海上にいるはやても、誰もがその光景を黙つて見ている事しかできぬでいた。

「くつー間に合えー！」

ゼロが、動くが無情にもヘヴィバ렐はヘリに着弾した。

「砲撃・・・ヘリに直撃・・・そんなはずない。状況確認っジャミングが酷い。」

ロングアーチが、ヘリの状況を確認しようとするが、確認できない。

「そんな・・・」

「ヴァイス陸曹とシャマル先生、それにゼロさんが・・・」

砲撃が、ヘリに直撃したと聞いたティアナたちは、唖然とした顔をしていた。そして、その横では、ドールが、何かを感じ取った。

「ん？・・・ルー。」

「何？」

「お別れです。また、会いましょう。」

ドールが、ルーテシアにそう告げると、体がだんだんと透けて行つて、最後に光の粒子になつて消えた。

「えつ！ 消えた？」

「てめえ！」

ヴィータが、ドールが消えた直後、ルーテシアに掴みかかった。

「ふ、副隊長、落ち着いて！」

「うるせえ！ おい！ 仲間がいんのか？ どこにいる？ あいつは、どこに消えた？ 言え！」

「ん！」

ヴィータが、ルーテシアを問い合わせていると、ギンガがエリオの後ろに何かが居るのを見た。

「エリオ君！足元に何か！」

「えつ？あつ！」

「いただき！」

突然、地面から女の子が飛び出してきて、エリオが持っていたケースを奪つた。そして、そのまま地面に潜つて行つた。

「くそー！」

その女の子を追つとみんなが、ルーテシアから田を離した。

ルーお嬢様、ナンバーズ6番セインです。私のエディープダイバーで、お助けします。フィールドとバリアをオフにして、じつとしてくださいね。

うん。

「よつと。」

「なつー」「こつー。」

ルーテシアが、じつとすると、足元からセインが出てきてルーテシアに抱きついた。そして、ヴィータたちがそれに気が付いたが、一瞬遅く逃げられてしまった。

「アギトは？」

「ああ、アギトさんなら、わたくしの一瞬で離脱しました。さすが、良い判断です。」

そう言つて、セインとルーテシアもその場から、離脱した。

「反応リストです……」

「ぐわー、ロングアーチ、ベリは無事か……あにつら、墜ちてねえよな？」

「つぶふのふ~。じい、じの完璧な計画?」

「黙つて。今、命中確認中。」

クワットロが、鼻歌を歌いながら計画の完璧さに酔つていた。対してディエチは、ヘヴィバレルが着弾した後のヘリの様子を覗つていた。着弾した際の煙がヘリを覆つっていたが。だんだんと晴れて行き、その姿が現れようとしていた。

「あれ・・・ヘリの姿ない。」

煙が、完全に晴れるが、ヘリの姿がどこにもなかった。

「嘘でしょ。まさか、ディエチちゃん、跡形もなく消し飛ばしかやつたの?」

「そんなわけないだろ!一フルパワーで、撃つたわけじゃないんだから、跡形もなくなんて。」

クワットロとディエチが、そんな事を言い争つていた。すると、どこからか声が聞こえてきた。

「ロングアーチ及びスターズ、ライトニングヘ、ヒカルハイテイング5。ヘリへの砲撃を回避することに成功。」

「え、ゼロ君ー?」

「なのははー上ー。」

ゼロの声が聞こえてきたが、ヘリの姿を確認できないでいたなのは。すると、フェイトが空を見上げて言った。
なのはは、言われた通り、空を見上げるとかにこは、遙か上空にヘリが飛んでいたのだ。

「はあー、死ぬかと思った・・・」

「私も・・・」

ヘリを操縦していたヴァイスと女の子を見ていたシャマルは、ぐつたりとしていた。

「間一髪でしたね。」

「ゼロ君。一体何をしたの?」

「ただの転移魔法ですよ。」

「う、ゼロがやったのはただの転移魔法だった。ヘヴィバーレルが当たる寸前にゼロは、転移魔法を発動させ、ヘリを回避させていた。しかし、ヘヴィバーレルが発射されるまでの僅かな時間では、このヘリの質量を転移させるほどの術式を完成させる事は非常に難しいことだった。なので、ゼロはあえて、転移座標を無視して、とにかく回避する事に集中した。

それによって、結果ヘリは元居た場所から、遙か上空に転移したのだ。

「でもそれって、場合によつては、とんでもない所に転移していた事も考えらるんじや……」

「やうですね。もしかしたら、いきなり地面とか、転移してすぐ目の前にビルがあつて激突とかあつたかもせんね。」

「……」

「ま、結果オーライですよ。」

そんな恐ろしい事を何事もないような感じで話すゼロにシャマルは、少し恐怖した。

第23話 奇跡の生還（後書き）

はい、第23話でした。どうも、Theaterです。

へりは、無事でした。まあ、当たり前かな。
でも、転移魔法で回避するって、可能なんですかね。瞬間移動とか
と違つて、
あんな短い時間で発動するとか。

では次回、第24話で会いましょう。

第24話 敗北のナンバーズ（前書き）

ケースを奪われたフォワードたち、だが……

第24話 敗北のナンバーズ

「あら~」

「避けられたー・マジで!」

遙か上空で飛んでいるヘリを見て、あり得ないと言つた顔をしていた、クワットロとディエチ。

「計画、失敗かしら・・・あら?」

すると、クワットロとディエチがいる廃ビルの屋上に金色の魔力弾が飛んできた。2人は、魔力弾が当たる寸前に、別の廃ビルに飛び移つた。

「見つけた!」

「あつー・じつちもー!」

「速い!」

飛び移つて、安心したのも束の間。そこには、素早くフヨイトが、来て2人を捕縛しようとする。しかし、捕まるわけにはいなかい、クワットロとディエチは、さらに逃走をした。

「止まりなさい！市街地での危険魔法使用及び殺人未遂の現行犯で逮捕します。」

フェイトは、2人を飛んで追いながら、自分の周りにスフィアを展開した。

「今日は、遠慮しておきます！IS発動シルバーカーテン。」

対して、クワットロは空を飛びながら、ディエチはビルの間を跳びながら、逃げていた。そして、クワットロは、自らのISを発動させ、自分とディエチの姿を消した。

「あつーはやて！」

「位置確認。詠唱完了。発動まで後4秒。」

「了解。」

フェイトは、何故かその場から離れて行つた。

「離れた？何で？」

「まさか・・・」

クワットロは、何か嫌な予感がして、上空を見た。すると、そこには、巨大な魔力の塊のような物があった。

「広域空間攻撃！」

「うつそ〜ん。」

その正体は、はやてが、誇る広域殲滅魔法の一つ。

「遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・ヒミッショーン」

次の瞬間、はやてのデアボリック・ヒミッショーンは、一気に範囲を広げて行き、クワットロとティエチを飲み込もうとした。

「「ああああああああー。」」

飲み込まれないよう、必死に逃げるクワットロとティエチ。途中から、クワットロがティエチを抱えて飛んだ。

to have in danger of escape .>

「ん！」

だが、2人が逃げた方向には、フェイトが先回りしてた。

< Knockout by buster . After tha
t , arrests it .>

そして、その後ろには、なのはがいた。クワットロとデイエチは、完全に包囲され、絶体絶命のピンチに陥った。

「デイエチ、クワットロ、じつとしている！」

「「あつ」

「EIS発動ライドインパルス。」

そこに、デイエチとクワットロに話しかける者がいた。紫髪のショートカットにEISを使う。それらが、該当する者は限られてくる。

「トライデント・・・スマッシュヤー！」

「エクセリオン・・・バスター！」

フロイトとなのはは、カートリッジをロードし、ティエチとクワットロを挟み込むよ、砲撃魔法を撃ちこんだ。

「やつた！」

「エンドー！」

その様子を見ていた、ロングアーチの面々は歓喜の声を上げた。

「じゃない、避けられた！」

「直前で救援が入った。」

「アルト。追つて！」

「は、はい！」

「ふ〜、トーレ姉様、助かりました。」

「感謝・・・」

「ぼーと、するなやつを立て。馬鹿者共め。」

「ほんと、馬鹿者だな。」

「えつ?」

ナンバーズ3トーレのおかげで、何とか窮地から脱することができたクワットロとティーハチ。安全圏まで逃げたところで、一旦止まる。そこで、クワットロとティーハチは、トーレに感謝した。そして、トーレがセツセツと立つたところで、後ろからいきなり声が聞こえた。

「ゼ、ゼロ兄兄・・・」

「ゼロ兄様・・・」

「よひ。クワットロにティーハチ。」

そこに居たのはゼロだった。ステラを肩にトントンと吊きながら、座り込んでいるクワットロとティーハチを見ていた。

「わわわわ、よくもやつてくれたな。」

「えっ、さつさつて・・・まさか・・・」

「さうだよ。ヘリに乗つてたんだよ。」

「ああ、痛い痛い！やめて、ゼロ兄・・・」

「やめてください！痛いです、お兄様！』

ゼロは、クワットロとディエチの頭をグリグリとした。そして、しばらくした後、2人を解放した。

「まつたぐ。」

「で、何でお前がここにいる？」

「一応、心配して来てやつたんだが・・・いらなかつたか？」

ヘリの中から、クワットロとディエチになつてているのを見ていたゼロ。助けようにも、今は管理局の人間を演じている。表だつて助けるわけにもいかず、黙つて見ていることしかできなかつた。

しかし、そんな時、2人を助けて逃げるトーレの姿を見た。それを見たゼロは、犯人を追うと言つてヘリから、ここまで来たのだった。

「うう・・・酷いよ、ゼロ兄・・・」

「本当にです・・・」

「先に酷い事をしたのは、お前らだろ。それにディエチはともかく、クワットロ。お前、俺がへりに乗つてる事知つてたろ?」

「えつー。」

ゼロに言われ、クワットロはギクッとした。どうやら、図星のようでもクワットロは、そっぽを向いて、聞こえないと黙つ態度に出でいた。

「えつー。やうなのクワットロー。」

「わあー、何の事や、らー。」

ディエチが、クワットロに聞くとクワットロは、恍けて見せた。

「まあ、いいけど。それで、レリックは結局どうなったんだ?」

「レリックなら、お嬢と一緒にセインが回収した。」

「ああ、セインも来てたのね。いつも間にか、ドールが消えててルーとアギトがどうなったのか気になつてたから、よかつた。」

「なら、私たちはそろそろ行くぞ。」

「うふ。他の連中にもよろしく言つてくれ。」

トーレたちとゼロは、そこで別れた。

そして、ゼロはへりに戻つて、引き続き護衛の役目をした。その後、ヴィータ達がレリックを奪われ、任務失敗で落ち込んでいるかと思っていたが、何とレリックが奪われていなかつたとゼロは聞いた。

何でも、ティアナのシルエットで、レリックに細工をしていたらしい。

「それじゃあ、あいつら今頃、空っぽのケースを開けて、驚いているのかな?」

ゼロは、妹たちが空のケースを開けて、目を丸くしているのを想像して、少しだけ笑つてしまつた。そして、例の女の子はと云つて、聖王病院に運ばれ、手当を受けているそつだ。

「あの子が、こつちにいるとなると・・・面倒なことになりそつだな。」

「の先、訪れるであつた戦いにゼロは、溜息を吐ききつたなる。

第24話 敗北のナンバーズ（後書き）

はい、第24話でした。どうも、Theaterです。

今回ば、これと書いたことはあつません。

では次回、第25話で会いましょう。

第25話 人形使いの意外な特技（前書き）

なのはの代わりに、ヴィヴィオの相手をすることになったゼロ。

第25話 人形使いの意外な特技

生まれた時の事なんて覚えてないし。人間で言う親、マイスターが誰かなんて事私は知らない。ただ、静かにたぶん随分長い間、眠つてただけ。

気が付けば、白い部屋で実験動物。

自分が、何の為に生まれたのかが、わかつてただけに辛かった。生まれた意味を何一つ果たせないまま、死ぬ自由さえ無く、苦しいまま。いつか、心と体が壊れて終わるんだって思つてた。

それが、変わったのは。

何か酷くごつごつした手の平と小さな女の子、そして、冷たい目をした奴が、あたしの前に現れてから。

「何だ？」

「置いてつちやうの？」

「あれは、古代ベルカ式、レプリカではない純粹の融合機だ。火災に気づいてやつてくる局員が、見つかれば、丁重な保護を受けるはずだ。」

「そこでも、また実験動物？」

「見つける局員次第だな。良い奴に見つかれば、幸せになれるだろ

うし、悪い奴に見つかれば、実験動物だらうな。」

「JURIの連中にほど、酷いものではない。そつ、思いたいがな。」

男と青年は、互いに溜息をもらす。

「ゼスト、ゼロ、連れてってあげよ。」

女の子は、融合機の子を拾い上げた。

「いいのか？」

「うん。JURIの子もきっと、私たちと同じだから。」

「はつー。」

まだ、日が昇り切つてない明け方、アギトは田を覚ました。

「うへへへー！嫌な夢だ。」

アギトは、ルーテシアの懷から飛び出し、空へと上がつて行った。

（あんな夢を見たのも、あこづらのせいだな。）

昨日のヴァーダたちの事を思い出す。

（氷結魔法を使つていた、変なばつてんマークを着けてた白い融合機。たぶん、あいつのロードは、赤い騎士。あいつは、ロードのいない融合機の寂しさなんて、知らねんだるつな。くつー。）

リインの事を考えていると何かイライラしてきた。

「くつーーー何かムカつくーーあの、ばつてんチジめー今度会つたら、絶対燃やしてやるー」

「マテリアルか・・・プロジェクトF、人造魔導師・・・ビームで、命を弄ぶ氣なんだ・・・」

ゼロは、隊舎の廊下を歩きながら、呟いていた。

「はあ～、あんな小さな女の子が、鍵とはな。世界は、いつまで経つても・・・ん？」

ゼロは、何かに気が付いた。

「みんな、集まつて何を？」

ゼロの行く手には、なのはとフォワードが、集まっていた。ゼロは、何かと思い近づいて行つた。すると、泣き声が聞こえてきた。

「あれは、マテリアル？」

泣き声の主は、例の女の子だった。ゼロは、咄嗟に震れ、気配を消した。

「何をやつてんだ？」

ゼロは、その様子を見てみた。女の子は、なのはにしがみ付き、行っちゃ やだと言つて泣いていた。なのはとフォワードの4人は、どうしたらいいか分からず、あたふたしている。

すると、そこへフロイトとはやてから通信が入った。フロイトとはやても、その状況を見て?を浮かべていた。そして、フロイトとはやては、すぐになのはの下へとやつてきた。

「エースオブエースにも、勝てへん相手は居るもんやね。」

フエイトちゃん、はやてちゃん、あの助けて・・・

「スバル、キヤロ、とりあえず離れて落ち着こか。
離れて休め。」

「あ、はい・・・」

そこへ、フュイトが女の子に近づいて行つた。そして、田線を女の子に合わせて、うさぎのぬいぐるみを手に取つた。

「んにちは。」

「えつ？」

「この子は、あなたの友達？」

「ヴィヴィオ、いらっしゃフヒイトさん。なのはさんの大事なお友達。」

「ヴィヴィヴィオ、どうしたの？」

フロイトは、やせじへ話しかける。

「ん・・・」

「りあえず、病院から連れて來たんだけど、何か離れてくれないの。」

ふふつ、懐かれちゃったのかな。

それで、フォワード陣に相手してもいいかと思つたんだけど・・・

なのはは、フォワード陣を見る。

すみません・・・

ふふつ、いいよ任せて。

フロイトは、自分が何とかすると囁いた。

「ねえ、ヴィヴィオは、なのはさんと一緒にいたいの？」

「うん。」

「でも、なのはさん大事な御用で、お出かけしなきゃいけないのに、ヴィヴィオが我儘言つから、困つかけやつてるよ。この子も、ほら。」

フロイトは、うさぎのぬいぐるみに困つたポーズをさせた。すると、突然ふしきな事が起つた。

《うん。私も困っちゃうな。》

「 」「 」「 」「 」「 」「 」「 」

「わらわのぬいぐるみは、突然動き出した。

《ヴィヴィオは、なのはさんを困らかしたい訳じゃないんだよね。だから、私と一緒に良い子で待つよ。》

ぬいぐるみは、そのままついでヴィヴィオの頭の上に乗つた。

「えつー何で、ぬいぐるみが勝手に動いてんの?」

「何で? どうして?」

「はあ～、ゼロ君頑張るんだやね。」

「バレてましたか・・・」

ゼロが、苦笑しながら出ってきた。

「ゼロさん・・・ああー、ゼロさんのレアスキルー！」

「その通り、デーリマスターだよ。ほひ。」

ゼロは、手を動かして、ぬいぐるみを自分の肩まで移動させた。

「あーー。」

「ヴィヴィオは、ぬいぐるみを追いかけて、ゼロの下まで来た。ゼロは、フロイトと回り回りに田線を合わせると、それをくわいヴィオの頭を撫でた。

「ねえ、ヴィヴィオ。なのはさん、これからお仕事があるんだ。だから、お兄ちゃんと一緒に遊ばないかな？」

「一緒に？」

「やあ、一緒に。もちろん、この子も一緒に。」

ゼロの肩で座っていたぬごぐるみが、ヴィヴィオの頭に飛び移った。

「わあー、うふー。」

ヴィヴィオは、すでに涙を引っ込めて、眩しそうに笑顔を見せていた。

「では、隊長方、今の「うふ」。

「うふ。あっがとうゼロ君。」

ヴィヴィオの握手をゼロに任せ、なのはたちは聖王教会に向かった。

「「あんね、お騒がせして。」

「いやー、ええもん見せてもらひたよ。」

「うーん。」

聖王教会に向かっての中、なのはな、やつやの事を謝った。

「でも、ゼロ君があんな事するなんなんてな。意外やわ。」

「そんなこと思ひにさび、ゼロって結構優しいことあるし。」

「それで、あの子はどういうか? 何ない、教会に預けとくんでええけど。」

「平氣。帰つたら、私がもう少し話して、何とかするよ。」

「やつや?」

なのはが、ヴィヴィオを何とかすると言い出した。

「今は、周りに頼れる人が居なくつて、不安だと思つから。」

「それじゃあ、ヒリオ、キャロルもひりもひつていー?」

「「はいーーー」」

なのはたちが、行つた後、ヴィヴィオの相手をエリオとキャロに手伝つてもうおつとゼロが、2人に頼んだ。

「それと、ティアナ、スバル。」

「はい?」

「悪いけど、エリオとキャロの分の仕事を引き受けてもうつていいかな?」

「はい! いいですよ!」

「ゼ、ゼロさん! そんなことしてもうつては・・・」

「アリですよ。」

ゼロの発言に慌てるエリオとキャロ。

「いいって、エリオ、キャロ。おもりを押し付けちゃう代わりだから。ねつ」

「で、でも。」

「はい。さつさと行つた行つた。」

スバルに背中を押されて、ゼロの後ろを付いて行った。

「それで、ゼロさんどこに行くんですか？」

「う～ん。とりあえず俺の部屋に行こう。たぶん、ヴィヴィオが喜んでくれそうな物があるし。」

そういう事で、一同はゼロの部屋に向かい始めた。

第25話 人形使いの意外な特技（後書き）

はい、第25話でした。どうも、Theaterです。

ドールマスターでこれをやつてみたかったです。ちょうど、Vi
Viのク

リスみたいな感じに動かすのを。

ちなみに、声なんですけど、表向きは魔法で変えて話していると言
う事にして
おいて実際は、戦闘機人なんで声帯をコントロールして変えている
ことしたい
と思います。

そして、次回はゼロの子守りの様子をやりたいと思います。ヴィヴィ
イオが喜ん
でくれそつなものとは一体何なのか？

えへ、あまり大したことはないので、期待はしないでください。

では次回、第26話で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333w/>

魔法少女リリカルなのはStrikers~No. Zero~
2011年11月27日20時55分発行